

富 田 遺 跡 群
西 大 室 遺 跡 群

土地改良事業実施地区内埋蔵文化財発掘調査概報

昭 和 5 6 年 度

前 橋 市 教 育 委 員 会

目 次

序

例 言

富田遺跡群

I	概 説	1
II	発掘調査の概要	3
1.	遺構及び遺物	3
2.	発掘調査の経過	3
3.	住居跡	4
4.	古 墓	6
5.	その他の遺構	11
(1)	女 墓	11
(2)	ピット	11
(3)	井戸跡	11
(4)	溝状遺構	12
(5)	道 跡	12
6.	ま と め	12

西大室遺跡群

I	概 説	14
II	発掘調査の概要	16
1.	遺構及び遺物	16
2.	発掘調査の経過	17
3.	住居跡	18
4.	古 墓	48
5.	周溝墓	50
6.	元城跡	52
7.	その他の遺構	54
(1)	墓 墓	54
(2)	ピット	55
(3)	溝状遺構	55
(4)	掘立柱建物跡	55
(5)	小鍛冶跡	56
(6)	井戸跡	56
8.	梅の木地区	57
9.	ま と め	67

序

近年農地の効率的利用を図るための土地改良事業が大きな規模で進められています。このような開発事業と埋蔵文化財の保存という事は常に難しい問題を含んでおり、前橋市教育委員会においても、文化財保護という立場から、この問題に取り組み、両者の調整に努力しております。

ここに報告する富田遺跡群発掘調査、西大室遺跡群発掘調査についても昭和54年度から実施され、今年度で3年目となる長期にわたる事業であります。なお富田は、今年度をもって土地改良が完結しましたので発掘調査も終了となります。

調査の結果、富田遺跡群では、古墳および古墳時代から平安時代の堅穴住居、中世女廬遺構、西大室遺跡群では、弥生時代から平安時代の各時代にわたる堅穴住居、周溝墓、古墳、中世の墓壇と城跡等、これらの地域の歴史を解明していくにあたって貴重な資料が数多く得られました。ここにその成果の一端を報告いたします。

この調査を実施するにあたり、終始御協力いただいた農政部土地改良課、富田南部土地改良区、西大室土地改良区の方々、また酷暑、酷寒の中で直接発掘作業に携わった調査担当者、作業員、の方々に対して厚くお礼申し上げます。

昭和57年3月31日

前橋市教育委員会

教育長 金井博之

例　　言

1. 本書は、前橋市土地改良事業実施地区（富田南部、西大室）内の埋蔵文化財発掘調査についての概報である。

2. 調査主体は、前橋市教育委員会、前橋市埋蔵文化財発掘調査団である。

3. 調査担当者および調査期間等

○富田遺跡群

所在地 前橋市富田町 東原775の1他

調査期間 昭和56年4月17日～昭和56年6月2日

担当者 前原 照子、松村 親樹、江部 和彦、入内島 裕美

調査面積 4.500m²

○西大室遺跡群（土地改良事業第1工区内と第2工区内に分かれ、後者を以下梅の木地区とする）

所在地 前橋市西大室町北山1918の6他、西大室町梅の木2544他（梅の木地区）

調査期間 昭和56年6月15日～昭和56年1月9日

担当者 前原 照子、松村 親樹、江部 和彦、入内島 裕美

木部 日出雄、岸田 治男、鵜木 晋一（梅の木地区）

調査面積 77,500m²（第1工区7.5ha、第2工区0.25ha）

4. 本書の執筆は担当者が分担し、遺物整理、図面整理、図版作製、遺物写真等は担当者および整理作業員が分担した。

5. 発掘調査にあたっては、地元を中心とした多勢の発掘作業員の方々の協力があった。

6. 本調査における出土遺物、実測図、写真等は一括して前橋市教育委員会で保管している。

富 田 遺 跡 群

一 概 説

赤城山麓は、長くのびる裾野を開析して谷が入り込み、多くの舌状台地が発達している。荒砥川と桃の木川間の赤城山麓がほぼ平坦地に移行する先端も、標高100m前後で、周辺の水田と比高10m以内の低い舌状台地が3本形成されている。

前橋市富田町の集落は、その3本のうち、荒砥川に接する東側の台地上を南北に通る道路沿いに連なっている。

第1次調査では「上毛古墳群」荒砥344号墳のおとうか山古墳が「渡り」を持つ幅3.5m程の掘のある径29mの円墳であることと同古墳から700m程南に、1基のみ河原石を使用した竪穴式で他は削平されて主体部の残らない径11m～28mの円墳7基の存在が確認された。その他肅文前期の土器を伴う竪穴住居跡1軒、奈良平安期の竪穴住居跡8軒が古墳に近接して検出された。さらに古墳



挿図1 周辺の遺跡分布図（1:25,000）

を切って中世古墓群が検出され骨蔵器、板碑が多数出土した。第2次調査では、第1次調査地点より南西100m程離れ富田の丘陵南端に近い地点で、弥生時代から平安時代に及ぶ堅穴住居70軒が検出された。

弥生時代に属する3軒の住居跡からは、樽式土器の範疇に入る甕・壺・高杯等が出土し、古墳時代の住居跡は6世紀後半から7世紀にかけて、8軒が検出された。奈良・平安時代の住居跡は57軒で時期は、奈良時代から平安時代まで連続して下限は10世紀代と考えられる。

今回第3次調査は、おとうか山古墳と7基の古墳群の中間地点と同古墳群の西側に隣接した部分と富田の丘陵南端のさらに南の水田部分であり、この調査をもって富田遺跡群の調査を終了する。

前橋市教育委員会の調査以外でこの富田の丘陵を見れば、縄文時代早・前・中・後期の土器片が多数散布している。また「上毛古墳綜覧」では21基の古墳が記録されている。(このうち3基は前出の7基の中に含まれる。)丘陵先端部の終った地点には中世女綱造構が比較的よく残っている。

鎌倉・戦国時代の遺跡、遺物としても正法院境内にある阿弥陀三尊のはか板碑・宝塔等仏教にかかる遺物も多い。これらのことおよび第1次・2次の調査結果から、この富田の丘陵は、縄文時代から現代まで、ほぼ間断なく人々の生活の営みが続いていると考えられる。

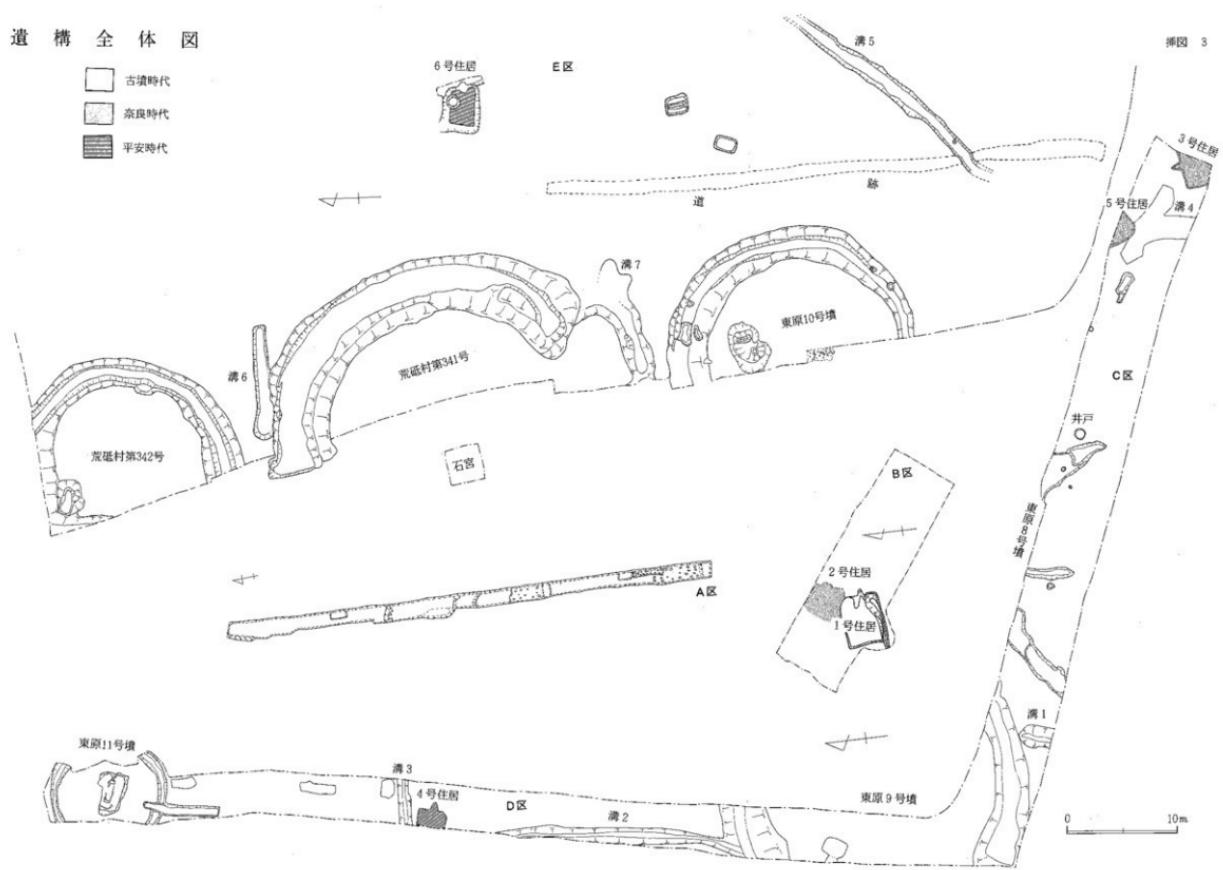
富田町の周辺では、縄文時代の遺跡として、後期前半に属すると思われる筑井遺跡が発掘調査された記録があり、弥生時代の遺跡としては、富田とは荒砥川の対岸南東方向で荒口前原遺跡が、発掘調査されており、3世紀初頭に比定される壺、甕等の良好な資料を持った堅穴住居跡が検出されている。古墳時代の遺跡としては、新屋遺跡で、石田川土器を伴う住居跡が、奈良・平安時代では、寺畠・諫訪西・前田・荒子小学校々庭・荒砥保育所の各遺跡で堅穴住居跡が調査されている。

図2 調査区位置図



遺構全体図

- 古墳時代
- 奈良時代
- ▨ 平安時代



摺図 3

I 発掘調査の概要

調査面積4,500m²は5地区に分散しており、南から北へ、A・B・C・D・E区とした。

A区は、道水路部分にトレンチを入れ女堀造構を地層断面で確認した。B区は第2次調査区域に隣接しており、古墳時代後期1軒、奈良時代後半1軒の竪穴住居跡を検出した。C・D区は、道水路部分でC区は東西、D区は南北に長く、かぎの手に続いており、やはり第2次調査区域に隣接している。C・D区からは、周堀のみの円墳2基と、偏平な河原石で組まれた竪穴式の主体部を持つ円墳1基、奈良時代3軒、平安時代2軒の竪穴住居跡が検出された。E区は2,500m²程の広さをもち、第2次調査のおとうか山古墳南50m程にあり、南北に並ぶように3基の円墳が周堀のみ残して検出された。その他この地区からは、平安時代の竪穴住居跡1軒、ビット、縄文ビット、溝、道などが検出された。

A区を除いて、いずれも耕作等により削平と攪乱が進んでいたり、調査区域の関係で、部分的な検出となり、完全な遺構像はつかめなかった。遺物は、C・D区の周堀のみの古墳の周堀内からは、土師器壺と杯、土師器壺と碗がそれぞれ出土し、竪穴式の主体部のある古墳からの出土はなかった。E区3基の古墳周堀からは、埴輪が、円筒、形象を問わず、比較的細かく割れた状態で出土した。竪穴住居跡からは、土師器壺、杯が主体であり、器種、数とも出土は少なかった。

1. 遺構及び遺物

イ 遺構数

古墳6基・竪穴住居6軒（古墳時代1、奈良時代3、平安時代2）、女堀造構1か所

その他（溝7、道1、ビット12、縄文ビット2、井戸1）

ロ 遺物量

古墳にかかわるもの 墓輪（円筒、形象）土師壺 パン箱26箱

住居にかかわるもの 土器、石製品 パン箱4箱

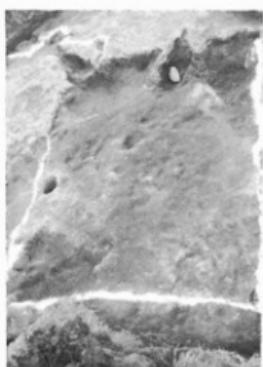
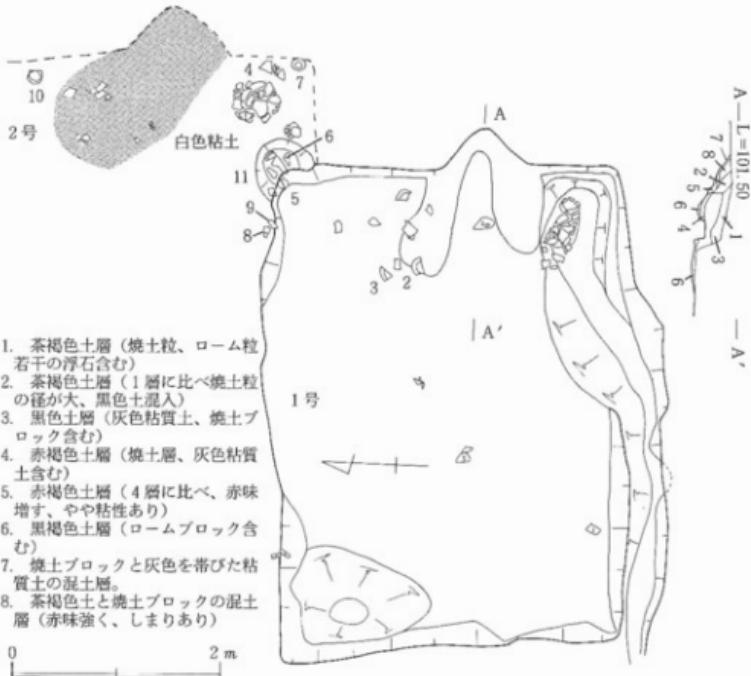
2. 発掘調査の経過

4.17 機械搬入、A・B区試掘区設定、表土はぎ	5.21 C・D区全体実測、E区荒砥村第342号実測
4.18 B区住居跡確認、1・2号住居排土	5.22 E区荒砥村第341号、東原10号墳実測
4.20 C・D区抜根、試掘区設定	5.26 C区完了、D区東原11号墳主体部写真
4.22 E区試掘区設定、排土開始 古墳周堀確認、C区3号住居排土開始	E区溝状遺構写真
4.24 D区遺構確認、排土開始	5.27 C区全体写真—C区完了
4.25 D区東原11号墳範囲確認	D区全体写真
4.30 A区全体実測開始	5.28 C・D区P:t群全体写真
5. 1 A区女堀完了、B区全体実測開始	B・E区全体写真
5. 6 B区完了	5.29 遺物洗浄開始
5. 8 D区東原11号墳主体部断面実測	6. 1 D・E区完了
5.11 C区遺構実測	6. 2 遺物洗浄、残務整理

3. 住居跡

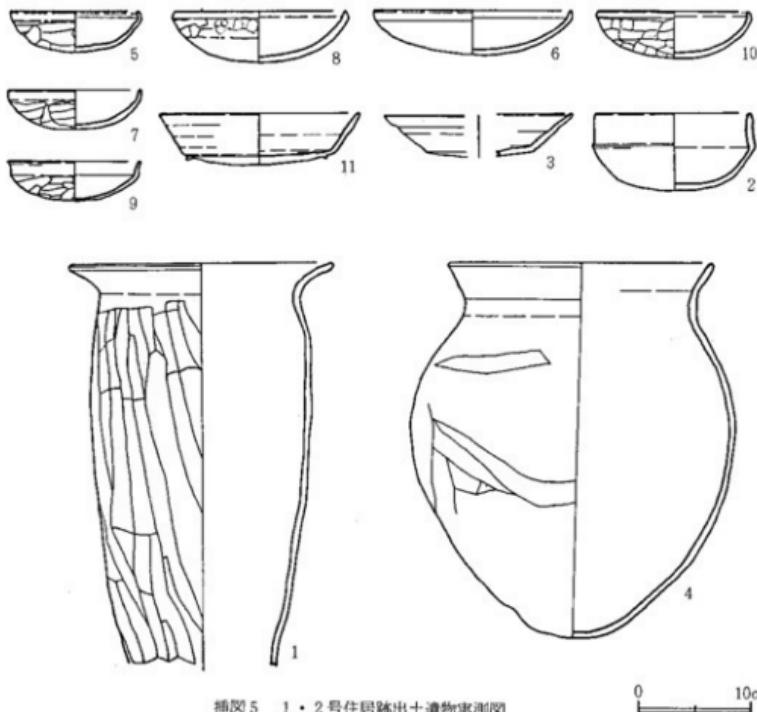
挿図4

1・2号住居跡



B区はこの二つの住居跡の他、遺構は検出されなかった。1号住居は東西が長い長方形で南壁が後世の溝によってわずかに切られている。耕作のため床面は凸凹が目だち、壁の立ち上がりも西壁が11cm、東壁が20cmと全体に浅い。竈は東壁中央部にあり、煙道がわずか壁外に出ている。袖は灰色粘質土で構築され、内部には支石がある。貯蔵穴は竈の東南に接して、深さ29cm、幅35cm程の隅丸方形であるが、長さは溝のため確認できない。中に長胴甕があった。北西隅に掘り込みがあり柱穴は認められない。2号住居は、床面が1号住居よりさらに20cm前後高く、耕作のため、ほとんど搅乱を受けていて、貯蔵穴と白色粘土、焼土散乱範囲から推定される竈跡から住居南東隅が想定されるのみに留まる。

図版1 遺構写真



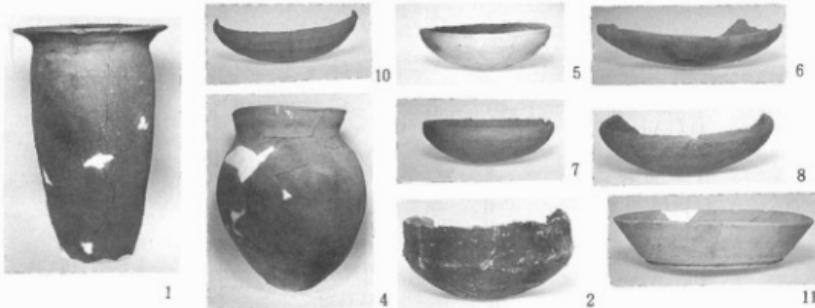
插図5 1・2号住居跡出土遺物実測図

1・2号住居跡出土遺物一覧表

番号	器種	法量(cm)	技法等	胎土	備考
1	土器	口径 23.0	口縁部横ナデ、腹部縮もしくは斜方向へラ削り	石英、砂粒含有	色調茶赤褐色、焼成良好、80%残
2	土器	口径 13.6 器高 6.8	口縁部横ナデ、底部へラ削りと推定されるが、器面荒れて不明瞭	小粒子含有	色調暗褐色、一部淡褐色、焼成普通、80%残、難な作り
3	土器 外、高坏?	口径 16.4	口縁部横ナデ、底部不定方向へラ削り、内部ナデ	石英含有	色調明褐色、焼成良好、60%残
4	土器	口径 22.6 底径 3.5 器高 32.7	口縁部横ナデ、脇部上半横方向へラ削り、中～下半斜もしくは継方向へラ削り	砂粒含有	色調淡茶褐色、焼成良好、90%残、全体に薄手、歪み有り
5	土器	口径 11.0 器高 3.6	口縁部横ナデ、周辺部横へラ削り後中央部一定方向へラ削り	砂粒含有	色調淡褐色、口唇部一部火を受ける
6	土器	口径 17.1 器高 3.8	口縁部横ナデ、底部不定方向へラ削り、器面荒れており技法等不明瞭	砂粒含有	色調淡褐色、底部火を受ける、焼成良好、完形歪みあり全体に難な作り
7	土器	口径 11.5 器高 3.5	口縁部横ナデ、周辺部横へラ削り後、中央部一定方向へラ削り。内部へラ状工具でナデた痕跡有り	雲母含有	色調淡褐色、焼成良好、完形
8	土器	口径 14.8 器高 4.5	口縁部横ナデ、底部不定方向へラ削り、内部丁寧なナデ、削部に指圧痕有り	若干の砂粒含有	色調暗褐色、焼成良好、80%残、全体に丁寧な作り

番号	器種	法量(cm)	技法等	胎土	備考
9	土師器 环	口径 11.8 器高 3.4	口縁部横ナデ、周辺部横ヘラ削り 後、中央部一定方向ヘラ削り、 内部やや難なナデ	少量の砂粒 含有	色調淡褐色、焼成良好、55%残
10	土師器 环	口径 13.2 器高 4.1	口縁部横ナデ、周辺部横ヘラ削り 後、中央部一定方向ヘラ削り、内部 にヘラ先で傷つけた痕跡有り	堅 緻	色調橙明褐色、焼成良好、 90%残、器内が部分的に薄い
11	須恵器 高台付环	口径 17.6 高台径 11.9 器高 4.5	右回転ロクロ盛形、底部切り離し はヘラ切り後、回転ヘラ調整、体 部ロクロナデ	若干の砂粒 含有	色調白灰色、焼成良好、 完形、高台は形のみで実際 的な役割を果たさず

No. 1 ~ 3 は 1 号住居跡出土遺物、No. 4 ~ 11 は 2 号住居跡出土遺物



図版2 1・2号住居跡出土遺物

堅穴住居跡遺構一覧表

住居番号	形態 走向	規模(m) (長軸×短軸) 壁高(cm)	床面積 (m ²)	かまど 位 置	周 溝	柱 穴	貯 蔵 穴	備 考	重複 関係
1	長方形 N-4°-W(東)	4.4×3.25 ?	14.3	東壁南寄	粘土 60	×	O(1)?	?	本文参照 ①→2
2	長方形 ?	?	?	東壁南寄?	粘土? (地)	?	?	O(1)	本文参照 1→[2]
3	N-2°-W(西)	?	30	?	北壁中央?	60 (一部)	?	?	北西コーナーのみ確認。 周溝は西壁から北壁のか まど袖部まで続く。
4	N-32°-E(東)	2.3×? 19	?	東壁南寄	袖石 23	×	?	O(1)	東半分のみ確認。かまど 付近から南東隅にかけて 固い床面。貯蔵穴は浅い。
5	N-66°-E(南)	?	18	?	?	?	×	?	南西コーナーのみ確認。 中央部東寄り付近に一部 固い床面。
6	長方形? N-11°-E(東)	4.2?×3.1? 12?	13?	東壁南寄 (地)	袖石? ?	×	?	?	かく乱をうけており、掘 り方は凸凹で規模等は推 定。固くしまった床面と 思われる部分が点在して いる。

○住居の壁走向は南北線を基準とした。

○規模は壁の下端を計測した。

○壁高は遺構確認面からの最深値を計測した。

○かまどの幅は袖部の内径を計測した。

4. 古墳

東原11号墳

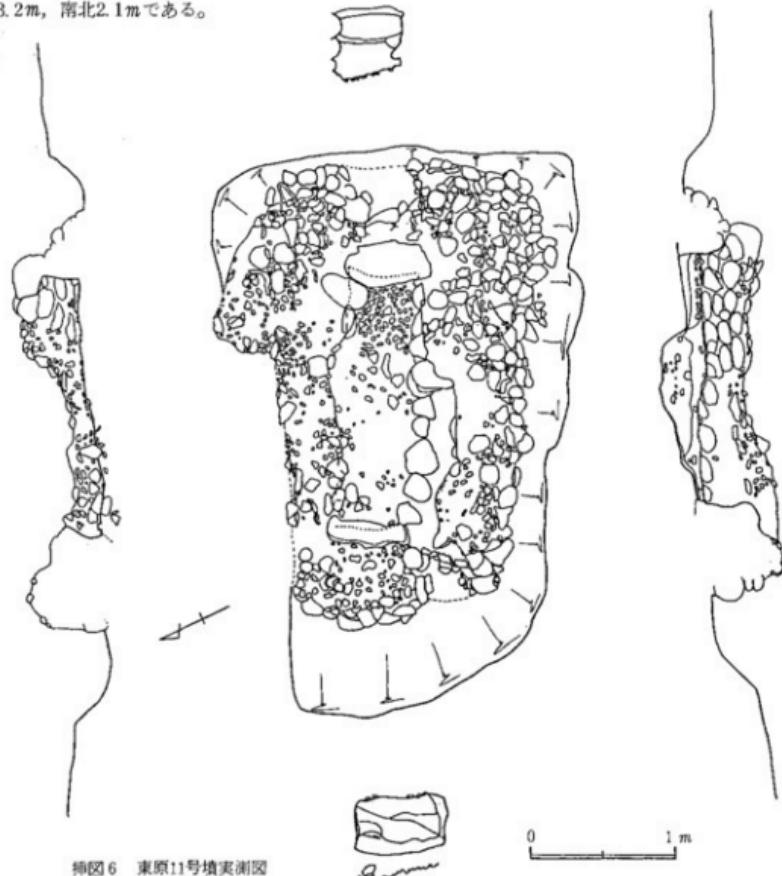
D区北端に位置する小円墳。墳丘盛土はほとんど削平されていたが、主体部の石組と周堀が保存されていた。耕作により上部は削り取られているので古墳構築当時の地表面ははっきりしないが、

現状で耕作土層直下のはとんど浮石を含まない黒色土層をローム層まで約35cm～40cm掘り込んで「掘り方」をしている。規模は東西3.9m、南北2.5m。主体部は

北長壁	南長壁	東短壁	西短壁	深さ
175cm	170cm	45cm	40cm?	27cm(残)

周掘円周のはば中心にあり、主軸をN-117°-Eにとる。各部の寸法は上記のとおり。

石室は南北長壁を扁平な河原石を現状で3段に横積みにして構築しており、東短壁（縦36cm×横45cm×厚さ13cm）と西短壁（縦48cm×横63cm×厚さ20cm）は共に1石でひら面を用いて構築されている。床面は掘り込んだ地山面に粘土を厚さ6cm～7cmに敷きつめ、その上に小さいもので直径2cm～3cm、大きいもので直径5cm～7cm位の河原石を転石として厚さ10cm程に敷きつめている。裏込めは根石裏側に小石、砂利等を詰め、更に白色粘土で根石から15cm～20cmの範囲を補強している。そして外側をやや大振りの河原石で押えつけている。この主体部裏込めの石組の範囲は東西3.2m、南北2.1mである。



挿図6 東原11号墳実測図



東原11号墳 主体部全景



東原11号墳 主体部側壁

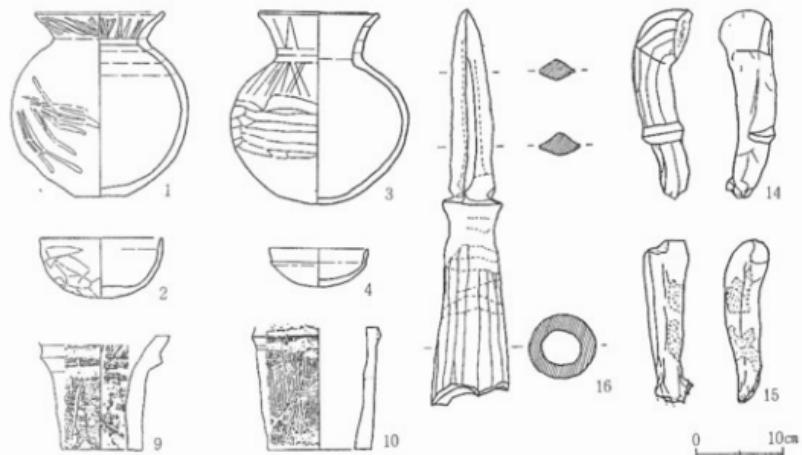


東原11号墳 造構全景

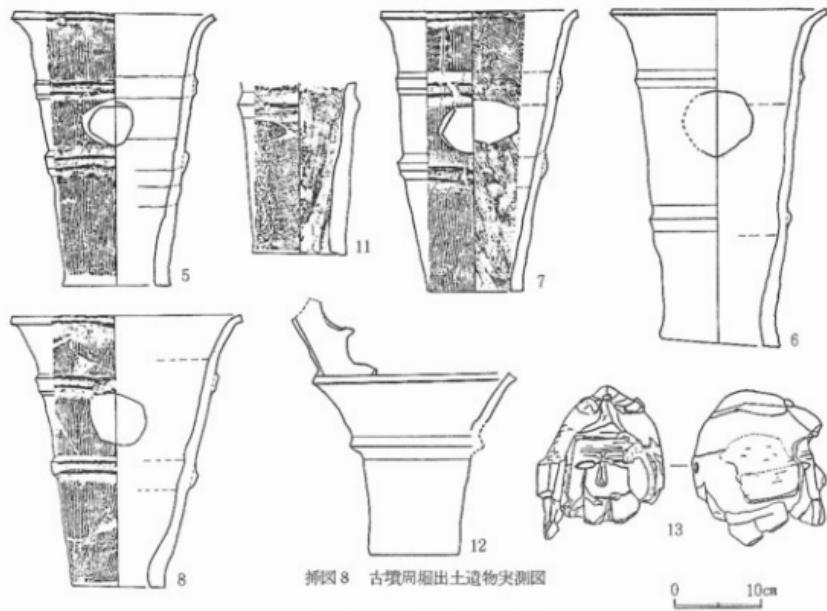


東原11号墳 主体部側壁裏込め状態

図版3 造 構 写 真



図版7 古墳周辺出土遺物実測図

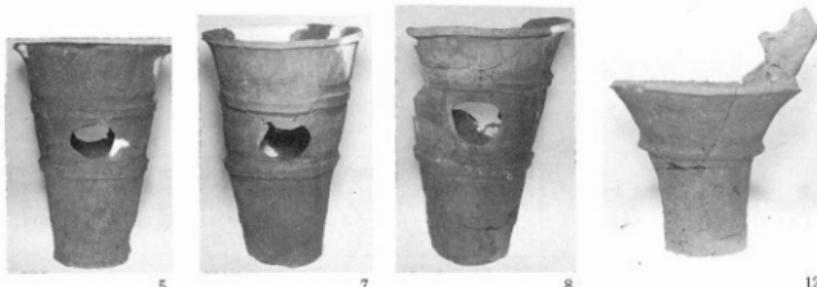


插図8 古墳周堀出土遺物実測図

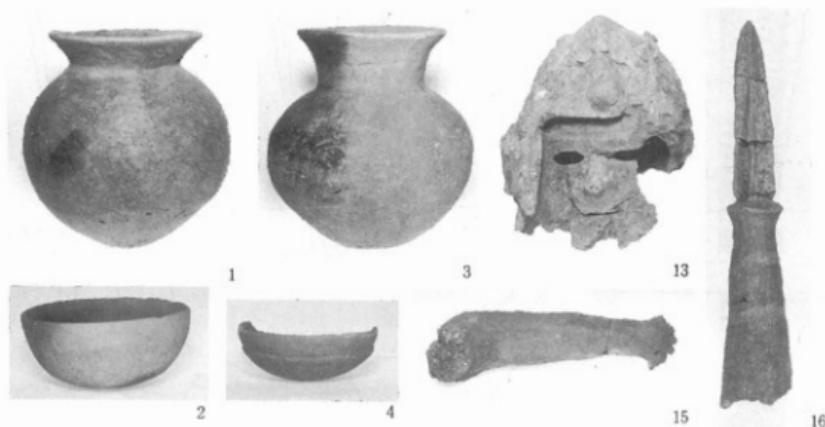
古墳周堀出土遺物一覧表（土器）

0 10cm

番号	器種	法量(cm)	技法等	胎土	備考
1	土師壺	口径 14.6 底径 5.3 器高 21.0	口縁部放射状研磨、腹部ナデ後研磨、腹部上半ヘラ研磨、下半ヘラ削り後、粗い研磨、底部ヘラ削り、内面研磨	若干の砂粒含有	色調茶褐色、部分的に赤味帶びる。焼成良好。完形 東原8号墳周堀出土
2	土師壺	口径 13.8 器高 6.9	口縁部横ナデ、体・底部ヘラ削り内面ナデ	小石・砂粒含有	色調茶褐色、焼成良好、完形 東原8号墳周堀出土
3	土師壺	口径 13.4 器高 22.1	口縁部横ナデ後放射状研磨、胸部上半研磨、中央部ヘラ削り後研磨、下半粗い研磨	小石、雲母 砂粒含有	色調赤茶褐色、焼成良好。完形、東原9号墳周堀出土
4	土師壺	口径 11.4 器高 4.4	口縁部丁寧な横ナデ、底部不定方向ヘラ削り、内面ナデ	堅緻	色調赤褐色、焼成良好、完形 全体に丁寧な作り、荒底村第341号墳周堀出土



図版4 古墳周堀出土遺物



図版5 古墳周囲出土遺物

古 墓 一 覧 表

古 墳 番 号	規 模		
	径(m)	周掘幅(m)	
荒 砥 村 第341号 (推定)	約3.1	5~6 (1.9~2.7)	周掘東側半周を確認。周掘は南側にN=43°~Wの方向で推定幅5m程の渡りがあり状状を示している。断面は平らな鍋底状を呈し、深さ約70~80cm。墳丘墳土は南北地盤断面にわざわざしておらず、二ヶ岳系系石浦層直上に盛土がなされている事が判る。主体部については調査対象区域西側にある、石宮所在地の地盤断面にはやはり二ヶ岳系系石浦層が認められ、その直上に大量的の河原石と大ぶりの石(45cm×25cm)を含む層があることから、これが本古墳の主体部と思われる。葺石はなかったが周掘から多量の埴輪が出土。(押図7~9、16等8~5、13等)
荒 砥 村 第342号 (推定)	約2.1	2.5~3.5 (0.7~0.9)	周掘のうち東側から南側へかけての約1/6周程度を確認。周掘は逆台形を呈し、底部付近の掘は直に掘り込まれ、底部は平らで、柔研磨状になっている。深さは通構確認面より約75~80cm。墳丘はローム面まで削平されているため詳細不明。主体部についても調査した範囲では確認できなかった。葺石はなかったが、埴輪が少量出土。
東 原 8号墳	23.5?	上幅1.5~2 (下幅0.9~1.1)	周掘のうち南側と北東側の一部を確認。周掘は鍋底状を呈し、深さ約25cm。墳丘はローム面まで削平されているため、また主体部については古墳中央部分が調査対象区域外になるため詳細不明。葺石、埴輪は確認されなかったが、渡り立ち上り付近から遺物出土。(押図7~1、2)
東 原 9号墳	27.8	3 (0.6~1)	周掘のうち北側と南東側の一部を確認。周掘は鍋底状を呈し、深さ約85~90cm。墳丘はローム面まで削平されていて詳細不明。主体部については北側周掘から南へ5m程の所に長方形の掘り込み(2.1m×1.5m深さ1.5m)が確認されているが、出土遺物はなく東壁下端に数個の石列を認めるのみで、本古墳との直接的な関連を示す信頼的資料は得られなかった。葺石、埴輪は認められなかったが、北側周掘底近くから遺物出土。(押図7~3)
東 原 10号墳 (推定)	約2.2	1.4~3.7 (0.5~1)	周掘東側半周を確認。周掘は南側で細くなり断面は鍋底状を呈し、深さ約60~80cm。墳丘はローム面まで削平されているため詳細不明。主体部は墳丘中央よりやや南寄りに在り、石室床面に敷かれたと思われる転石及びその下の白色粘土のみ確認。石室の規模は現状で南北2.5m、東西1.2m。葺石はなかったが、周掘から埴輪出土。
東 原 11号墳	10.5	0.6~1 (0.3~0.4)	本 文 参 照

5. その他の遺構

(1) 女堀

A区は、土地改良事業の道路施工部分にあたり、富田地区に残る女堀遺構の東、およそ100mの地点にある水田の中にある。現地形では、西方の女堀遺構の北岸と連続しているように見える水田との比高1m程の段差を持ち東西にのびる馬入れの際から、それに直交するように、南北に、幅1.5m長さ43mのトレーナーを入れ、東側の断面を観察することを中心とした調査を行った。深さは湧水が何か所もありトレーナー内の排水を行なうながら部分的に深く掘ったが遺構が完全に断面に出る程は掘れずボーリング調査で補った。なおこのトレーナーにはほぼ平行して150m東方に荒砥川が流れ、対岸南東方向に女堀遺構を見る事ができる。

最初の予想に反し馬入れからの落ち込みではなく、トレーナー北端から14.2m、地表からの深さ65cm（標高94.5m）の地点（以上A点とする。）でほぼ30度の傾斜で南に向く落ち込みが始まるまでは、不連続な部分や疊状遺構と見られる部分もあるが、大局的には平行に近い堆積である。特にトレーナー北端から2.5m地点までは、現在の水路まで自然堆積と見られる地層である。A点より2m南の深さ2mで落ち込みの底部と考えられる河原石の層に当たる。A点からさらに南へ24m、深さ2mの地点から、ほぼ40度の傾斜で立ち上がり、A点から25.3m、深さ65cm、標高94.5mの点（以下B点とする）で再び水平な地層となる。落ち込みの始まる（B点）層は、それより下の土が擾乱されブロック状になっていて掘削の際の堆積と考えられる。その下一層において浅間B軸の純層が見られる。AB間の底の部分は、20cm×20cm×5cm前後の大さの河原石でありA点から13.8m地点までは、A・B点（掘込みの上部）より1.5m前後の深さであるが、その地点から急に落ち込み、2m程の深さで4.5m進み、再びゆるい傾斜で浅くなった後、部分的に、ピット状に深さ2.4mの部分もあり凸凹をくり返しながら南側立ち上がり地点に続く。AB間の様相を見ると、掘削後、堀の深さが1m前後になるまで全面に水性の堆積があり、その後この堀が完全に埋まるまでの間、自然か人工かは不明であるが小さな水性の舟底状の堆積が3か所認められた。A点から5.6m、深さ1.1m地点で始まり上部幅3.7m、深さ0.7mの1か所、A点から12.3m、深さ1.2m地点で始まり、上部幅2.8m、深さ0.7mの1か所、およびB点から北に落ち込む斜面をAB間の堀と共有し、上部幅4.7m、深さ1.3mの1か所で、後者は前二者に比べ高い位置から深い掘込みを持つ。

(2) ピット

縄文時代のピット2基、それ以降の時代のピット12基を検出。JP No.1は東原10号墳墳丘北側に在り、掘り方は凸凹で出土遺物もなかった。JP No.2は荒砥村第342号墳墳丘北側の周縁立ち上がり付近に在り、掘り方はきっちとしており床面も平坦で平面プランはひょうたん型をしている。長軸2.65m、短軸1.4m、深さ1m。出土遺物はなかった。ピットの形態は長方形、方形、円形に分かれるが、出土遺物もなく、用途、時期等の詳細は不明。

(3) 井戸跡

C区の東原8号墳渡り東側50cmの所に1基検出された。平面形は円形で、円筒状を呈している。直径は遺構検出面で1m、1.5m下の所で90cmである。深さは1.8mの所で調査を断念しているため不明であるが、更に1m以上は掘れるものと思われる。埋土はロームブロック、白色粘土ブロック

が相当混じる黒色土で、一時に埋め戻された感がある。ローム層を掘り抜いた壁面はしっかりとしていた。出土遺物はなかった。

(4) 溝状遺構

C区に2条、D区に2条、E区に3条、計7条の溝状遺構を検出したが、部分発掘のため遺構の全容をとらえることはできなかった。N₁、N₂は13m程離れて南北に平行して流れしており、断面は共に逆台形を呈し、しっかりした掘り方をしていた。共に東原9号墳周囲埋土を切り込んでいる。N₅は上半部が耕作による擾乱を受けているが、中央部に川原砂の堆積があり、淵の部分は非常に細かい白灰色のシルト状の砂で、これが鉄分の茶色で鮮かに識別でき、水が流れていたことを示していた。いずれの溝からも出土遺物はなかった。

(5) 道跡

E区荒砥村第341号墳渡り東側7mあたりから確認され、ほぼ南へ真直ぐ伸びる幅1~1.5m程の固くしまった床面を持つ道跡と推定される遺構。溝N₅の埋土も踏み固められていた。

6. まとめ

昭和56年度の調査では以下のことが確かめられた。

- 荒砥村第341号、342号古墳を確認、調査した。特に第341号古墳は多数の埴輪を出土したとともに、わずかに残っていた墳丘盛土からこの古墳の築造時期が二ツ岳系軽石降下後、さほど時を経ていない時期であることが判明した。また、周堀より出土した杯からも6世紀後半から7世紀前半にかけてのものと思われる。
- 東原8号、9号墳は周堀よりそれぞれ出土した土器により、9号墳がやや後出するものと共に古墳時代後期鬼高Ⅰの時期に比定され、荒砥村第341号、342号古墳に先行する6世紀前半の築造と思われる。
- 東原11号墳は主体部が保存されており、昭和54年度調査された東原2号墳（11号墳より東方へ約80mの位置にある）と同規模（径約11m）で同じ様に河原石を小口積にした竪穴式石室であった。
- 竪穴住居跡は古墳時代後半（1軒）から奈良（3軒）、平安時代（2軒）にかけての6軒が検出された。
- 女掘遺構は富田地内と荒砥川左岸の遺構残存地区を結ぶ地点としての存在が明らかになった。掘削時期は浅間B軽石降下後しばらくの時をおいていること、底部は荒砥川の流れにより堆積した河原石の層の上部をわずかに掘って造られていることが明らかになった。
- 三年間の調査を概括すると、この富田の丘陵東側は古墳の密集地であり、しかも古墳が相互に切り合わずに接近していること、竪穴住居跡は縄文時代から平安時代まで検出され、中世遺構としては、古墓群、女掘遺構、近世では、正法院遺構が検出されて、富田の丘陵に住む人々の長い生活の跡を明らかにするうえでの貴重な資料を得ることができた。なお、今回をもって富田南部土地改良事業に伴う事前の発掘調査は終了した。

图版 6



C区 遗构全景



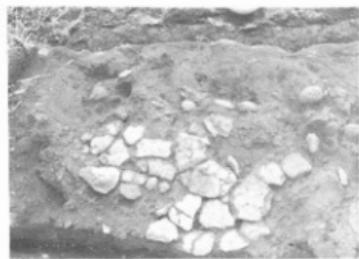
荒延村第341号墳周堀遺物出土状態



東原9号墳周堀遺物出土状態



D区 遗构全景



東原10号墳主体部（敷石部分）



E区 遗构全景



東原9号墳周堀遺物出土状態

西大室遺跡群

I 概 説

赤城南麓は、多くの河川によって開析された舌状台地が発達している。その一つである神沢川と東神沢川に挟まれた丘陵は、両川の合流点よりほぼ1.3km北の地点にある乾谷沼の谷によってさらに二つに分かれる。今回西大室遺跡群第4次調査は、乾谷沼北側のかなり傾斜の強い、標高145m～135mの南に向いた斜面と同沼東側の舌状台地のはば末端まで、標高160m～120mの広い地域、及び第2工区として、東神沢川とさらに東の桂川に挟まれた舌状台地東縁辺部の標高120m前後の地点である。

本遺跡付近の遺跡環境は、東神沢川を挟んで東の台地の一角にある国指定の前・中・後二子の3基の前方後円墳を初めとして、上毛古墳綜覧に大室分として178基記載されている古墳密集地であることを第一にあげなければならない。大室小学校々庭遺跡、大室小学校校農場遺跡、大室石原遺跡では、古墳時代後期半の土師器使用住居跡が主に調査検出されている。また3二子隣接地の上諏訪



図9 周辺の遺跡分布図 (1 : 2500)

(掲図9の説明)

- 1 前二子古墳
- 2 中二子古墳
- 3 後二子古墳
- 4 伊勢山古墳
- 5 赤堀茶臼山古墳
- 6 熊ノ穴遺跡
- 7 巨石祭祀遺跡
- 8 第1次調査地
- 9 製鉄遺跡
- 10 大種荷古墳群
- 11 丸山古墳
- 12 丸塚古墳
- 13 第2次調査地
- 14 第3次調査地
- 15 薩山古墳群
- 16 上川久保遺跡
- 17 昭和56年度調査(梅の木遺跡)
- 18 荒砥五反田遺跡
- 19 荒砥上諏訪遺跡
- 20 荒砥147号墳
- 21 大室小校庭遺跡
- 22 大室小校農場遺跡
- 23 大室石原遺跡
- 24 牛島古墳
- 25 大室城跡
- 26 阿久山古墳群
- 27 多田山火葬墓群
- 28 西原遺跡
- 29 中里古墳と骨壺群
- 30 下青竜古墳群
- 31 天神古墳
- 32 産泰神社

遺跡、荒砥五反田遺跡でも、同時期の住居跡、後者ではさらに古墳時代前期および平安期の住居跡も調査検出されている。

西大室遺跡群として第1次では、今次調査地西に隣接して5基の古墳が調査され、第2・3次調査では、今次調査東に隣接し古墳時代後期中葉の住居跡、および中・近世墓域が検出され、3二子と同じ台地からは弥生式土器を伴う周溝墓、および6世紀前半から7世紀末にかけての古墳と埴輪棺が検出された。なお今次調査区には大室元城跡があり、その南方には大室城跡がある。



掲図10 調査区位置図

II 発掘調査の概要

調査区域約7.5haは7地区に分かれ、調査順に従ってA・B・C・D・E・F・Gとした。A・B区は共に1基の古墳で、A区は調査区全体の最北、舌状台地のつけ根部にあたり、関東平野を一望することができる。調査は南側一か所のみのトレンチ調査で周堀の一部を検出した。B区はA区の南100m程にあり、墳丘が4分の1残り主体部も破壊された円墳で周堀を中心とする調査であった。C区は、A・B区の西側で乾谷沼北側の平均約9度の傾きを持つ南向きの斜面で、弥生式土器を伴う堅穴住居跡13軒、住居跡を切って南北に通る溝1条、ピット2（1は住居と同じ時期の土器出土）が検出された。D区は、A・B区のさらに南の舌状台地のはば全面にわたりおよそ5haの面積を持つ。地形は、中央よりやや南に鞍部があり、全体に南向きにゆるい傾斜ではあるが、一部北向きの斜面があり、2つの丘のようになっている。弥生式土器を伴う住居跡15軒は1軒を除き南側丘陵の東から南（一部G区にかかる）斜面のはば同じ高さから検出された。古墳時代の住居跡99軒はD区全体に分布するが東南部にやや少ない。奈良・平安時代の住居跡30軒は丘陵東斜面に集中して検出された。周溝墓は南側丘陵の頂上付近に3基、北東斜面に1基、中世墓塚4基は同丘陵南東斜面の比較的裾部に検出された。溝はD区中央部近くを南北に通る1条を主とし、それより丘陵東斜面にかけて縱横に17条検出された。E区は、D区の舌状台地の先端で現状では、周囲の水田より5m程高い丘陵で、大室元城跡と伝えられる地である。この丘を囲むような掘ないし落ち込みが断続して検出され、部分的にはさらに斜面部分に堀状のものが検出された。F区はD区の丘陵西斜面が乾谷沼の南側に大きく張り出した部分で、頂上部とやや北に傾斜した部分の他は、南西に向いた傾斜地であり、頂上付近に4基の周溝墓、周溝墓に近接して周辺に、古墳時代の住居跡7軒、奈良・平安時代の住居跡7軒が検出された。G区はD区に接続し、丘陵斜面を南にのびる道路施工部で、前出の弥生式土器を伴う住居跡3軒、古墳時代1軒、平安時代2軒の住居が検出された。なおG区の中央部からさらに南へD区の溝と同じような溝がかぎの手に検出された。

1. 遺構及び遺物

イ 遺構数 古墳2基（1基は道路施工部分にかかる周堀の1部のみ）

堅穴住居跡 181軒

弥生式土器を伴う住居28軒、古墳後期108軒、奈良後期6軒、平安時代34軒、不明5軒

周溝墓8基、中世墓塚4基、城跡1、溝21条、ピット25個、炭焼き跡1か所

ロ 遺物量 古墳にかかわるもの 墳輪片、パン箱1箱

堅穴住居跡にかかわるもの 土器・石製品・鉄綱・フイゴ・パン箱190箱

周溝墓にかかわるもの 土器（壺・小型甕・鉢・塊）、滑石製勾玉、パン箱2箱

中世墓塚にかかわるもの 板碑断片1、五輪塔2基分、洪武通寶1枚、元豐通寶1枚

灰釉皿1枚、青磁破片

城跡にかかわるもの 内耳鍋断片、土師質皿13枚、洪武通寶1枚

梅の木地区は、桂川右岸の舌状台地縁辺部に位置し、県道前橋今井線北側の南北道路施工部分と低い丘陵を削平する部分4か所にわたっている。西からA区・B区・C区・D区とし、AB間はお

D 区遺構全體圖



C・F・G区遺構全体図

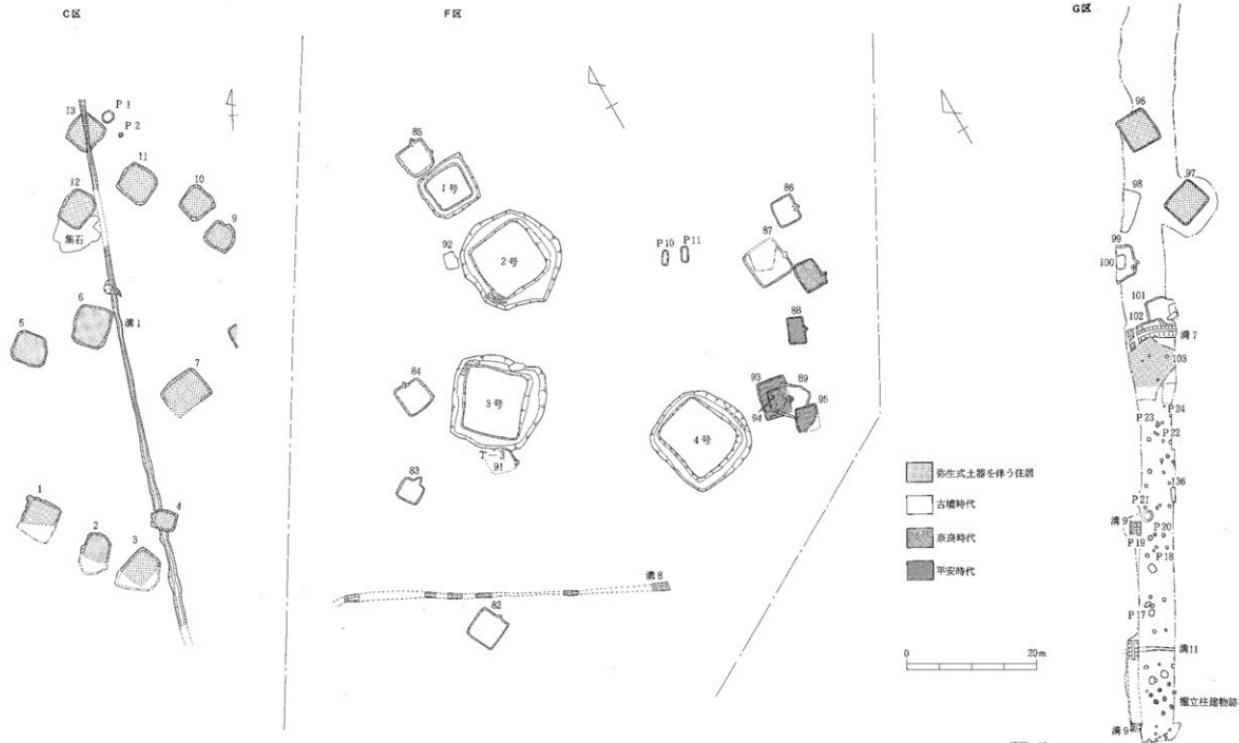
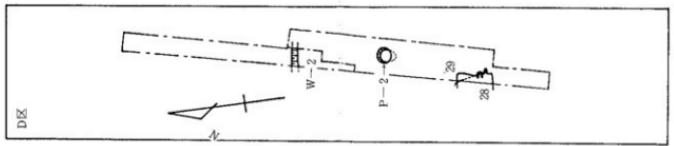
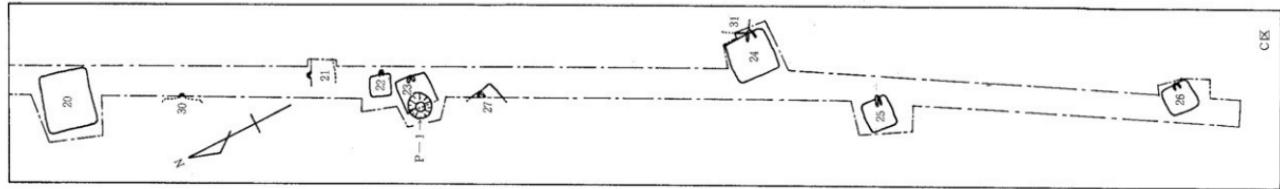
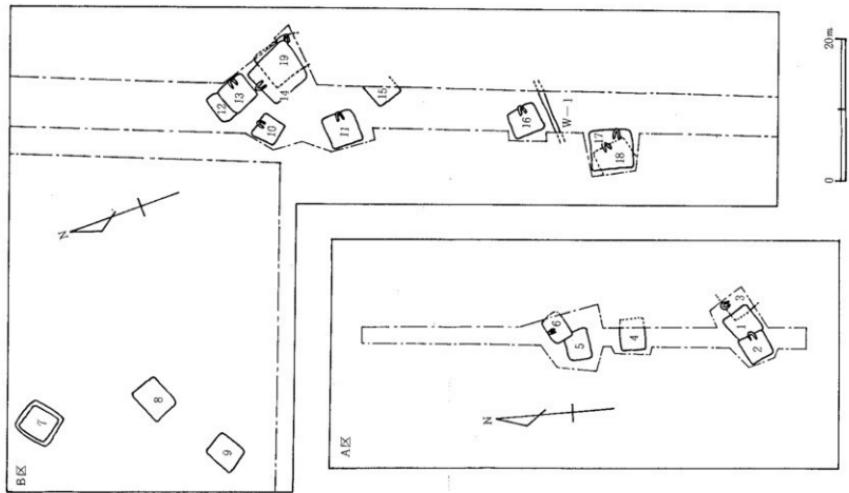
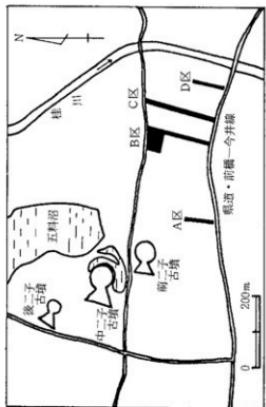


图13



海ノ木道跡遺構位置図



よそ230m、B・D間は170mで標高は120m前後ではほぼ平らである。A区は古墳時代（以下同じ）中期の堅穴住居1軒、後期5軒、B区は、前期3軒、中期2軒、後期7軒、C区は前期1軒、後期5軒、平安時代の住居1軒、D区は平安時代2軒で全体で、時代の判明しないもの3軒である。

1. 遺構及び遺物

- イ 遺構数 堅穴住居跡 30軒（古墳時代前期4軒、中期2軒、後期18軒、平安時代3軒、不明3軒）
ビット2（平安時代井戸状ビット1、中世井戸状ビット）
- ロ 遺物量 堅穴住居にかかわるもの 土器、土製品、石製品、鉄製品等、パン箱41箱
中世ビットにかかわるもの 宗銭6枚
その他、縄文時代（表採）の土器片若干、石器2

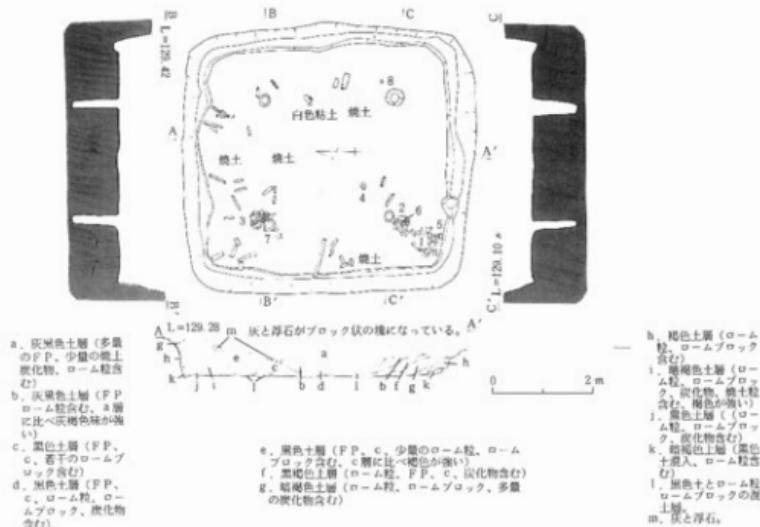
2. 発掘調査の経過

- | | |
|--|---|
| 6. 15 発掘調査のための諸準備 | 10. 9 梅の木B区 7、8号住居排土開始 |
| 17 機械搬入、A区第64号墳周辺部分の抜根、
排土開始、B区抜根開始 | 15 市政モニター見学 G区表土はぎ
梅の木A区完了 |
| 18 B区第62号墳周辺試掘区設定、耕土開始、
C区試掘区設定 | 21 二之宮小、大室小学校児童教師父兄見学 |
| 25 C区1～3号住居排土開始 | 28 梅の木C区 20号住居排土開始 |
| 26 土地改良課、工事担当業者、文化財保護係
による現場における協議 | 29 大胡小学校児童教師見学
F区86号住居写真、F区完了 |
| 7. 11 A・B区 全体実測開始
B区第62号墳周辺精査 | 11. 4 船馬大学教授・新井房夫氏・地質調査
7 荒子小学校児童、教師見学 |
| 13 D区試掘区設定 | 11 梅の木B区完了 |
| 17 A・B区全体写真、A・B区完了 | 12 E・G区全体写真 E区完了
梅の木D区28号住居排土開始 |
| 29 C区全体写真 | 21 梅の木D区完了 |
| 8. 4 F区表土はぎ開始 | 25 梅の木C区完了（梅の木地区終了） |
| 5 C区完了 E区抜根開始 | 26～27 雨天のため、遺物洗浄、復元、実測 |
| 6 E区（大室元城跡）試掘区設定 | 12. 15 D区及びG区全体実測開始 |
| 12 大間々小学校児童教諭見学 | 25 D区及びG区遺構全体写真、G区完了 |
| 9. 8 E区周辺部分排土 | 26 ブレハブ撤去、D区1、4号墓横実測
写真 |
| 24 梅の木地区、発掘区付近踏査、試掘 | 28 D区完了 |
| 26 機械搬入、遺構確認作業（梅の木） | 1. 5 遺物洗浄、復元、及び残務整理等開始 |
| 10. 2 F区 82～84号住居排土開始 | 9 遺物洗浄、残務整理等終了 |
| 5 梅の木A区1、2号住居排土開始 | |

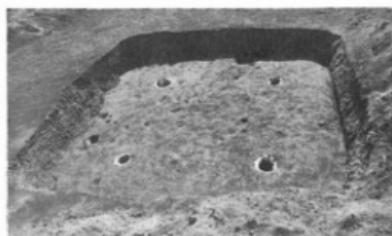
3. 住居跡

96号住居跡

地図14



G区最北端に位置するが、地形的にはD区南丘陵の南側裾野部分にあたり、今回の調査区域外にも更に何軒かの同時期の住居の存在を推測できた。本遺構は火災住居跡であり炭化物の堆積が北壁と西壁寄りに多くみられた。壁、床ともしっかりとていて、幅約10~20cm、深さ約5~10cmの周溝が全周している。柱穴は4本、心心距離で2.55m×2.35mで南北にやや長く住居とはほぼ相似形をえがいている。深さは85~90cm、下端直径15~20cmとよく揃っている。焼土の分布が南壁を除く3壁付近に認められたが、いづれも炉として認定するには至らなかった。東壁寄り柱穴中央間に白色粘土が床面に堆積していたが、性格は不明。遺物は住居南西隅と北西隅の柱穴付近にまとまって検出され、床面着で土製紡錘車、小型器台が出土した。



図版7

96号住居跡遺構全景



96号住居跡遺物出土状態

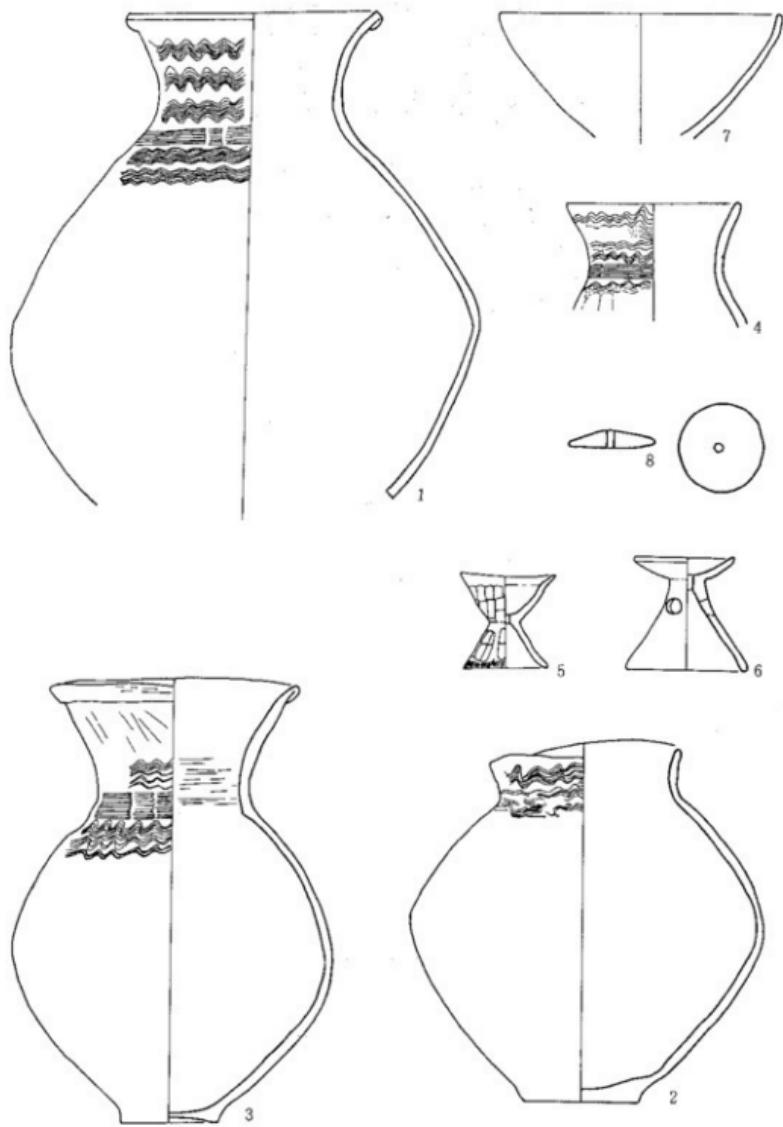


插图15 96号住居跡出土遺物実測図

96号住居跡出土遺物一覧表

番号	器種	法量(cm)	技 法 等	胎 土	備 考	
1	壺	口径 19.1	胸部上半にかけてうすいハケ目、後施文 胸部下半へラ研磨、口唇部付近へラ研磨 施文、櫛歯6~8本の波状文3段、2道 止彫文1段、波状文2段	多量の小 石、砂粒 石英含有	色調茶程褐色、半分は 黒色、焼成良好、80% 残、内面の器面荒れる	
2	壺	口径 14.1 底径 8.3 器高 25.9	口縁部ハケ目もしくは横ナデ後施文、頸 部ハケ目の痕跡残る、胸部へラ研磨、内 面へラ研磨、施文は口縁部から頸部にか けて波状文	砂粒、石 英等含有	色調茶褐色、焼成良好 90%残、内面の器面荒 れる、全体に垂みあり	
3	壺	口径 18.6 底径 7.3 器高 33.0	木口状工具による頸部及び胸部上半の削 り(ハケ口)、折り返し口縁部横ナデ、 胸部へラ研磨、施文は頸部部分的に波状 文、次に2道止彫文、胸部上半波状文 内面上半へラナデ(研磨)、底部削り後 粗い研磨	黑色微粒 子、含有	色調淡茶褐色、底部付 近黒ずむ、焼成良好、 95%残、あげ底	
4	甕	口径 12.4	口唇部横ナデ、口縁部~胸部上半ハケ目 後施文、施文は口縁部6箇波状文、頸部 2道止彫文→波状文、内面へラナデ	多量の小 石、砂粒 石英含有	色調黑灰褐色、焼成や や不良、50%残	
5	器	台	受部木口状工具による削り後粗い研磨、 内面ハケ目後上半分のみ横ナデ、脚部は やや丁寧なへラ研磨、内部ハケ目後中央 部削除へラナデ	黑色微粒 子、含有	色調橙褐色、黒斑有り 焼成良好、完形、鏡形 呈す、円窓なし	
6	器	台	口径 6.7 脚径 8.4 器高 8.4 円孔径 1.1	外表面全体に丁寧なへラ研磨、内面受部も 丁寧なへラ研磨、脚、底部ハケ目後粗い へラ研磨	若干の小 石、砂粒 石英含有	色調暗褐色、焼成良好 ほぼ完形、全体に丁寧 な作り、円窓は3個で 等間隔
7	高 坯 ? 鉢	口径 20.5	外・内面とともに粗いへラ研磨	小 砂 粒 含有	色調赤褐色、黒斑有り 外面の一部淡灰色	
8	土 筋 鉢 車	径6.5、孔径0.6、厚さ0.3~1.3cm、 細かい砂粒含有、扁平な円錐形で孔は中央からややそれた位置に穿たれる				



8



4



5



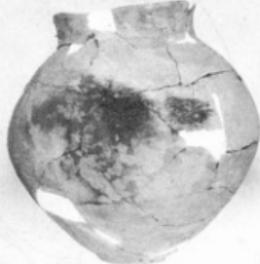
6



1

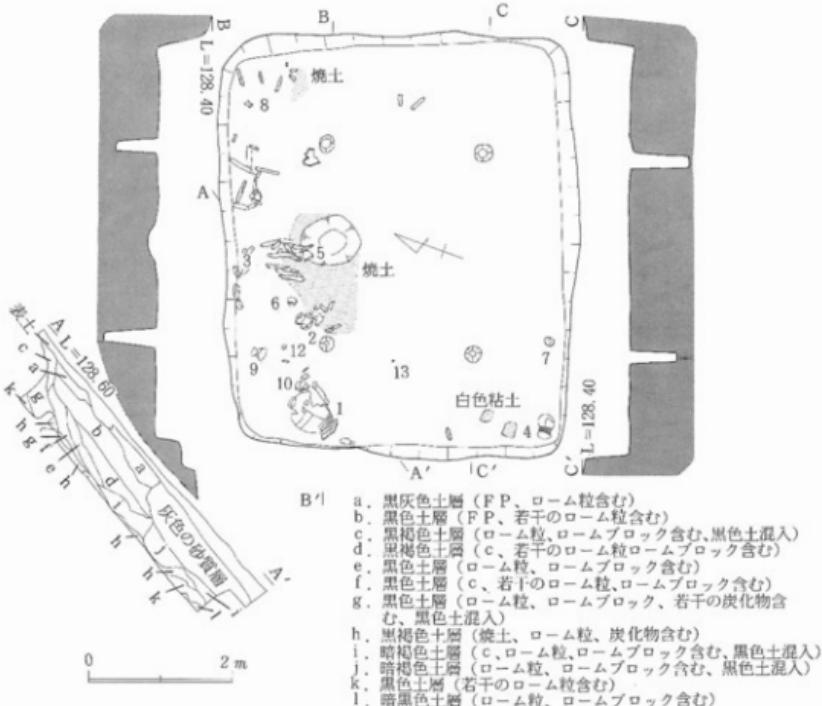


3

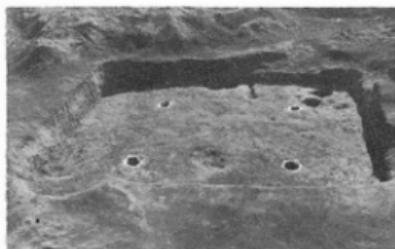


2

図版8 96号住居跡出土遺物



火災住居跡で住居北壁寄り約のあたりに多量の炭化物が検出された。遺物もほとんどがこの範囲から炭化物に覆われて出土した。壁、床ともしっかりとていて、柱穴は4本、心心距離で2.75m×2.05~2.15mの長方形を呈する。深さは56~82cm、下端直径10~15cmとほぼ整っている。柱(80cm×70cm×深さ10cm)は住居中央部北壁寄りの柱穴中間に在り、西側に焼土の散乱範囲が広がる。96号住居跡に比べてやや長方形のプランを持つが床面積はほぼ同じである。



図版 9

97号住居跡遺構全景



97号住居跡遺物出土状態

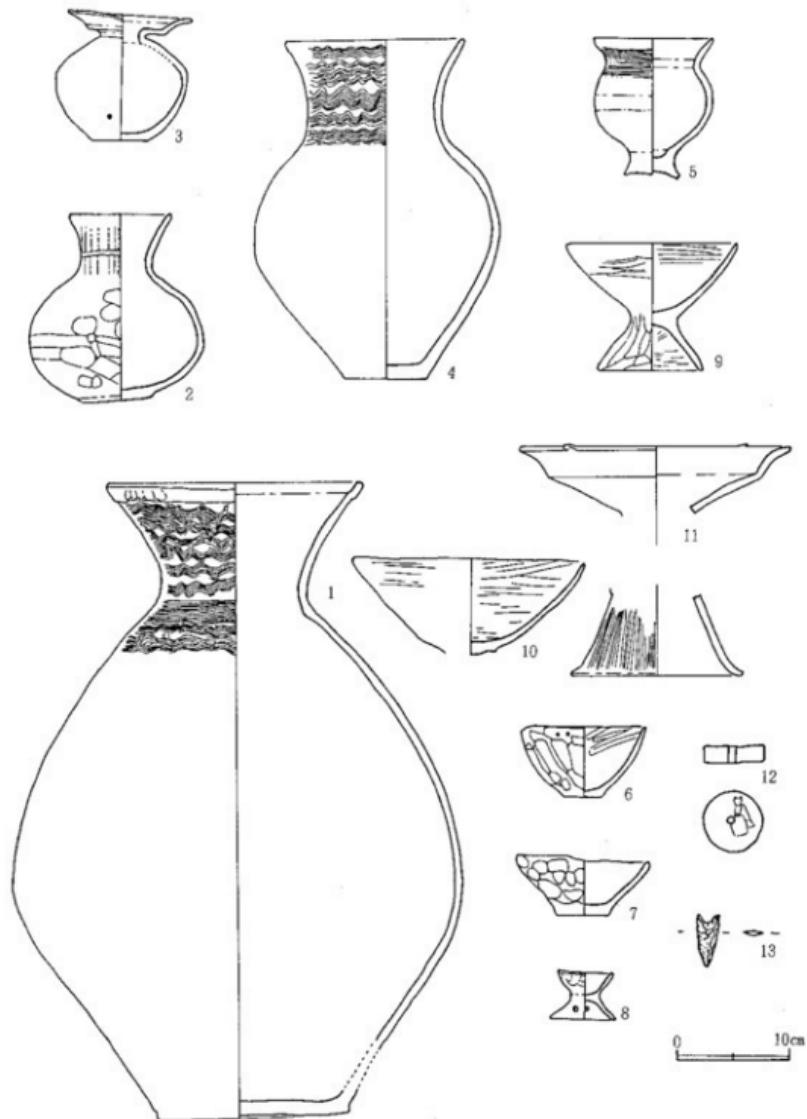
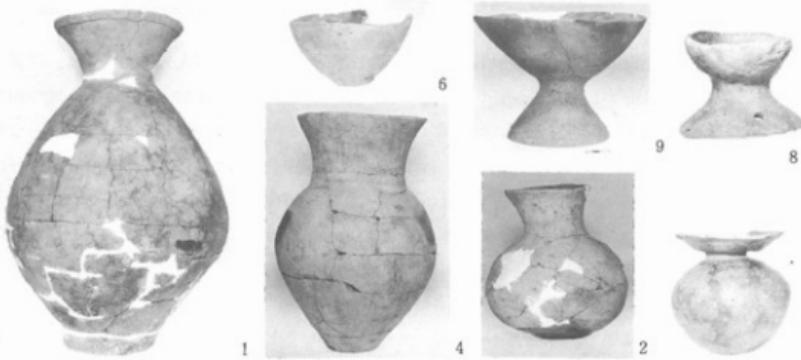


插圖17 97號住居跡出土遺物實測圖

97号住居跡出土遺物一覧表

番号	器種	法量(cm)	技 法 等	胎 土	備 考
1	壺	口径 21.7 底径 16.4 器高 55.0	折り返し部貼付後指頭によるナデ、口縁部～頸部胴部上半ハケ口（木口状工具による調整）後施文、胴部中下半ハケ口後ラ研磨、底部ヘラ研磨、施文口縁部5～6本齒波状文6段、頸部6～7本直線文2段、5～7本波状文3段、内面ハケ口（木口状工具による整形）	黒色砂粒子、砂粒含有	色調茶褐色、焼成良好70%残。内面が非常に荒れている。若干のあけ底、器肉は底部餘き薄い
2	壺	口径 8.4 底径 6.1 器高 16.2	口縁部木口状工具による調整（ハケ口）後ヘラ研磨、胴部ハケ口後ヘラ研磨、内面口唇部付近横ナデ。他はハケ口部分的に残る	石英、砂粒含有	色調淡褐色、焼成良好、完好、完形、胴部扁平の球状呈す、全体に若干の歪み有り
3	土師器壺	口径 10.2 底径 4.8 器高 10.4	外面部全体に丁寧なヘラ研磨、光沢あり、内面は口縁部付近横ナデ、他の内面は研磨	若干の小粒子、石英含有	暗褐色、焼成良好、完形、水平近く開く複口縁、胴部下位に0.4cmの孔1つ穿たれる
4	甕	口径 15.0 底径 7.2 器高 29.4	口唇部横ナデ、頸部～胴部木口状工具による調整後口縁部施文、胴部ヘラ研磨、施文6～7本櫛齒波状文5段、内面ヘラナデ	石英、砂粒含有	淡褐色、焼成良好、完形、全体に若干の歪み有り
5	脚付甕	口径 10.1	口唇部付近横ナデ、頸部施文、胴部全体ヘラ研磨、施文10～11本櫛齒直線文	小砂粒含有、緻密	暗褐色、内面黒茶褐色焼成良好、70%残
6	小型鉢	口径 10.8 底径 3.2 器高 6.1	内外面とも丁寧なヘラ研磨、底部やや難なヘラ削り	緻密	褐色、焼成良好、完形、口唇部付近0.2cmの孔2つ穿たれる
7	塊	口径 11.2 底径 4.4 器高 6.1	口唇部横ナデ、体部、底部木口状工具による調整（ハケ口）後、粗いナデ、内面ナデ	砂粒含有	淡褐色、一部黒斑あり、焼成良好、完形、全体に歪み有り
8	小型器台	口径 4.6 脚径 5.5 器高 5.0	外面部全体に木口状工具による調整（ハケ口）後ヘラナデ。受部内面ナデ	砂粒含有	暗褐色、焼成良好、完形、円窓脚部に4つ（径0.4cm）
9	高环	口径 15.0 脚径 9.2 器高 11.1	环部内外面ともヘラ研磨、脚部外面木口状工具による削り、内面木口状工具による調整	粒子の大きい石英等含有	赤褐色、焼成良好、完形、环部内面底部付近荒れている
10	高环	口径 20.2	内、外面部ともヘラ研磨、特に内面は丁寧なヘラ研磨	石英含有	赤褐色、焼成良好、环部としては完形
11	高环	口径 23.6 脚径 15.0	环部内外面とも丁寧なヘラ研磨後尖突（赤彩）、脚部外面丁寧なヘラ研磨後赤彩、内面ハケ口残る	粒子の大きい石英等含有	赤彩、内面明赤褐色、中央部欠損、口縁部に推定4つの尖出部有り（間隔20cmと18cm）
12	筋錐車	径5.2、厚1.4～1.5、孔径0.7、赤茶褐色	全面に丁寧なナデ、若干の砂粒含有、土質		
13	石鐵	4.55cm×1.8cm	材質ヶツ岩、打製		



図版10 97号住居跡出土遺物

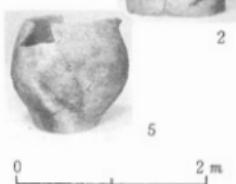
挿図18

11号住居跡

図版11

11号住居跡
出土遺物

A

図版12
11号住居跡
出土遺物

5

2m

本遺跡はC区頂上部に位置し、対角線が南北方向に近い向きで整った隅丸方形を呈する。周溝は東すみから南東壁3分の2間と北西壁中央部がわずか欠けて深さ6~7cmで回っている。壁の掘り込みは深く60~70cmで、床面40cmまでは特にしっかりしている。床面も固くしっかりして平らである。柱穴は深さ60~80cm、心心距離2.2~2.4m、床面での径10~25cmで、住居の形に合わせ方形に4個認められた。炉跡は、北と西の柱穴間わずか北寄りに径45~65cmの範囲と同位置でやや住居中心部寄りに径65~85cmの範囲に床面の焼けが検出されたが、前者には長さ30cm幅7cmで断面が三角形の焼けた安山岩があるので、これと認められる。ピットは、北西壁と炉跡の間、西柱穴と南西壁間、東柱穴と南東壁間の3か所にあり、深さは前2つが65cm前後、後者は40cmである。遺物は住居の中央から東寄りに集中し、炉付近から西コーナーに分布して出土した。なお遺物の集中した床面では炭化物も多く火災住居と想定できる。



図版13

11号住居跡遺構全貌



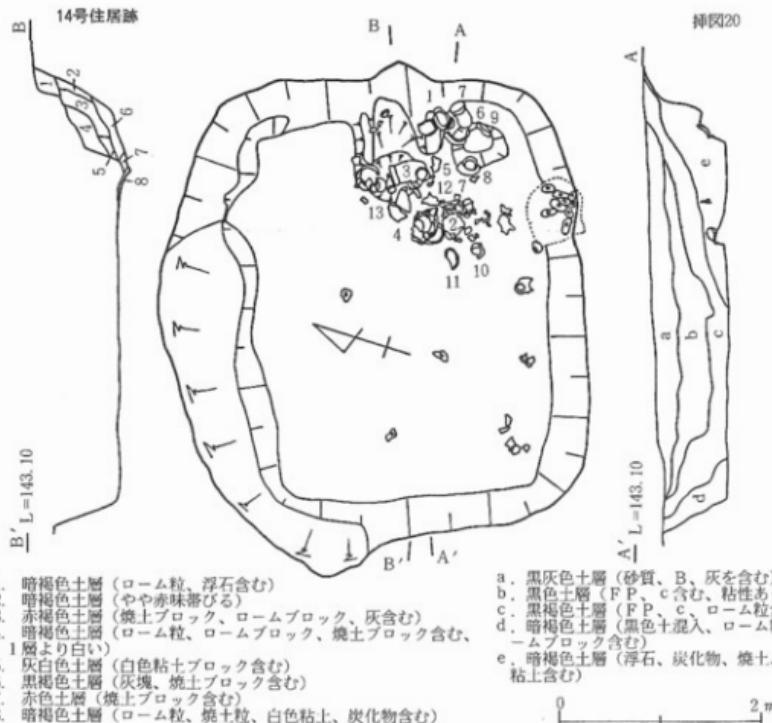
11号住居跡遺物出土状態



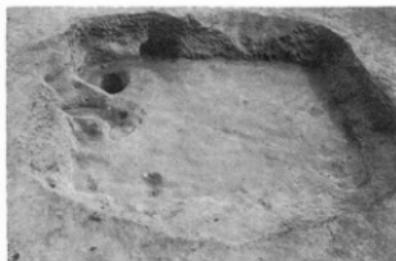
挿図19 11号住居跡出土遺物実測図

11号住居跡出土遺物一覧表

番号	器種	法量(cm)	技法等	胎土	備考
1	甌	口径 11.1	口縁部粘土紐マキナゲ部分横ナデ、胸部木口状工具による調整ナナメハケ月後ナデ。内面胸部ナナメハケ	黒色微粒子含有	色調白茶褐色、焼成良好、50%残、耗土紐のみで無文内部に輪積痕残る
2	甌	口径 11.5	口縁部横ナデ、折り返し部ヘラナデ、頸部～胸部上半ハケ目か、胸部上半は後ヘラナデ、内面ハケ月後ヘラナデ	石英等の微粒子含有	色調橙白褐色、焼成良好、50%残、折り返し口縁無文
3	甌	口径 11.9	折り返し口縁部、底部、鶲部上半ハケ日(櫛撻直線文)、部分的に体部ヘラ研磨、内面口唇部ハケ日	若干の石英含有、均質	色調外面黒褐色、内面白褐色、焼成良好、40%残
4	甌	口径 10.7 底径 4.4 器高 10.3	口縁部横ナデ、胸部上半浅いハケ目、下半ハケ日後ナデ、底部ヘラナデ、内面口唇付近横ナデ、底部中央ヘラハケ日	黒色微粒子含有	色調橙褐色、底部及び体部の一部黒斑、焼成普通、60%残、あげ底
5	片	注口部径 8.9 口径 8.4 底径 6.0 器高 10.4	休部全面にヘラナデ(研磨)底部一部ヘラナデ、内面口唇付近横ナデ、他はヘラナデ	砂粒多量に含有	色調内面淡白褐色、外表面茶褐色、焼成普通80%残、表面が荒れ技法等不明瞭
6	器	台 口径 7.3 脚径 10.3 器高 7.9	受部ヘラナデか、脚部ハケ日後ヘラ研磨、内面ハケ日か	緻密	色調淡茶褐色、円窓4つ、焼成良好、80%残



D区最北端に位置する。北西コーナー上部を掘られている他の壁、床ともしっかりしている。竈は白色粘土で構築されており、煙道部はほぼ真に掘られほとんど住居外に延びていない。竈右側に深さ約60cmの円形の貯蔵穴がある他に南壁東寄りの所に浅い方形ビットが掘られ、ここに手に握るのに丁度良い位の大きさの長形の河原石が9個まとめて置いてあった。竈前及び貯蔵穴付近に甕、壺などが集中して出土。又、石製臼玉も竈袖部あたりから多数出土した。



図版14

14号住居跡造構全景



14号住居跡カマド付近遺物出土状態

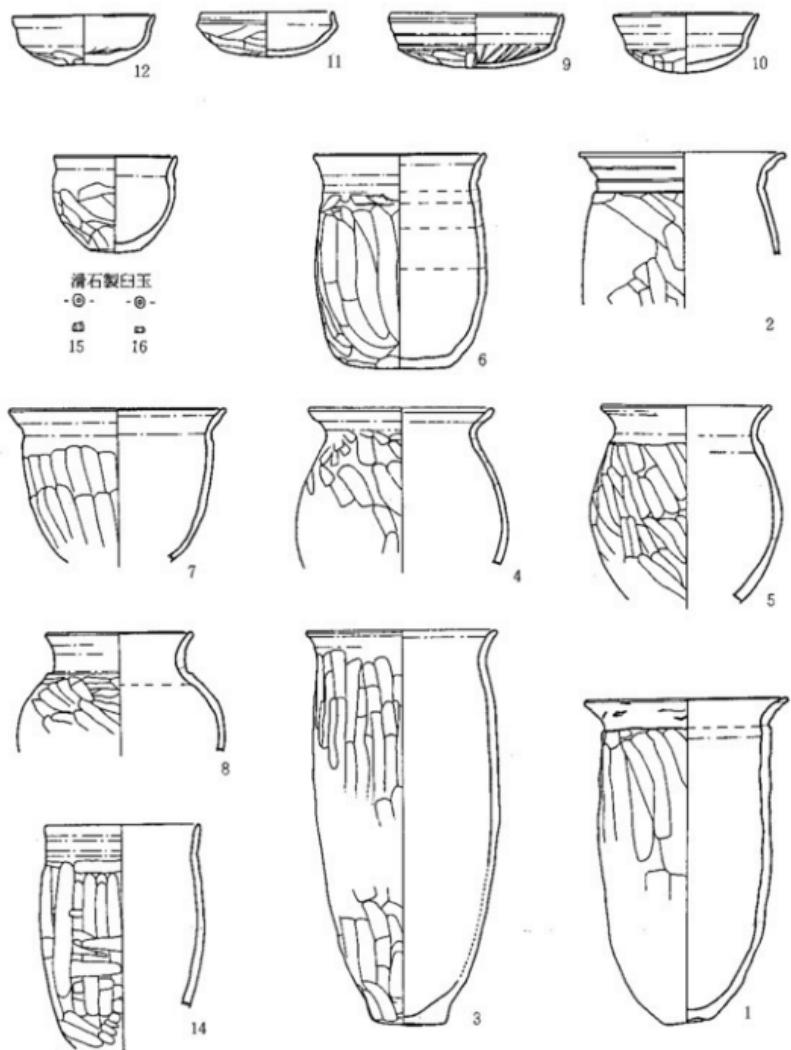


插图21 14号住居跡出土遺物実測図

0 10cm

14号住居跡出土遺物一覧表

番号	器種	法量(cm)	技法等	胎土	備考
1	土器	口径 19.8 器高 32.2	口縁部横ナデ、胴部綻及び斜方向へラ削り、底部へラ削り	雲母、砂粒 小石含有	色調褐色、焼成良好。完形 表面に白色粘土付着、歪み 有り
2	土器	口径 23.0	口縁部横ナデ、胴部上半斜方向へラ削り	石英、小石 砂粒含有	色調淡茶褐色、焼成良好。 50%残
3	土器	口径 18.5 底径 7.0 器高 38.8	口縁部横ナデ、胴部綻方向へラ削り、底部へラ削り	石英、雲母 小石多量含有	色調茶褐色、胴部一部褐色 焼成良好、95%残、底部 に葉脈状残る
4	土器	口径 18.2	口縁部横ナデ、胴部斜方向へラ削 り	石英、雲母 小石多量含有	色調墨灰褐色、焼成良好、 50%残
5	土器	口径 16.4	口縁部横ナデ、胴部斜方向へラ削 り	石英、小石 砂粒含有	色調茶褐色、焼成良好、 70%残
6	土器	口径 16.8 底径 10.7 器高 21.1	口縁部横ナデ、胴部及び底部へラ 削り、内面ナデ	石英、雲母 砂粒含有	色調淡褐色、焼成良好、 完形、底部に葉脈状残る
7	土器	口径 21.2	口縁部横ナデ、胴部綻方向へラ削 り	石英、雲母 砂粒含有	口縁～胴部上半墨褐色、胸 部下半赤褐色、焼成良好、 60%残
8	土器	口径 14.3	口縁部横ナデ、胴部斜方向へラ削 り、内面ナデ	石英、雲母 砂粒含有	色調灰褐色、焼成良好、 30%残、表面荒れ錠人物口 立つ
9	土器	口径 17.0 器高 5.4	口縁部横ナデ、底部不定方向へラ 削り、内面に暗文を施す	石英、砂粒 小石、含有	色調淡褐色、焼成良好、 90%残、全体に丁寧な作り
10	土器	口径 14.4 器高 6.0	口縁部横ナデ、底部丁寧なへラ削 り、内面ナデ、内面底部にへラ先 で傷つけた痕跡有り	若干の雲母 小石含有	外面黒灰色、内面灰褐色 焼成良好、70%残、器肉厚 く、重量感有り
11	土器	口径 13.1 器高 4.4	口縁部横ナデ、底部不定方向へラ 削り、内面ナデ	石英、雲母 含有	色調墨褐色、焼成良好、 80%残、口縁部器面荒れる
12	土器	口径 14.0 器高 4.8	口縁部横ナデ、底部不定方向へラ 削り、内面ナデ	石英、砂粒 鐵粒含有	色調白褐色、焼成良好、 70%残、口縁部付近歪み 有り
13	土器	口径 12.0 底径 5.2 器高 9.5	口縁部横ナデ、底部不定方向へラ 削り、内面ナデ	多量の雲母 石英含有	黒褐色、口縁一部褐色、燒 成良好、80%残、不安定な 平底



10

11

9



1

6

13



3

国版15 14号住居跡出土遺物

82号住居跡



1. 茶褐色土層（若干の礫土粒、ローム特有行）
2. ブラック土と白色粘土の混土層（礫七
ア向付）
3. 白色土層（礫七ア向付）
4. 茶褐色土と白色粘土の混土層（若干
の礫土粒、ローム特有行）
5. 白色土層（3箇所に比較的多く存在す
る多量の礫土粒）
6. 茶褐色土と黒色土の混土層（深部に
わからぬ）
7. 茶褐色土と白色粘土の混土層（地上
下付）
8. 白色土と茶褐色土の混土層（ローム
特有行）
9. 茶褐色土と白色粘土の混土層（地下
の礫土粒、地上ブロック、ローム特有
行）

- ア. 黄褐色土層（白色粘土、ローム粒、鐵
上付、燒土ブロック含む）
- イ. 黑色土と白色粘土の混土層（ア層に
比へ白灰を含む、燒土粒、燒土ブロッ
ク含む）
- ウ. 白色土層（多量の燒土粒含む）
- エ. 白色土層（燒土粒、ローム粒、燒土
ブロック含む）
- オ. 茶褐色土層（ローム粒、燒土粒、燒土
ブロック含む）

図版22

本住居跡はF区最南端に位置し、そのプランは方形を呈する。壁は80°の傾斜で掘り込まれ、床面はほぼ平坦である。竈は北壁中央部(①)と東壁南寄り(②)に2つ付設され、両竈とも多量の白色粘土が使用され、竈①では両袖部は芯として倒立状態で長甕を、支脚には高杯脚部を使用している。また両竈ともに煙道部は住居外にわずかに延び、燃焼部、煙道部はあまり焼けていない。貯蔵穴はそれぞれの竈の右側隣にあり、柱穴は4個ほどの方形の配列で、各間隔は2.2m(P.2, 3間は2.4m)である。遺物は竈①内、周辺、住居北側に集中して出土している。その多くは長甕で広範囲にわたり破片が散在している。他にも瓶、壺等も出土し、貯蔵穴の底からは壺が出土している。



図版16

82号住居跡構造全景



82号住居跡カマド付近遺物出土状態

図版16 遺構写真

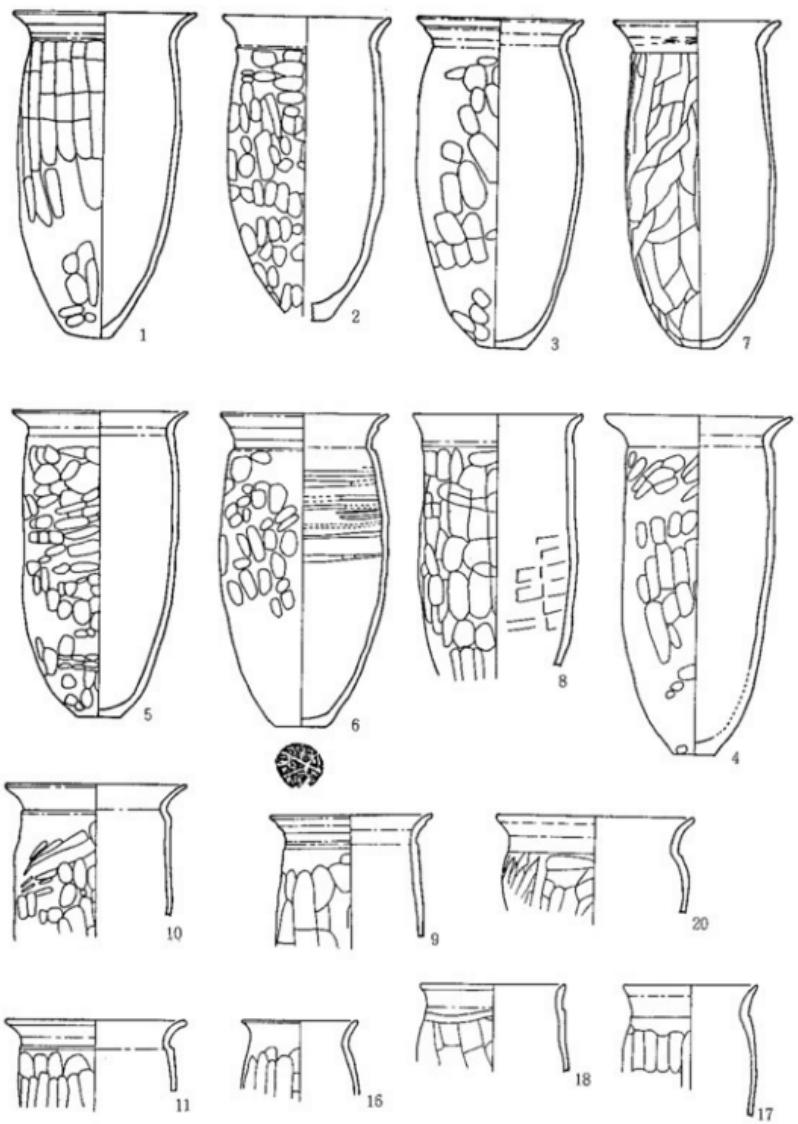


插图23 82号住居跡出土遺物実測図

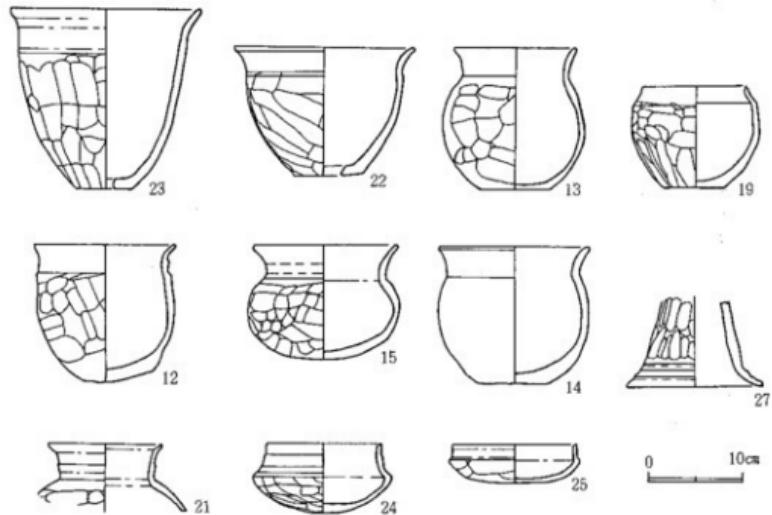


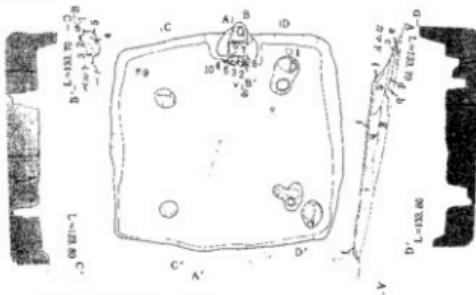
図24 82号住居跡出土遺物実測図

82号住居跡出土遺物一覧表

番号	器種	法量(cm)	技法等	胎土	備考
1	土師壺	口径20.4 底径5.0 器高37.6	口縁部横ナデ、胴部上～中半縦方向へラ削り、胴部下半削り方向へラ削り、底部へラ削り	砂粒、小石含有	色調橙褐色、焼成やや不良、完形、器面は荒れている
2	土師壺	口径18.8 底径約3.9 器高35.0	口縁部横ナデ、胴部縱方向へラ削り、底部へラ削り、内面ナデ	多量の砂粒 小石含有	赤褐色、2次焼成受ける、焼成やや不良、90%残、全体的に肉厚
3	土師壺	口径18.8 底径5.6 器高38.8	口縁部横ナデ、胴、底部へラ削り	石英、小石含有	淡赤褐色、底部付近2次焼成受ける、焼成良好、完形、全体的に薄手
4	土師壺	口径21.2 底径4.8 器高39.0	口縁部横ナデ、胴部上半斜方向へラ削り、胴部中～下半縦方向へラ削り、底部へラ削り	石英、小石含有	色調淡褐色、焼成良好、90%残
5	土師壺	口径19.8 底径35.2	口縁部横ナデ、胴部旋及び縦方向へラ削り、底部へラ削り、内面ナデ	砂粒、小石含有	色調淡褐色、焼成良好、完形
6	土師壺	口径18.8 底径6.0 器高36.0	口縁部横ナデ、胴部斜め及び縦方向へラ削り、内面へラナデ	小石、砂粒含有	淡褐色、胴部2次焼成受ける、焼成良好、完形、底部に葉脈痕残る
7	土師壺	口径18.9 底径4.7 器高37.9	口縁部丁寧な横ナデ、胴部旋及び縦方向へラ削り、底部へラ削り	小粒子含有	灰茶褐色、胴一部黒色、焼成良好、完形、底部張み有り
8	土師壺	口径19.2	口縁部横ナデ、胴部へラ削り、内面へラナデ	砂粒、小石含有	色調淡褐色、焼成良好、70%残
9	土師壺	口径18.3	口縁部横ナデ、胴部縱方向へラ削り	石英、砂粒 小石含有	外面淡赤褐色、内面黒色、焼成良好、50%残
10	土師壺	口径20.1	口縁部横ナデ、胴部斜及び縦方向へラ削り、内面ナデ	砂粒、小石含有	色調淡褐色、焼成良好、50%残
11	土師壺	口径21.0	口縁部横ナデ 胴部縱方向へラ削り	粗粒子含有	色調灰褐色、焼成良好、口縁部としては完形
12	土師型器	口径14.6 底径7.0 器高14.4	口縁部横ナデ、胴部縱方向へラ削り	石英含有	色調淡褐色、焼成良好、完形、底部付近器肉厚い
13	土師型器	口径12.4 底径6.8 器高15.0	口縁部横ナデ、胴部、對方向へラ削り、底部へラ削り	砂粒、小石含有	色調黒褐色、焼成良好、完形、器面磨滅

番号	器種	法量(cm)	技 法 等	胎 土	備 考
14	土師型器皿	口径 15.5 底径 7.4 器高 14.3	口縁部横ナデ、胴部へラ削り、底部へラ削り、内面ナデ	小粒子含有	紫灰褐色、底部黒色、焼成良好、完形、底面墨脈痕
15	土師型器皿	口径 14.8 器高 12.1	口縁部横ナデ、胴、底部へラ削り	雲母、石英 砂粒、含有	色調淡赤褐色、焼成良好、完形、内面磨滅
16	土師型器皿	口径 12.8	口縁部横ナデ、胴部、竪方向へラ削り	石英、雲母 砂粒、含有	色調淡褐色、焼成良好、60%残
17	土師型器皿	口径 15.4	口縁部横ナデ、胴部、粗い綫方向へラ削り	砂粒含有	色調赤褐色、焼成良好、60%残
18	土師器	口径 16.6	口縁部横ナデ、胴部上半横方向へラ削り	石英、小石 含有	色調茶褐色、焼成良好、口縁部としては完形
19	土瓶	口径 10.7 底径 6.5 器高 10.5	口縁部丁寧な横ナデ、胴部上半横方向へラ削り、下半綫方向へラ削り、底部粗いへラ削り	小粒子含有	色調茶褐色、底部は黒色、焼成良好、完形
20	土師鉢	口径 22.4	口縁部横ナデ、胴部斜及び綫方向へラ削り、内面ナデ	若干の小粒 砂密	色調淡茶褐色、焼成良好、70%残
21	土師壺	口径 11.6	口縁部横ナデ、胴部上半横方向へラ削り	若干の砂粒 含有	色調赤褐色、焼成良好、口縁部としては完形
22	土師器	口径 18.6 底径 7.0 孔径 2.0 器高 13.5	口縁部丁寧な横ナデ、胴部へラ削り、底部へラ削り、内面ナデ	若干の砂粒 含有	淡褐色、焼成良好、完形
23	土師瓶	口径 19.6 底径 5.3 孔径 1.9 器高 19.0	口縁部横ナデ、胴部綫方向へラ削り、底部へラ削り、内面ナデ	石英、砂粒 含有	淡赤褐色、底部火を受け、焼成良好、完形
24	土瓶坏	口径 11.7 器高 7.4	口縁部横ナデ、底部中央へラ削り後、周縁部のみ一定方向へラ削り、内面ナデ	石英含有	色調外面黒褐色、内面淡褐色、焼成良好、完形 全体に丁寧な作り
25	土瓶坏	口径 12.7 器高 4.1	口縁部横ナデ、底部中央へラ削り後、周縁部のみ一定方向へラ削り、内面ナデ	石英、砂粒 含有	色調底部灰褐色、口縁部淡茶褐色、焼成良好、50%残 平底に近い底部
26	土瓶坏	口径 12.2 器高 4.0	口縁部横ナデ、底部へラ削り、内面ナデ	小粒子含有	色調暗黒褐色、焼成良好、40%残
27	土師器坏	脚径 4.4	脚部、竪方向へラ削り 脚部、横ナデ	小石、砂粒 含有	色調赤茶褐色、焼成良好、脚部としては完形

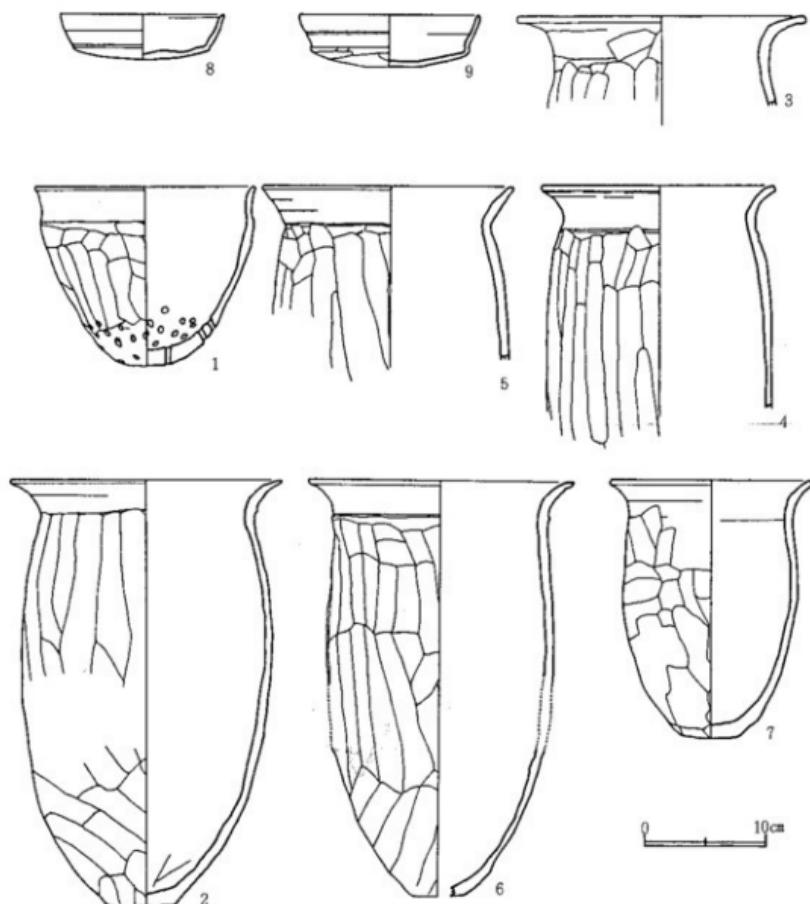
116号住居跡



1. 常滑市十津川（陶土粒含む）
2. 水戸田駅跡（ローム粒、ロームブロック、多目的陶土粒、埴土ブロック）
3. 飯山地区（白石粘土層（陶土粒、埴土ブロック含む）、粘土粘土層（ローム粒、埴土ブロック含む））
4. 飯山地区（白石粘土層（ローム粒、埴土ブロック含む））
5. 飯山地区（多目的陶土粒、埴土ブロック含む）
6. 飯山地区（多目的陶土粒、埴土ブロック、ローム粒、ロームブロック含む）
7. 飯山地区（陶土粒、下水排水管）
8. 飯山地区（陶土粒、埴土粒の混在土層（F-P、後土ブロック、ローム粒、ロームブロック））
9. 飯山地区（P-P、ローム粒、ロームブロック含む）
10. 飯山地区（ローム粒、ロームブロック含む）

- a. 黒色土層（黒土粒、埴土ブロック含む）
 b. 山根土と本褐色土との混合層（浮石、F-P、後化物、ロームブロック、ローム粒、埴土粒、表面下2cm付近の浮石）
 c. 黑色土層（浮石、F-P、後化物、埴土粒、埴土ブロック、埴土ブロック含む）
 d. 黑色土層（ローム粒、埴土ブロック、埴土粒の底面丸打）
 e. 本褐色土層（多目的陶土粒、埴土ブロック含む）
 f. 本褐色土層（多目的陶土粒、埴土粒）
 g. 本褐色土層（多目的陶土粒、埴土粒）
 h. 本褐色土層（浮石、下水排水管）
 i. 本褐色土層（P-P、ローム粒、ロームブロック含む）
 j. 黑色土層（ローム粒、ロームブロック含む）

本住居跡はD区南丘陵南西端に位置し、そのプランは東西がやや長い方形を呈する。壁は70°の傾斜で掘り込まれ、床面はほぼ平坦である。竈は北壁中央部に付設され、天井部、袖部には多量の白色粘土が使用され、両袖、支脚には甕を倒立状態で使用している。煙道部は住居外に延び、燃焼部、煙道部はよく焼けている。柱穴は主柱穴と推定される4個のピットを検出し、それぞれの間隔は約3.5mで方形の配列を示す。遺物は罐内に横倒しの状態で土師器の長甕が2つ出土している。また竈左袖付近で土製丸玉が、貯蔵穴付近では多孔の甕（土師器）が倒立状態で出土している。

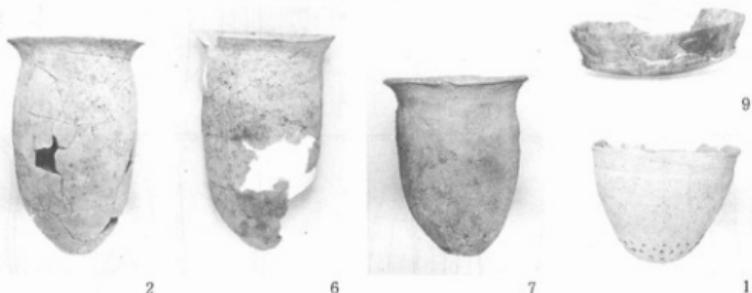


插図26 118号住居跡出土遺物実測図

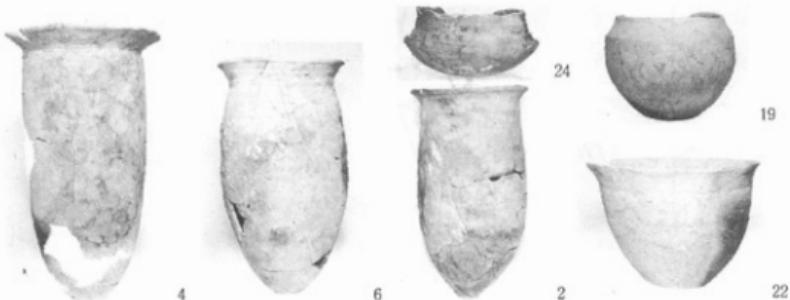
118号住居跡出土遺物一覧表

番号	器種	法量(cm)	技 法 等	胎 土	備 考
1	土 鋤 壺 器	口径 17.8 底径 2.5 孔径 0.3~0.4 器高 14.3	口縁部横ナデ、胸部へラ削り、孔はヘラ状工具で穿たれ、76個有り	石英、砂粒含有	色調黄褐色、焼成良好、完形、底部付近に火を受けた痕跡有り
2	土 鋤 壺 器	口径 21.7 底径 5.1 器高 34.5	口縁部横ナデ、胸部上半総方向へラ削り、中~下半斜方向へラ削り、底部へラ削り	石英、雲母 砂粒含有	色調淡褐色、焼成良好、完形、器面が磨滅している
3	土 鋤 壺 器	口径 23.5	口縁部横ナデ、胸部上半総方向へラ削り	砂粒、小石等含有	色調茶褐色、焼成やや不良、口縁部は完形、全体に歪みあり難な作り
4	土 鋤 壺 器	口径 19.0	口縁部横ナデ、胸部上~中半総方向へラ削り、内面ナデ	石英、小石 砂粒含有	色調淡茶褐色、焼成良好、60%残
5	土 鋤 壺 器	口径 20.6	口縁部横ナデ、胸部上半総方向へラ削り	石英、雲母 含有	色調淡褐色、焼成良好、50%残
6	土 鋤 壺 器	口径 21.4 底径 4.2 器高 33.8	口縁部横ナデ、胸部、総方向もしくは斜方向へラ削り 内面ナデ	多量の石英 雲母 砂粒 含有	色調淡赤褐色、焼成良好、85%残 全体が磨滅している
7	土 鋤 壺 器	口径 16.2 底径 4.6 器高 20.9	口縁部横ナデ、胸部へラ削り、底部、粗いへラ削り	石英、小石 含有	色調淡茶褐色、焼成良好、完形、底部に更に強烈な磨滅
8	土 鋤 壺 器	口径 13.1 底径 3.8 器高	口縁部横ナデ、周縁部一定方向へラ削り後中央部へラ削り	多量の砂粒 含有	色調明褐色、焼成普通、器面荒れている、80%残
9	土 鋤 壺 器	口径 14.4 底径 4.7 器高	口縁部横ナデ、底部へラ削り後、周縁部のみ一定方向へラ削り	若干の小石 砂粒含有	色調黒褐色、焼成良好、95%残
10	土 製 丸 玉	1.25×1.2、 径 0.2cmの孔が穿たれる、 黒色で焼きは甘い			

図版17 118号住居跡出土遺物

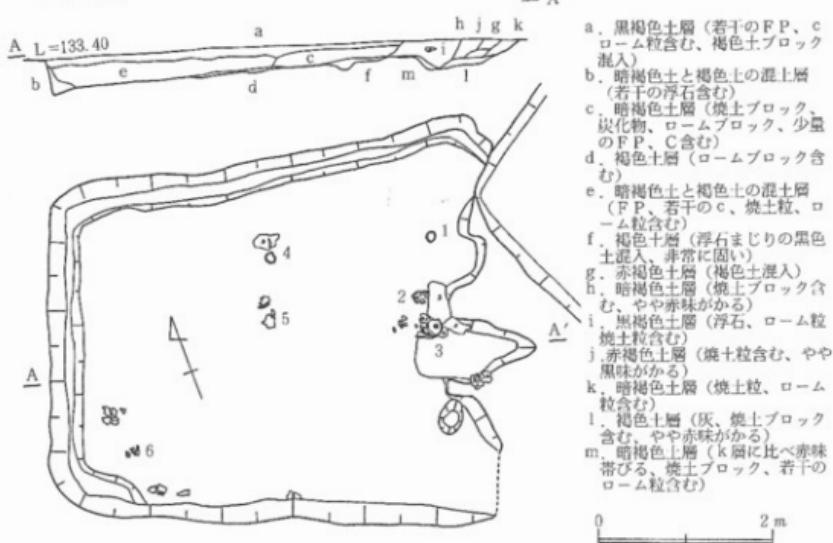


図版18 82号住居跡出土遺物

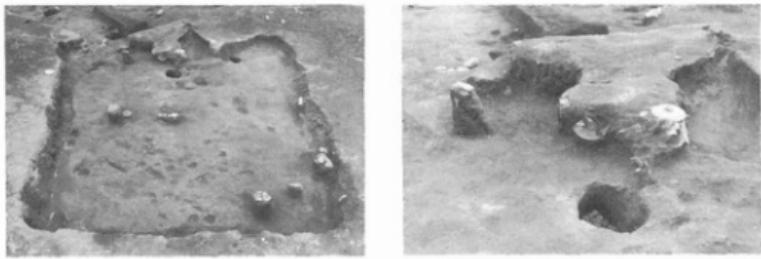


34号住居跡

挿図27

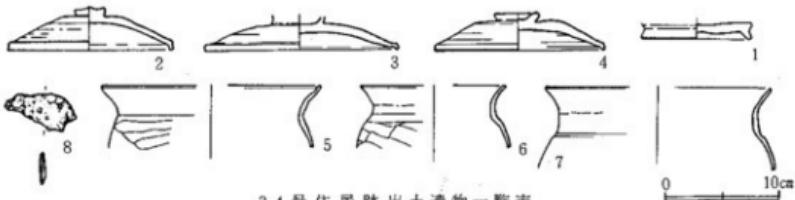


本住居はD区北側南東斜面に位置し東西が長軸となる不整長方形である。周溝は床面から9cmの深さで西壁から北壁に回っている。壁の立上がりは北側で50cm前後、南側で20cm前後で傾斜のある地形であることがわかる。柱穴は認められない。竈は、東壁わずか南寄りに位置し、壁をわずか作り出して角安及び凝灰岩の袖と接続させている。燃焼部は床面より20cm程度、煙道部にゆるやかに登る。竈の南袖わきに深さ20cm径30cm程のピットがある。遺物は、竈北袖に着いて須恵器蓋が集中して出土したほか床面中央北壁寄りと南西隅にまとまって出土した。



図版19 34号住居跡遺物出土状態及び出土遺物

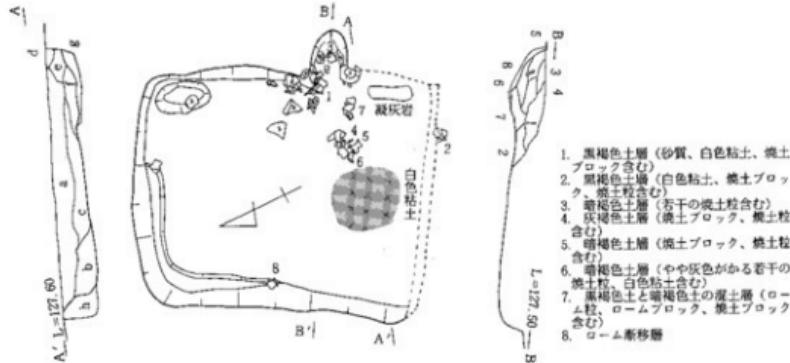
插図28 34号住居跡出土遺物実測図



34号住居跡出土遺物一覧表

番号	器種	法量(cm)	技法等	胎土	備考
1	須恵器	高台径 9.2	底部回転ヘラ切り後、手持ヘラ調整、付け高台	白色粒子 若干の小石 含有	色調青灰色、焼成良好、高台部としては完形
2	須恵器	口径 14.2 器高 3.9	天井部回転ヘラ削り後フマミ貼付、側部ロクロナデ		色調灰色、焼成良好、完形
3	須恵器	口径 16.5 器高 3.2	天井部回転ヘラ削り後フマミ貼付シロクロナデ、側部ヘラナデ	砂粒含有	色調茶灰色、焼成良好、90%残
4	須恵器	口径 15.5 器高 3.7	天井部回転ヘラ削り後フマミ貼付、側部ロクロナデ	砂粒、小石 等含有	色調白灰色、口縁一部茶剥色、焼成良好、90%残
5	土師器	口径 19.0	口縁部横ナデ、胴部上半横ヘラ削り	砂粒含有	色調赤褐色、焼成良好、口縁部50%残、薄手
6	土師器	口径 12.4	口縁部横ナデ、胴部上半横ヘラ削り	多量の砂粒 含有	色調暗褐色、焼成良好、口縁部50%残、薄手
7	土師器	口径 18.5	口縁部横ナデ、胴部上半横ヘラ削り	砂粒含有	色調内面橙褐色、外面黄味帶びる、焼成普通、口縁60%残
8	鐵刀	6.0×2.6	柄の木質部が一部残存		

88号住居跡

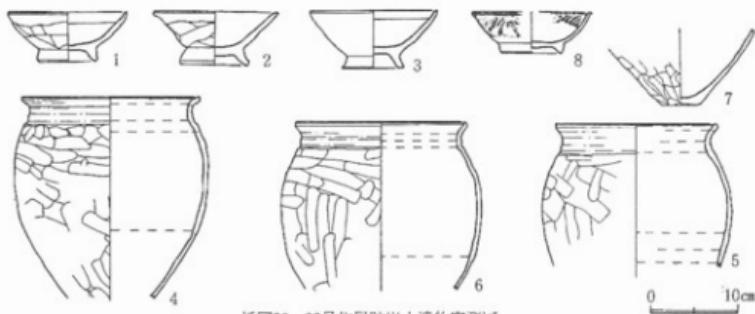
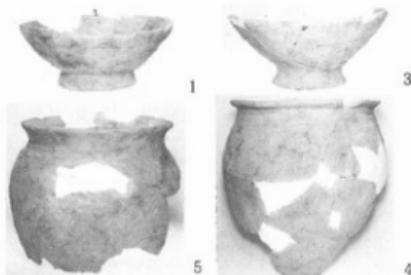


插図29 a. 黒褐色土層(F.P. c.若干のB含む砂質)
b. 黒褐色土層(F.P. c.ローム含む)
c. 黒褐色土層(若干のF.P. c.含む)
d. 黑褐色土層(燒土ブロック含む)
e. 黑褐色土層(白色粘土、燒土粒、燒土ブロック含む)
f. 黑褐色土層(暗褐色土混入、白色粘土、燒土ブロック含む)
g. 黑褐色土層(つまりあり)
h. ローム断移層

本住居跡はF区南東部に位置し、そのプランは南北に長い方形を呈する、壁は不明瞭な南壁を除き約80°の傾斜で掘り込まれ、床面南側には白色粘土が散布している。ピットは住居北東隅に検出されたが用途は不明である、周溝は北壁及び西壁下の一部で検出されているが、床面下1~2cmと浅い。甕は両袖部に石を使い、あまり焼けていない。遺物は甕内及び甕周辺に多く、土師器の甕や高台付甕が出土している。また西壁下中央から灰釉陶器（高台付甕）が出土している。



図版20 88号住居跡遺物出土状態及び出土遺物



図版30 88号住居跡出土遺物実測図

88号住居跡出土遺物一覧表

番号	器種	法量(cm)	技法等	胎土	備考
1	土高台器甕	口径 13.5 高台径 6.5 器高 5.6	ロクロ彫形か、口縁部横ナデ体部 ヘラ削り、底部高台貼付け後ロク ロナデ、内面は底部除きロクロナ デ	雲母 砂粒含有	色調暗褐色、黒斑がつく 焼成やや不良、元形、全体 に難な作り
2	土高台器甕	口径 13.9 高台径 7.4 器高 6.2	ロクロ彫形か、口縁部横ナデ体部 ヘラ削り、底部高台貼付け後ロク ロナデ、内面ロクロナデ	若干の小石 含有	色調淡茶褐色、焼成やや不 良、60%残
3	土高台器甕	口径 14.4 高台径 7.0 器高 6.7	ロクロ彫形か、口縁部横ナデ体部 ヘラ削り、底部高台貼付け後ロク ロナデ、内面ロクロナデ	小石、砂粒 含有	色調暗褐色、焼成良好、 80%残、内部に火をうけた 痕跡残る
4	土高台器甕	口径 20.3	ロ縁部横ナデ、胴部上半横方向へ ラ削り、下半縱方向へラ削り、内面 ヘラナデ	雲母、小石 等含有	色調淡黄褐色、焼成良好、 60%残、ロ縁部に歪みあり 全体に器肉が厚い
5	土高台器甕	口径 18.2	ロ縁部横ナデ、胴部上半横及び斜 め方向へラ削り、下半縱方向へラ 削り、内面ヘラナデ	石英、雲母 小石、含有	色調赤味帯びた茶褐色、燒 成良好、50%残、ロ縁部歪 み有り
8	灰釉陶器甕	口径 13.0 高台径 7.7 器高 4.75	ロクロ彫形、底部切り離し、ヘラ 調整後高台貼付、フケガケ内面底 部と高台部に重ね焼きの痕跡残る	若干の小石 含有	色調施釉部分は淡緑色、そ の他は灰白色、焼成良好、 60%残

表覽一構造住居穴盤

住居 番号	形 状	次 向	規 模 (m) (長軸×短軸) 壁 厚	床面積 (m ²)	床面積 (cm)	か ま ど	か ま ど	周 柱 穴	柱 穴	附 屬 穴	備 考	(数字の単位はcm)	重複関係
						高 度 (cm)	底 幅 (cm)	位 置	幅 (cm)	高 度 (cm)			
21	方	N-3°-W(西)	4.2×4.1	17.2	東壁南寄柱土・ 西壁南寄柱土・ 左側柱土	5.7	×	×	×	○	東側柱カマド右側、南側柱間に方柱穴、西壁柱カマドの防風穴は 左側柱カマド右側、南側柱間に方柱穴、西壁柱カマド左側	21→W-2	
22	方	N-37°-W(西)	6.7×6.5	43.5	北壁中央 北壁南寄柱土・ 左側柱	58	○	○	○	○	防風穴はカマド左側、西壁に1つ、東側に1つ在り土器多 く出土。支脚に窓内床部を記述。	○	
23	方	N-34°-E(西)	3.1×2.9	7.6	東壁南寄柱土・ 右側柱	9	○	○	○	○	カマドはH-17の虫を振り込んで蓋つたもので補強する ために石組で腰張され、柱はカマド右側	17→18→23	
24	方	N-39°-W(西)	3.3×3.2	9.9	東壁中央 柱土・ 右側柱	30	○	○	○	○	柱はカマド右側、東側に在り。床脚は南壁と西壁の一部のみ。 柱はロームを厚さ20mm割りにして白色粘土を使用	○	
25	方	N-28°-W(東)	4.4×4.2	18.5	東壁南寄柱土・ 左側柱	50	○	○	○	○	柱は接着材、柱次は2.3m×2.3m。防風穴はカマド右側	○	
26	方	N-33°-W(西)	5.3×5	26.5	北壁東寄柱土・ 右側柱	60	○	○	○	○	カマド右側。柱は厚さ25mm割り残して構築。柱穴では 2.5mの正方形。柱脚はカマド右側、北東隅。	○	
27	長	N-28°-E(西)	2.75×2 4.46	5.5	東壁中央 柱土・ 左側柱	56	○	○	○	○	柱はカマド右側、柱頭裏側に在り。柱穴は柱頭中央部西 部のみ。	○	
28	方	N-30°-E(西)	3.8×3.5	13.3	西壁北寄柱土・ 左側柱	30	○	○	○	○	柱穴は2.2m×1.7mで深さはまちまちで18~52。防風穴は カマド右側、北隅に在り。	28→W-3	
29	方	N-38°-W(西)	4.3×4.2	18.1	西壁南寄柱土・ 右側柱	55	○	○	○	○	柱はカマド右側、柱頭裏側に在り。遺物は防風穴カマドに集中し て出土。カマド右側50cmの新に多孔質出土。	○	
30	長	N-13°-W(東)	5.5×5	27.5	東壁南寄柱土・ 右側柱	55	○	○	○	○	柱穴は約2.4mの正方形。柱頭裏側にカマド右側在 る。カマド左側に古いカマド跡在り。	31? (未 明)	
31	長	N-9°-W(西)	3.3×2.7?	8.9?	東壁南寄柱土・ 左側柱	60	○	○	○	○	柱はカマド右側で車輪からやや離れた所に在る。瓦片 と石材と柱頭裏側に在り。瓦片はカマド右側を柔らかくしている。	30→31	
32	長	N-21°-E(西)	3.3×2.6?	8.6?	東壁南寄柱土・ 右側柱	55	○	○	○	○	柱はカマド右側、南隅に在り、他に北隅に径60、深さ 27のピットを検出。	○	
33	方	N-40°-E(西)	4×3.8	15.2	西壁北寄柱土・ 左側柱	65	○	○	○	○	柱はカマド右側、北隅。遺物はカマド前と防風穴に集 中して出土。	○	
34	不	N-18°-W(西)	4.6×3.3	17.3	東壁南寄柱土・ 左側柱	40	○	○	○	○	本 文 参 照	35→36	
35	方	N-26°-W(西)	4.4×4.2	18.5	東壁南寄柱土・ 左側柱	50	○	○	○	○	防風穴はカマド右側、南東隅。柱穴は心柱で約2.6mの正 方形。手に引かれており、現段階は推定。防風穴はカマド右側の前原石が防風穴か現段階。	35→34→36	
36	長	N-22°-E(西)	4.2×3	12?	東壁南寄柱土・ 右側柱	40	○	○	○	○	北側をW-4に接する柱の現段階。	35→36→W-4	
37	方	N-12°-W(西)	3.9×3.7?	14.4?	東壁南寄柱土・ 左側柱	23	?	○	○	○	南東隅柱の現段階。	37→38→T-1	
38	方	N-34°-W(東)	5.5×5.4	29.7	北壁東寄柱土・ 右側柱	65	○	○	○	○	柱は防風穴方柱で、カマド右側、北隅。柱穴は心柱で 3.5mの正方形。カマド右側、北隅。柱穴は心柱で よりかなり離隔。	37→38→T-1	
39	方	N-38°-W(西)	3.9×3.9	15.2	東壁南寄柱土・ 左側柱	65	○	○	○	○	柱はカマド右側、北隅。他に北隅に径1つピットがある が性格不明。	○	
40	方	N-41°-E(西)	3.45×3.25	11.2	東壁中央 柱土・ 右側柱	65	○	○	○	○	柱は南北隅に皆み合状のロームの張り残しが在る。防風穴は カマド右側。	○	
41	方	N-6°-W(西)	1.7×1.6	2.7	東壁南寄柱土・ 左側柱	85	○	○	○	○	非常に小さくて深い住居。	○	

住居番号	形態	其向	用檻(=幅×奥間) 壁 壁	床面積 (m ²)	かまど 位	かまど 壁 壁	柱 穴	貯 穴	備		考 察	重複関係
									柱	窓	薄	
42	方-W(西)	形	4.8×4.6 90	22.1	中央 東壁中央 土器 立石	25.9 (-部) (4)	○	○	柱穴は西側にやや開き気味の不規方形。貯藏穴は東壁カマド右側。	○	柱穴は西側にやや開き気味の不規方形。貯藏穴は北側に白色粘土。	○
43	方-E(北)	形	2.35×2.3 90	5.4	東壁南寄 土器 立石	30	×	×	柱穴はカマド右側。カマド底部は土器をシンにして構築。柱部は横と直角に構成。	○	柱穴はカマド右側。柱部は土器をシンにして構築。柱部は土器をシンにして構築。	○
44	方-N-W(西)	形	4×3.8 80	15.2	東壁南寄 土器 立石	30	×	×	柱穴はカマド右側。柱部は土器をシンにして構築。	○	柱穴はカマド右側。柱部は土器をシンにして構築。	○
45	方-N-E(北)	形	4.4×4.3 85	18.9	東壁南寄 土器 立石	45	×	○	柱穴はカマド右側。柱部は土器をシンにして構築。	○	柱穴はカマド右側。柱部は土器をシンにして構築。	○
46	長方-W(西)	形	3.5?×2.8? 35	9.8?	中央 (中間) 西壁中央 土器 立石	40	○	○	柱穴はカマド左側。柱部は土器をシンにして構築。	○	柱穴はカマド左側。柱部は土器をシンにして構築。	○
47	方-W(東)	形	4.4×4.2 65	18.5	西壁南寄 土器 立石	40	○	○	柱穴はカマド左側。柱部は土器をシンにして構築。	○	柱穴はカマド左側。柱部は土器をシンにして構築。	○
48	長方-W(東)	形	3.8×3.45 90	13.1	東壁南寄 土器 立石	40	×	×	柱穴はカマド左側。柱部は土器をシンにして構築。	○	柱穴はカマド左側。柱部は土器をシンにして構築。	○
49	長方-E(西)	形	5.8×5.5 80	31.9	北壁中央 土器 立石	40	×	×	柱穴はカマド左側。柱部は土器をシンにして構築。	○	柱穴はカマド左側。柱部は土器をシンにして構築。	○
50	長方-W(東)	形	3.6×3.2 70	11.5	東壁南寄 土器 立石	40	×	×	柱穴はカマド左側。柱部は土器をシンにして構築。	○	柱穴はカマド左側。柱部は土器をシンにして構築。	○
51	方-N-E(北)	形	4.55×4.45 80	2.0	東壁南寄 土器 立石	35	×	○	柱穴はカマド右側。柱部は土器をシンにして構築。	○	柱穴はカマド右側。柱部は土器をシンにして構築。	○
52	長方-W(西)	形	4×2.8 85	11.2	東壁中央 土器 立石	30	×	○	柱穴はカマド右側。柱部は土器をシンにして構築。	○	柱穴はカマド右側。柱部は土器をシンにして構築。	○
53	長方-W(東)	形	3.45×3.1 35	10.7	東壁南寄 土器 立石	55	×	×	柱穴はカマド右側。柱部は土器をシンにして構築。	○	柱穴はカマド右側。柱部は土器をシンにして構築。	○
54	方-N-W(西)	形	4.1×4.1 85	16.8	東壁南寄 土器 立石	30	×	×	柱穴はカマド右側。柱部は土器をシンにして構築。	○	柱穴はカマド右側。柱部は土器をシンにして構築。	○
55	方-N-W(西)	形	4.1?×3.9? 20	16?	?	?	?	○	柱穴はカマド右側。柱部は土器をシンにして構築。	○	柱穴はカマド右側。柱部は土器をシンにして構築。	○
56	方-N-W(西)	形	4.25×4.1 100	17.4	東壁南寄 土器 立石	50	×	○	柱穴はカマド右側。柱部は土器をシンにして構築。	○	柱穴はカマド右側。柱部は土器をシンにして構築。	○
57	方-N-W(西)	形	6.25×5.7 50	35.6	東壁南寄 土器 立石	50	×	○	柱穴はカマド右側。柱部は土器をシンにして構築。	○	柱穴はカマド右側。柱部は土器をシンにして構築。	○
58	長方-W(西)	形	6.2×5.8 35	36	西壁南寄 土器 立石	45 (-部) (2)?	○	○	柱穴はカマド右側。柱部は土器をシンにして構築。	○	柱穴はカマド右側。柱部は土器をシンにして構築。	○
59	長方-E(西)	形	5.35×4.5 35	24.1	東壁南寄 土器 立石	50?	?	○	柱穴はカマド右側。柱部は土器をシンにして構築。	○	柱穴はカマド右側。柱部は土器をシンにして構築。	○
60	長方-E(西)	形	? 6以上×5以上 30	?	?	?	○	○	柱穴はカマド右側。柱部は土器をシンにして構築。	○	柱穴はカマド右側。柱部は土器をシンにして構築。	○
61	方-N-E(西)	形	7.3×7.3 50	53.3	北壁東寄 土器 立石	30 (-部) (3)?	○	○	柱穴は北側に白色粘土を施用。北壁は心地4.5m×4.5m。	○	柱穴は北側に白色粘土を施用。北壁は心地4.5m×4.5m。	○

作 住 居 室 番 号	形 様	走 向	規 格 (E幅×S幅) (m)	床面積 (m ²)	柱 位 置 (柱 間 距 離 (cm))	柱 位 置 (柱 間 距 離 (cm))	備 考			重 複 関 係
							か ま ど	脚 柱	脚 火 穴	
81	方 N-9°-W(東)	形	6.5×6.5	43.2	東壁南寄柱上・30 東壁南寄柱上・20	北端中央柱上 東壁南寄柱上・20	柱 位 置 (柱 間 距 離 (cm))	脚 火 穴	脚 溝	柱 位 置 (柱 間 距 離 (cm))
82	方 N-29°-W(東)	形	4.55×4.4	20	東壁南寄柱上・30 東壁南寄柱上・20	北端中央柱上 東壁南寄柱上・20	(2)	(2)	(2)	M-1→SS
83	方 N-31°-W(西)	形	2.9×2.8	8.1	東壁南寄柱上・30 東壁南寄柱上・20	北端中央柱上 東壁南寄柱上・20	(2)	(2)	(2)	柱穴は北西壁寄り2間(部屋は約2m ²)、南、東端は1間(約4m)。4隅の柱穴は大小2つの通り方有り。(並て皆つか?)
84	方 N-8°-W(西)	形	4.1×4.05	16.6	北壁更寄柱上 東壁南寄柱上・30	北端中央柱上 東壁南寄柱上・20	(2)	(2)	(2)	脚穴はカマド右側。カマドを離から1m以上も離つて造 り当住居柱から2段脚穴はカマド右側、北東隅。カマド焼き口 に土器を据えて備えている。
85	方 N-4°-W(東)	形	3.9×3.8	14.8	東壁南寄柱上・30 東壁南寄柱上・20	北端中央柱上 東壁南寄柱上・20	(2)	(2)	(2)	脚穴はカマドの右側で長円形。真壁カマドが先に造 られたものと思われる。
86	長 N-3°-万-E(西)	形	3.7×3	11.1	東壁南寄柱上・35 東壁南寄柱上・30	東壁南寄柱上・35 東壁南寄柱上・30	(2)	(2)	(2)	脚穴はカマド右側、南東隅。扇平な立石に接して長脚牆 がカマドにかかる。状況で出土。木面は堅白。
87	方 N-6°-W(西)	形	5.3×5.2	27.6	東壁南寄柱上 東壁南寄柱上・30	東壁南寄柱上 東壁南寄柱上・30	(2)	(2)	(2)	脚穴はカマド右側、南東隅。柱穴は木頭で穴開け心地で2.9m。
88	長 N-27°-万-E(東)	形	3.9×2.2	6.6?	東壁南寄柱上 東壁南寄柱上・30	東壁南寄柱上 東壁南寄柱上・30	(2)	(2)	(2)	西脚牆はカマド右側、南東隅が欠けているが穴開け心地で2.9m。
89	方 N-42°-W(東)	形	4.2×4.2	17.6	東壁南寄柱上 東壁南寄柱上・30	東壁南寄柱上 東壁南寄柱上・30	(2)	(2)	(2)	脚穴はカマド右側。
90	長 N-9°-万-E(西)	形	4.0×3	12	東壁南寄柱上 東壁南寄柱上・30	東壁南寄柱上 東壁南寄柱上・30	(2)	(2)	(2)	脚穴はカマド右側、南東隅。
91	長 N-10°-万-E(西)	形	3.4×3	10.2	東壁南寄柱上 東壁南寄柱上・30	東壁南寄柱上 東壁南寄柱上・30	(2)	(2)	(2)	脚穴はカマド右側、南東隅。
92	長 N-3°-万-W(東)	形	2.39×1.4 7.9	3.2?	東壁中央柱上 東壁中央柱上	東壁中央柱上 東壁中央柱上	(2)	(2)	(2)	カマド跡とピットのある東壁付近の遺物から住居と認定。
93	長 N-14°-万-E(西)	形	5.1×4	20	東壁南寄柱上 東壁南寄柱上・40	東壁南寄柱上 東壁南寄柱上・40	(2)	(2)	(2)	脚穴はカマド右側。カマドは石材で補強して構築。柱穴 は南東隅を欠く。
94	長 N-16°-万-E(西)	形	2.9×2.2	6.4	東壁南寄柱上 東壁南寄柱上・30	東壁南寄柱上 東壁南寄柱上・30	(2)	(2)	(2)	脚穴はカマド右側、南東隅。カマドはH-93を補つて乘 っているために石材で補強している。
95	長 N-10°-万-E(東)	形	3.5×3	10.5?	東壁中央柱上 東壁中央柱上	東壁中央柱上 東壁中央柱上	(2)	(2)	(2)	南コーナー未調査。カマドの位置は施士から推定。
96	長 N-4°-万-W(西)	形	4.95×4.65	23	○	○	(2)	(2)	(2)	89→SS
97	長 N-17°-万-W(西)	形	5.3×4.3	22.8	○	○	(2)	(2)	(2)	89→SS
98	長 N-38°-2-W(東)	形	9	?	?	?	(2)	(2)	(2)	99→SS
99	長 N-13°-2-E(東)	形	4×3?	?	?	?	(2)	(2)	(2)	99→SS

位置 店舗 番号	形 状	走 出 方 向	規 模 (長 さ × 幅 × 高 さ (cm))	床面積 (m ²)	床面積 (cm)	か ま ど 位 置 (cm)	周 柱 穴 (cm)	貯 藏 穴 (cm)	備 考 (数字の単位(cm))	重 複 関 係
横 幅 (cm)	高 さ (cm)									
100 N-15°-E(東)	?	1.7×?	60	?	?	?	?	?	?	99-100
101 長 方 形?	4.2×2.8	35	11.8?	東壁南寄 塩石・30?	×	×	W-9に南壁を取引られて、あるが開いたが、床面がH-102墨土上に伸びていたのである程度の範囲は推定できだ。	W-9	W-9	
102 長 方 形?	2.7×1.9	60	5.1	東壁南寄	?	?	?	?	?	102-103→W-9
103 不 整 方 形?	?	35	?	東壁南寄	?	?	?	?	?	103→101→W-9
104 N-25°-B(西)	?	?	?	?	?	?	?	?	?	北コーナーのムラ壁。
105 長 -41°-E(南) 形	4.7×3	40	14.1	東壁南寄	• 45 (-部)	×	貯藏穴はカマド右側。カマド袖部はホームを厚さ20cm程引き抜いて櫛状で構成。	106-107 貯藏穴はカマド右側。南東隅から西隅にかけて住居中央部をW-10に切らして、窓枠は中央部西寄りに在る。	106-107 106-107	
106 長 N-34°-E(東) 形	5.4×4.5	25	24.3	?	?	?	?	?	?	
107 N-47°-E(南) 形	?	22	?	東壁南寄	• 30	?	?	?	?	東コーナーのムラ壁。
108 N-15°-B(西) 形	5.52×4.45	45	24.5?	東壁南寄	器・25 (-部)	○	貯藏室W-10に切られたいきのカマドは壁き口に土壁を据えて櫛状。柱穴は中心で3.3m×2.7mの長方形。	108-109 柱穴はカマド右側。南東隅。	108-109 108-109	
109 方 方 形?	2.65×2.55	40	6.8	東壁南寄	土器・20 (-部)	×	貯藏穴はカマド右側で非常に浅い。柱穴は中心で2.4mの正方形を呈する。	110 N-25°-B(西) 形	4.4×4.4	19.4
110 方 方 形?	3.1×2.9	36	9	東壁南寄	粘土・35 (-部)	○	東コーナーにW-10に切られている。	111 N-47°-W(東) 形	4.5×4.4	19.8
111 方 N-24°-W(東) 形	4.5×4.4	50	19.8	東壁南寄	粘土・45 (-部)	○	貯藏穴はカマド右側。柱穴はH-10に切られた2.2mの正方形。	112 N-28°-W(東) 形	5.4×5	27
112 方 方 形?	3.5	35	18.1	東壁南寄	粘土・15 (-部)	○	柱穴はH-10に切られた2.2mの正方形。柱穴はカマド右側。	113 N-30°-W(東) 形	5.1×5	25.5
113 不 整 方 形?	4.3×4.42	55	17.6	東壁南寄	粘土・19 (-部)	○	柱穴はH-10に切られた2.2mの正方形。柱穴はカマド右側。	114 N-27°-W(東) 形	4×3	12
114 方 方 形?	3.1×5	30	18.5	東壁中央	土器・35 (-部)	○	柱穴はH-116に切られる。柱穴はカマド左側。半分をH-116に切れる程の河原石10個体出土。	115 N-15°-W(東) 形	4.5×3.9	17.6
115 方 方 形?	4.3×4.3	45	18.5	東壁北寄	土器・36 (-部)	○	柱穴はカマド右側で長円形。カマド袖部は長脚壁を2脚	116 N-27°-W(東) 形	4×3	12
116 方 方 形?	60	?	?	東壁南寄	粘土・20 (-部)	×	柱穴はカマド右側。南東隅。柱穴を据えている。隣を出土。	117 N-15°-W(東) 形	5.5	17.6
117 方 方 形?	4.5×3.9	55	17.6	東壁南寄	土器・25 (-部)	○	柱穴はカマド右側。南東隅。柱穴を据えている。隣を出土。	118 N-25°-W(東) 形	5.5×5.2	28.6
118 方 方 形?	60	?	?	北壁中央	粘土・40 (-部)	○	柱穴はカマド右側で長円形。カマド袖部は長脚壁を2脚	119 N-40°-E(北) 形	4.3×4.3	18.5
119 方 方 形?	4.3×4.5	45	18.5	東壁北寄	土器・36 (-部)	○	柱穴はカマド右側で長円形。柱穴はH-10で2.3m×2.2m。			

住居番号	形 型	走 向	間 隙 (m) (長さ×短さ)	軸 線 (m) (長さ×短さ)	床面積 (畝)	かまど 位 置	かまど 縦 (cm)	周 柱	柱 次	貯 蔓 火	備 (数字の単位はcm)		考	重複関係
											横	縦		
120	方	N-3°-B(東) 形	4.8×4.7 67	22.6	東壁中央粘土・40 粘土・?	×	○ (4)	○	○	貯藏穴はカマド右側。土器はなし。柱穴は正方形。(70×60×深さ60)で杯状。土器はなし。柱穴は正方形。(42×42×40)。				
121	方	N-27°-W(西) 形	4.1×3.8 55	15.6	北壁東寄器 粘土・?	×	×	○	○	貯藏穴はカマド右側で方形。(45×30)。カマド桂部を土器と粘土で構築している。				
122	方	N-30°-W(東) 形	3.7×3.65 45	13.5	東壁南寄器 粘土・?	×	○ (4)	○	○	貯藏穴はカマド右側。カマドは長脚壺を焼き口に据えて既に段差を設けている。柱穴はなし。柱高は1.6m×1.5mのは正方形。				
123	方	N-35°-W(東) 形	5.1×5.1 45	26	北壁東寄器 粘土・40	×	○ (4)	○	○	貯藏穴はカマド右側。カマドは長脚壺をシンとして粘土質土器で構築している。柱穴は削り凹み。柱高は削り凹み。				
124	方	N-19°-E(西) 形	3.25×3.2 53	10.4	北壁東寄器 粘土・40	×	×	○	○	貯藏穴はカマド右側。カマド底面部には段差がある。				
125	方	N-24°-W(西) 形	4.1×4 65	16.4	東壁南寄器 粘土・35 (-無)	○ (6)	○	○	○	貯藏穴はカマド右側。柱穴は粘土で構築。柱穴は心材で正方形。				
126	方	N-18°-W(西) 形	6.35×6.1 45	38.7	東壁南寄器 粘土・35 (-無)	○ (4)?	○	○	○	貯藏穴はカマド右側。南東隅。柱穴は心材で3.7mの正方形。南西隅。柱穴は心材で3.7mの正方形。				
127	方	N-11°-W(西) 形	2.5×2.3 26	5.8	東壁南寄器 粘土・25	×	×	×	×	柱穴が住居南東コーナーに設けられており。焼き口に周辺を使用している。				
128	方	N-9°-W(西) 形	2.9×2.2 42	6.4	○	×	×	×	×	赤井戸系土器破片が埴生山から少量出土した。				
129	方	N-2°-W(西) 形	3.7×3 45	11.1	東壁南寄器 粘土・35	×	○ (4)	○	○	貯藏穴はカマド右側。柱穴は正方形。柱穴は50×60。	M-7-7			
130	方	N-38°-W(西) 形	5.3×5.2 55	27.6	東壁南寄器 粘土・40 (-無)	○	○	○	○	柱穴はカマド右側。柱穴は心材で3.2mの正方形。				
131	方	N-17°-W(西) 形	5.3×5 85	26.5?	北壁中央 粘土・45 (-無)	○ (3)	○ (2)?	○	○	東壁はW-2に切り落とす。柱穴はカマド左側に伸びられ、柱穴は2.6mの正方形。	W-2			
132	方	N-25°-W(東) 形	5.25×5.2 72	27.3	東壁南寄器 粘土・60 (-無)	○	○	○	○	貯藏穴はカマド右側。柱穴は心材で2.5mの正方形。北隅柱穴の深さが80の他に50以前後の深さ。				
133	不	N-12°-W(西) 形	3.4×2.8 80	9.5	東壁中央 粘土・45	×	×	○	○	貯藏穴はカマド右側。柱穴の深さが50以前後の深さ。				
134	長	N-36°-W(西) 形	4×2.7 45	10.8	東壁南寄器 粘土・40	○	×	○	○	貯藏穴はカマド右側。柱穴は心材で50以前の深さ。				
135	方	N-20°-E(西) 形	2.4×2.2 25	5.3	○	×	×	×	○	柱穴の深さが80の他に50以前の深さ。				
136	方	N-23°-E(西) 形	2 65	?	?	?	?	?	○ (1)?	?	北コーナーのみ確認			
137	方	N-40°-E(北) 形	3.8×3.7 20	14.1	東壁南寄器 粘土・40	×	×	○	○	貯藏穴はカマド右側。				
138	不	整 方 形	4.5×4.2? 40	18.9?	北壁東寄器 粘土・30 (-無)	○ (4)	○	○	○	南ド右隅。北東隅。柱穴は3脚が後退しており、柱穴はカマド右側。				
139	方	N-45°-E(北) 形	4.7×4.6 25	21.6	東壁中央 粘土・?	?	?	○	○	柱穴はカマド右側。				

住居番号	形態	走査方向	場面数(長×短軸) (cm)	床面積 (㎡)	かまど 位置	つくり 縫(cm)	周辺	柱 位置	火 葬穴	備 考	重複関係
140	方	N-30°-W(東)	3.2×3.1 60	9.9	北壁東寄	* 30	○	○	○	貯藏穴はカマド右側。柱穴は東隅を欠くが1.71.9mの正長。	
141	長-N-47°-E(北)	形	3.3×1.9 47	6.3	東壁中央	粘土・ $\frac{2}{3}$	○	○	○	貯藏穴はカマド右側。 柱穴は確定できる。	
142	方	N-15°-W(東)	4.7×4.7 55	22.1			×	○	○	南西コーナーをW-13に切られる。柱穴は重心で2.5m×2.2m。	[143]→W-13
143	方	N-45°-W(西)	5.1×5.1 40	26	南壁東寄	* 40	○	○	○	貯藏穴はカマド右側。カマド袖部は厚さ約30mm掘り残し既底は段差あり。柱穴は重心で3.1m~3.2mではほぼ正方形。	[143]→144→W-10
144	長-N-2°-W(西)	形	4×3.1 40	12.4?	東壁南寄	* 40	○	○	○		[143]→W-10
145	方	N-2°-W(西)	3×3 45	9?	?	?	×	○	?	焼土範囲 (50×45) が北西隅付近に検出された。	[143]→157→W-14
146	方	N-34°-W(西)	6×5.9 65	35.4	東壁南寄	土器・40 50(一部)	○	○	○	貯藏穴はカマド右側。柱穴は東隅を欠くが→辺3.1mの正長。	
147	長	N-20°-W(西)	4.7×4 55	18.8	東壁南寄	* 50	○	○	○	柱面は凸凹。住居中央西隅付近に炭化物の堆積みられ、	
148	長-N-52°-E(南)	形	5.2×4.86 55	25.5			○	○	○	東壁上端をW-13に切られる。先土範囲が西壁中央付近にみられた。柱穴は2.7m~2.8m×2.9m。	[143]→W-13
149	長	N-25°-W(東)	2.8×2.2 32	6.2	東壁南寄	? ?	○	○	○	南西隅に白色粘土が厚さ7~8mm面に付着。カマドはほつきりした形では検出されなかった。	
150	長	N-14°-W(西)	3×1.7 23	5.1	東壁南寄	* ?	×	○	○	貯藏穴はカマド右側、南東隅。	
151	長	N-26°-W(西)	?	?	?	?	?	?	?	北西コーナーのムラ跡。	[150]→162-171→W-15
152	長	N-33°-W(東)	4.9×4.55 95	22.3	西壁南寄	粘土・45 50(一部)	○	○	○	貯藏穴はカマド左側。	[152]→161→W-15
153	長	N-14°-W(東)	5.1×4.65 55	23.7	西壁南寄	粘土・35 (一部)	○	○	○	貯藏穴はカマド左側、南西隅。カマド袖部は焼き口に長割れ。	[153]→W-10
154	長	N-17°-W(西)	6.1×5.6 55	34.2			○	○	○	先土範囲は粘土を主とする。南西隅に厚さ約55mmを有せし使用。	
155	長	N-0°-E(西)	2.7×2.3 25	6.2	東壁南隅	?	○	○	○	貯藏穴はカマド右側、前壁下に在り。	[153]→W-16
156	方	N-14°-W(西)	4.4×4.25 25	18.7	東壁中央	土器・35 (一部)	○	○	○	貯藏穴はカマド右側、南東隅。柱穴は北西上端をW-15のために欠くが、柱間2.6mの正方形。焼き口に長割れ。	[153]→W-15
157	長	N-10°-W(西)	4.1×3.4? 30	13.9?	?	?	×	×	×	H-145の断面である可能性有り。	[145]→W-14
158	方	N-26°-W(東)	6.6×6.5 45	42.9	北壁南寄	粘土・30	○	○	○	貯藏穴はカマド右側。柱穴は重心で4mの正方形。カマド前かららか、多量に出土。	[153]→W-15
159	長	N-18°-W(西)	?	?	?	?	?	?	?	判断と思われる焼土範囲 (85×70) が北側寄りに検出された。	[153]→158

住居番号	形	走	状	基盤(長幅×短幅) mm	床面段 (cm)	床面段 (cm)	かまど			(数字の前位はcm) 考	重複関係
							位	置	縫(cm)		
160	N-26°-方	形	5.65×5.2	29.4	○	○	(1)	○	○	火葬住居か? H-15回轉。貯藏穴は柱と反対側の床面寄りに在り。	W-161
161	不整-方	W(西)	3.57×2.7?	9.5?	?	?	?	?	?	中壇に在り。貯藏穴は柱と反対側の床面寄りに在り。	W-15
162	N-1°-方	形	4×3.4	13.6	○	○	(1)	○	○	貯藏穴はカマド右側、南東隅。	W-15
163	N-1°-E(西)	形	3.35×3.15	10.6	○	○	(1)	○	○	貯藏穴はカマド右側、南東隅。	W-15
164	N-2°-W(東)	形	5.1×4.9	25	○	○	(1)	○	○	火葬住居。貯藏穴はカマド左側、北西隅。柱穴は中心で2.5mの正方形。カマド左側に後塗有り。	W-163
165	N-1°-W(東)	形	3×2.9	8.7	○	○	(1)	○	○	貯藏穴はカマド右側、南東隅。	W-163
166	N-18°-W(西)	?	3.1×3?	9.3?	○	○	(1)	○	○	火葬住居。中央東側部。その付近から鉄物が出土。	W-16
167	N-13°-E(東)	?	4.29×2?	?	?	?	?	?	?	貯藏穴はカマド右側、南東隅で長方形を呈する。	W-16
168	N-12°-W(東)	形	4.57×3.4	15.3?	○	○	(1)	○	○	火葬(全長約45m)は住居中央偏西寄りの穴で中央に在り。柱穴は中心で1.7m~1.8m×2.4m。貯藏穴は柱と共通。	W-170
169	N-14°-W(西)	形	4.4×4.2	18.5	?	?	?	?	?	W-15に貯藏物を切られている。柱穴は中心で2.5mの正方形を呈する。	W-15
170	N-6°-E(東)	?	3×?	?	?	?	?	?	?	火葬(全長約45m)は住居中央偏西寄りの穴で中央に在り。柱穴は中心で1.7m~1.8m×2.4m。貯藏穴は柱と共通。	W-15
171	N-26°-W(西)	?	4.7×3.6?	16.9?	○	○	(1)	○	○	柱穴を確認。床面をC型焼脣が埋める。焼土範囲が北壁寄りに検出された。	W-15
172	N-19°-E(西)	?	4.7×3.6?	16.9?	○	○	(1)	○	○	柱穴を確認。床面をC型焼脣が埋める。焼土範囲が北壁寄りに検出された。	W-15
173	N-20°-E(西)	形	3.4×2.5	8.5	○	○	(1)	○	○	柱穴を確認。床面をC型焼脣が埋める。焼土範囲が北壁寄りに検出された。	W-15
174	N-29°-E(西)	?	20	?	?	?	?	?	?	北コーナーのみ確認。	W-10
175	?	?	?	?	?	?	?	?	?	貯藏穴はカマド右側、南東隅と推定される。	W-15
176	N-28°-E(東)	?	4.7×4.1 (柱)	19.3?	?	?	?	?	?	カマド右側と埋められる焼土、堅牢な床面と貯藏穴の存在(カマド右側)とによって柱側として認定。	W-16
177	不整-方	形	4×3.7	14.8	○	○	(1)	○	○	西壁をW-2に切られたものの、ビック12×H-176が半分程埋まっている。	W-2
178	方	W(西)	4.68×4.55?	21.2?	?	?	?	?	?	南壁立ち上がり不明確。東に広がる台形状を呈する。	W-160
			70	?	?	?	?	?	?	カマドはW-15に切られているが、焼土範囲から推定。柱穴はカマド左側。	W-15

住居番号	形態	走 向	規模 (長幅×短幅) 壁 高 (cm)	床面積 (畠)	かまど			周 柱	穴	備 考	重複関係
					位 置	幅 (cm)	深 (cm)				
179	N-15°?	E(西)	3.97×?	?	?	?	?	?	?	?	北西コーナーと東壁の一部を確認。 前壁穴はカマド右側。盤立ち上がりほとんどなし。形状規 (i) 構造不明。
180	N-18°?	E(東)	?	?	?	?	?	?	?	?	177→181
181	長 方 形?	W(東)	2.7×?	?	?	?	?	?	?	?	カマドを井戸に切らされている。
	N 25°-W(東)		3.5	?	?	?	?	?	?	?	177→180

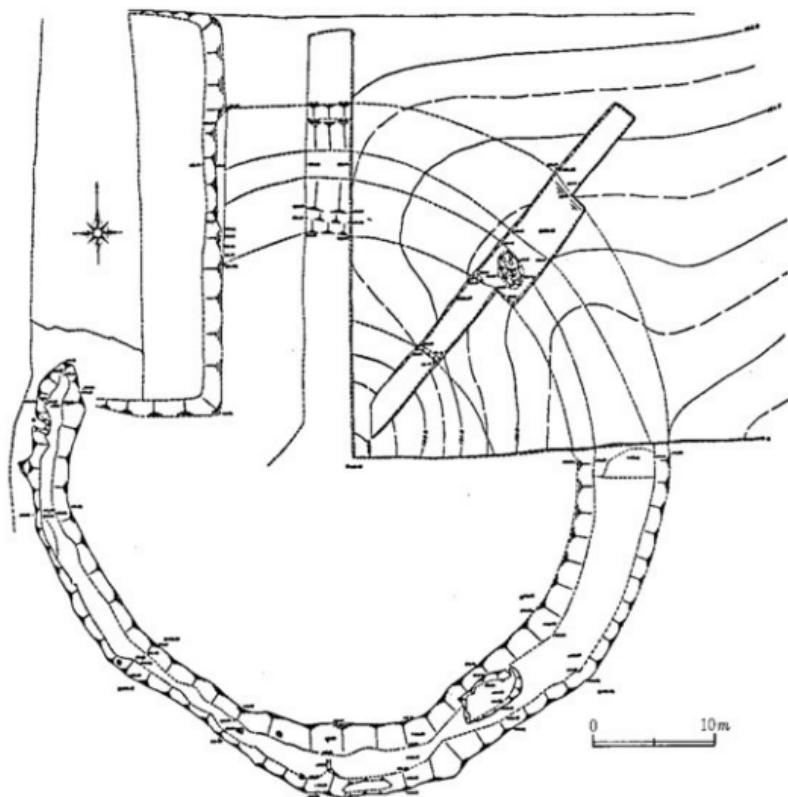
○住居の壁走向は南北線を基準とした。
○規模は他の下端を計測した。

小 結

弥生式土器を伴う住居はC区に13軒、D区南丘陵櫛野部分に15軒集中して検出された。この2つの分布の前後関係はいくつかの住居を除いてはD区の住居が若干後出するものと推定される。C区の住居の面積が14m²~20m²前後にござまるのに対してD区の住居は20m²以上のものが約半数と多く柱穴もしっかりした住居が多い。また、火災住居が多く、28軒中6軒が床面に多量の炭化物を堆積させている。後出の古墳時代の住居が108軒中3軒というところから見ればかなりの被災率であると言えよう。古墳時代の住居はD区、G区、F区にかけて西斜面を除いたほとんどの丘陵全城にわたる108軒を検出した。この時期の住居の特徴としては後出の奈良、平安時代の住居のはほとんどが東壁に窓を設置している(35例中1例だけ南壁置)のに対して東壁窓60%、北壁窓21.5%、西壁窓15.9%とさほどちであること、窓の構造においては壁面を凸形に掘り込み、袖部に長脚窓を使ったり(29例)、白色粘土等で固めたり(42例)して、丁寧に構築していることなどが挙げられる。又、貯蔵穴が窓の左側に在るものには14例あるがいざれもこの時期の住居である。他に手に握るのに丁度良い形、大きさの長形の河原石が住居内の1カ所に集中して出土したもののが6例あった。奈良時代後半から平安時代にかけての住居はD区東斜面、G区、F区に全部で40軒検出された。このうち13軒が石組みの壁を持ち、窓が缺されてその形態の不明の9軒を除けば40%強の割合となる。

4. 古墳

(1) 第62号墳（上毛古墳綜覧荒砥村第62号墳）



插図31 第62号墳 墳丘実測図

本古墳は、第64号墳の南約100m程の所に位置し、北東4半分の墳丘と墳丘西側の周堀断面によって以前から確認されていた。周堀は桑畑として耕作されており、残っていた4半分の墳丘も相当地にかく乱を受けていた。発掘調査の結果、二ツ岳軽石を含む黒色土層の上に黒色土を主体とする混土とロームブロックを主体とする混土の互層で盛土して構築されている事が分った。周堀は北から南へかけての東側半周が広く深く掘られ、南から西へかけて狭く浅くなっており、断面は平らな鍋底状を呈している。北西4半分は土取りのため地山から削り取られて確認できなかったが、一周していたものと思われる。周堀外周規模は東西で52m、南北で56.5m。墳丘は上毛古墳綜覧には大サ132尺、高サ13尺あるが、地層断面から直径約24mと推定される。周堀幅及び深さは北側で12.8mと80cm。東側で11.9mと95cm。主体部は既に完全に破壊されており、石室に使用されたもの

と思われる大きな石が1石残っていたのみであった。周堀北東部の埋土上部に入頭大以上の大きさの河原石が十数個まとめて発見されていたが、直接この古墳と結び付くかどうかは不明で、墳丘盛土上には葺石は特に認められなかった。埴輪は周堀から破片が出土したのみである。大正用水以北で乾谷沼を望む台地上には、今回調査した本古墳及び第64号墳、C区の北50m程の所にある石室の一部を露出している円墳、昭和54年度調査において発掘調査された第68号墳、第70号墳、第72号墳などがある。

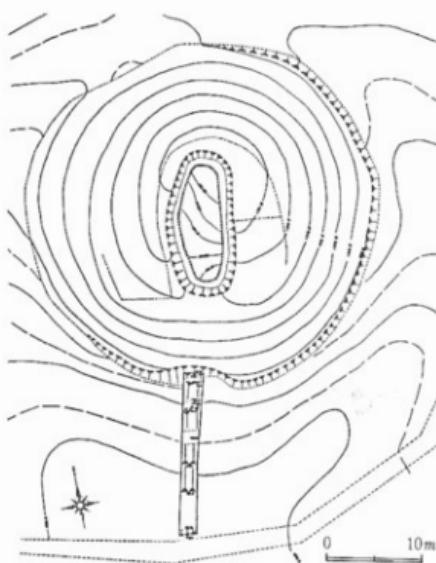


図版21 第62号墳 墳丘及び周堀



墳丘地層断面

(2) 第64号墳（上毛古墳綜覧荒砥村第64号墳）



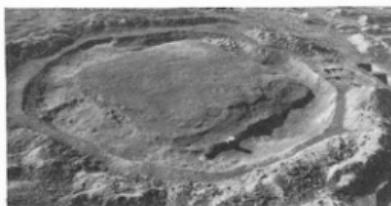
本古墳は、南に乾谷沼を望む台地上に在り、南に緩く下る斜面に構築されている。墳頂付近は松と櫟が生えており、回りを削土されている。墳丘の傾斜は急で円周は柔曲となっている。上毛古墳綜覧には大サ132尺、高サ18尺とあり、周堀は南側1カ所のみのトレンチによる調査であるため一周するかどうかは確認できなかったが、規模は古墳の想定中心点から周堀外周まで約28m、幅は10.5m～11m、深さは墳丘直下で155cm～165cmと深く掘られ、底は平らで南に行くに従って浅くなっている。墳丘及び主体部については、今回未調査のため詳細は不明であるが、現状で直径約36mの墳丘規模を持つ。葺石は特に認められなかった。埴輪は周堀から破片が出土したのみである。

挿図32 第64号墳墳丘火焔図

5. 周溝墓

周溝墓一覧表

番号	規 模		渡 り		
	径(m)	周溝幅(m)	方 向	幅(m)	
1号	南北 7.8 東西 8.2	上幅0.9~1.3 (下幅0.3~0.7)			F区北端に位置し、北周溝の一部をH-85に切られる方形の周溝墓。周溝は鍋底状を呈し、深さは遺構確認面から約30~45cm。周溝より上層破片が少量出土。
2号	14~15	1.3~3.6 (0.4~3)			周溝外周は円形で、内周は隅丸方形を呈する。周溝は鍋底状を呈し、深さは約45~80cm。周溝南半部より遺物出土。 (抽図33-1, 2, 3, 4, 5, 6)
3号	南北 14 東西 13.5	1.5~3 (0.7~2)			南周溝の一部をH-91に切られる方形の周溝墓。周溝は東辺、南辺が逆台形を呈し、深さ約65~70cm。北辺、西辺は鍋底状で約85~105cmと深く削削されていた。周溝より土器破片を出土。南へ約5°で下る斜面に構築。
4号	南北 13.2 東西 11.9	1~1.7 (0.6~1.1)			北辺に対して南辺が長く、南方に向かってやや広がった不整形の周溝墓。周溝は逆台形を呈し、底部は平らに削削されている。深さ約60~70cm。北側周溝東寄り底部から遺物出土。 (抽図33-7, 8, 9) 南へ約5°で下る斜面に構築。
5号	南北 17.8 東西 17.2?	25~4 (0.6~1.8)	S-86°-W	3.4	今回調査した周溝墓の中では最大規模の方形の周溝墓。周溝は鍋底状を呈し、深さは約70~80cm。南へ下る傾斜のために南側周溝はなんだらかに広がっている。西側周溝をW-2, W-17に、東側周溝をW-14にそれぞれ切られている。周溝より土器破片を出土。
6号	南北 11.6 東西 10.5	1~1.6 (0.3~0.9)	S-15°-W	2.2	円形の周溝墓。周溝の底部は比較的平らで深さは約35~55cm。出土遺物はなかった。
7号	南北 9.7 東西 10.3	0.8~1.6 (0.4~1)	N-80°-W	1.9~2	内側の周溝は直径約10mの円周を描く。外側の周溝は南東隅をH-129に切られているが「U」字型を呈し、遺構平面からはこの部分が円周溝に掘りたされた跡くに見えるが、新山を判断する積極的な資料は得られなかった。周溝はいずれも浅く、15~33cm。万形周溝部分の南東隅より遺物出土。(抽図33-11)
8号	南北 11.7 東西 11	1~2.2 (0.4~0.8)	S-74°-W	2.4	円形の周溝墓。周溝は鍋底状で深さ約40~65cm。北側周溝を東流するW-18に切られる。出土遺物はなかった。



2号周溝墓遺構全景

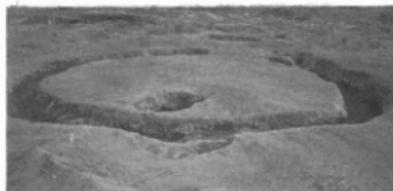


4号周溝墓遺物出土状況



岡版22

5号周溝墓遺構全景



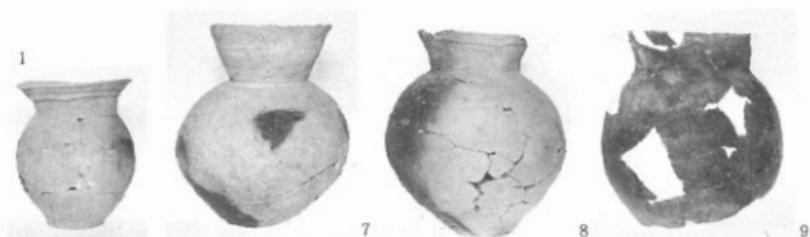
6号周溝墓遺構全景



插図33 周溝墓出土遺物実測図

周溝墓出土遺物一覧表

番号	器種	法量(cm)	技 法 等	胎 土	備 考
1	小型壺	口径 13.2 底径 6.7 器高 17.3	口縁部粘土絆巻上後横ナデ、頸部へラ状工具の木口面を使った調整後ナデ、胴部底部同様に調整後荒いへラ研磨(底部はへラ削り)、内面へラ状工具の木口面を使った調整、胴底部接合削り	若干の石英、小石含有	色調淡茶褐色、胴部一部黒斑あり、成良好、95%残、口縁部2段巻上、底亂作り出し、全体に丁寧な作り、2号周溝墓
4	鉢	口径 17.9 底径 5.0 器高 8.2	体部全面に丁寧なへラ研磨、光沢有り、内面もへラ研磨か(器面が剥離し不明瞭)	多量の小石、砂粒含有	色調橙褐色、口縁付近若干黒ずむ、成良好、2号周溝墓周溝中出土
7	壺	口径 14.5 底径 6.3 器高 25.1	口縁部横ナデ、頸部上、中半にハケ目後荒いへラ研磨で部分的により消す状態を呈す、下半へラ研磨、底部へラ研磨、内面口縁へラ研磨、底部へラ研磨、刷上半部分にハケ目の痕跡残る	多量の小石、砂粒含有	色調淡茶褐色、底部付近黒斑及び茶褐色呈する、成良好、完形、器面が全体に荒れる、4号周溝墓周溝中出土
8	壺	口径 15.6 底径 8.0 器高 28.3	頸部～肩部にかけて木口状工具による細かい範方向調整、胴部上半同様な工具で横方向の調整後、粗い研磨、胴部下半縦方向の調整後研磨、内面を体に木口状工具による調整、頸部は後研磨	多量の砂粒、石英含有	折り返し口縁、色調赤褐色、胴半分黒色、成良好、完形、4号周溝墓周溝中出土
9	壺	口径 16.2	折り返し口縁部頸部胴部上半ハケ目、下半ハケ目後へラ研磨、内面口縁部ハケ目、他はへラ研磨	石英及び小粒子含有	色調黒赤褐色、内面下半分炭化物の付着が黒色呈す、成良好、70%残、4号周溝墓周溝中出土



図版23 周溝墓出土遺物

6. 元城跡



挿図34

乾谷の谷東丘陵末端部に位置する大室元城跡は、単郭の城跡として、明治末年まで遺構が保存されていたと言われるが、地山の赤城起源の安山岩が石材として用いられ、相当削平されて、南側で水田との比高5m、北側堀との比高1.6mのやや南北に長い橢円の丘で桑畠になっていた。トレンチ調査の結果、丘陵の南北および東西で90m前後の距離を置いて丘陵の外に向かう落ち込み、または掘り込みが検出され、この丘陵をほぼ円形に断続して囲んでいることが把握された。特に北西隅の落ち込みは八崎崩れを切り込んで内湾へ西側へ15mほど張り出してテラス状の地形を形成している。このテラスの北端部は井戸と長方形ピット、さらに南に巾がほぼ1.2mで平底の堀が張り出しに平行し丘陵南側まで続くと想定される。この堀中西側から土師質が完形で11個、またその付近表土中から洪武通寶1枚が出土した。内面部落ち込みは、丘陵北側で幅3m程の平底の堀に続き丘陵最高地点の北東部ではほぼ直角に曲がり、南へ12m程の地点で終る。この北東部の堀より外側の方形ピット内から平底内耳鍋断片出土。丘陵東側では、南側の二重の堀に続くと想定される堀が一部検出されたが、北東部との段差が大きいことと調査以前の削平によりはっきりしたことはつかめなかつ

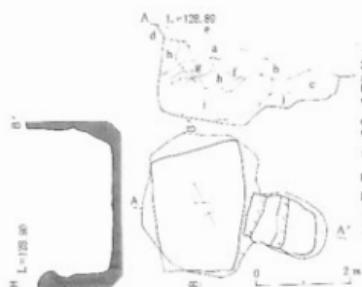


元城跡出土遺物一覧表

番号	器種	法量(cm)	技法等	胎土	備考
1	土師皿	口径7.8 底径4.7 器高1.9	外面ロクロ回転ナデ 底部回転糸切り	金雲母含有 器面サラつく	色調赤茶色、焼成良好、全体が残し、完形
4	土師皿	口径15.9 底径8.7 器高3.0	外面ロクロ回転ナデ 底部糸切り後あらいナデ 内面彫形後ハケ状工具によるナデ	砂粒含有、 器面サラつく	色調桃褐色、底部の一部にスス付着、焼成良好、50%残
6	土師皿	口径7.4 底径4.9 器高1.9	外面ロクロ回転ナデ痕跡残る、 底部回転糸切り	若干の金雲母、長石含有	色調赤茶色、焼成良好、完形
8	土師皿	口径8.3 底径5.0 器高2.0	外面ロクロ回転ナデ 底部回転糸切り	若干の金雲母、長石含有	赤茶色、全面に斑点状にスス付着、焼成良好、70%残
10	土師皿	口径11.1 底径6.9 器高2.5	外面ロクロ回転ナデ 底部回転糸切り	微砂粒子、含有	黄茶色、焼成良好、60%残 歪み有、全體に難な作り
13	内耳鍋	口径36.5 底径34.1 器高6.5	外面回転ナデ後体部下半回転ヘラ削り、指頭圧痕有、内面回転ナデ 後内耳貼付	若干の砂粒含有、均質	外面スス付着し紫黒褐色、 内面底部白褐色、焼成良好、内耳40%残中17cm間隔2コ
14	内耳鍋	口径32.6 底径20.5 器高15.0	外面回転ナデ 特に口部は丁寧、他は凹凸が目立つ、内面回転ナデ後内耳貼付	多量の砂粒 小石含有	外面黒茶褐色、内面茶褐色、焼成不良、底部剥離、40%残、内面に明顯な砂塊が残り、内耳がその上に貼付され、1コ残存

7. その他の遺構

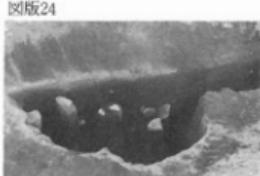
(1) 蔡 城



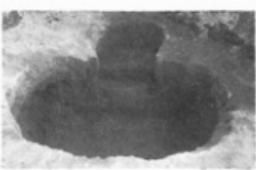
36/36

墓 標 一 賽 表

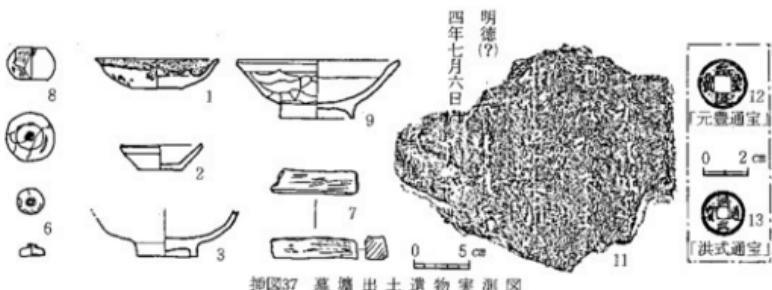
番号	埋葬形態	形 状	規 ()内は深さcm	模
1号	火葬	隅丸方形	295×290 (160)	入口部を東側北寄りに持つ單室構造の墓壙で、東蹴はかく乱が激しく、入口部の構造もはっきりしないが、主室への入口部分床面が凸状に掘り残されており間仕切りを意図しているようである。天井部は崩落しており、その崩落した土層の上層から水輪、青磁瓶（捕図37-3）出土。床面中央部には、埴土（100×90cm、厚さ約10cm）の堆積があり床面下には灰吹の皿、磁石（捕図37-1、7）が出土。床面から30cm程の所から頭骨が出ていているがこの墓壙に直接関係するものかどうか（追跡の可能性も含めて）判断し難い。
2号	直葬？	方 形	215×210 (185)	入口部を南側に持つ单室構造の墓壙。入口部をまざ円形に60cm（85.1mm）程掘り下げ、更に幅70cm程の堅穴を掘り、横に玉室を掘り広げたもので床面は南東窓を除いてはほぼ真角に掘り込んである。主室の天井部は崩落していたが、壁面が上面に行くにしたがって内傾していることからドーム状だったと思われる。出件物が：ないため明確な時期は不明であるが、入口高と文獻のW-10とそれを切り込むW-5の上の土壠は墓壙を削った際の掛土であることからこれらの蔵がある程度埋まった頃に構築されたものと思われる。
3号	直葬？	不整形方	270×190 (180)	階段状の入口部を南東側に持つ单室構造の墓壙。床面は特に踏み固められているといったようなことはなく、撤向はほぼ真直ぐに掘り下げられている。墓壙を埋めている土は床面から5cm程の間隔をはさんでほとんど天井部の崩落したもので、この上層の上面から風輪（部分）板碑、鏡（捕図37-11、12）等を出土す。
4号	直葬？	隅丸方形	295×275 (240)	入口部を南東部に持つ单室構造の墓壙。主室への入口部分は内側3分の2程の所まで高さ5cmの凸状掘り残しがあり、間仕切りを意図しているようである。入口部床面は主室床面より35cm程高くなっていて共に平らに掘っている。主室西隅の所に裏張色の釉質土が検出されたが、性格は不明。壁面はほぼ真直ぐに掘り下げられている。墓壙上はほとんど天井部の崩れたもので、その上層から鏡（捕図37-13）を出土す。



3号墓墙地层断面



3号墓墙遗构全景



插図37 墓 墓 出土 遺 物 実 測 図

墓 墓 出土 遺 物 一 覧 表

番号	器種	法量(cm)	技 法 等	胎 土	備 考
1	灰 雜 陶 器 盆	口径 13.2 底径 6.8 器高 2.7	外、内面丁寧なロクロ回転ナザ、底部回転糸切り未調整 施釉はツケガケ	若干の小石 含有有 均質	色調淡青緑色、他は 淡褐色、焼成良好、完形、 1号墓出土
2	土 師 貝 盆(明徳)	口径 7.6 底径 4.0 器高 2.1	外面ロクロ回転ナザ、底部糸切り 後あらいナザ、内面ロクロ回転ナ ザ	若干の小粒 含有有 石英含 有	色調淡茶褐色、口唇部7ヶ 所スス付着、焼成良好、完形、 1号墓出土
3	青 高 台 磁 瓢	底径 5.4	カサネヤギの痕跡底部に残る 施釉は擦地面、高台の内側、底部 を除き全面	白色及び淡 褐色粒子含 有	1号墓出土

(2) ピット

ピットと命名したものは25個検出された。ピット1はC区最北端に位置し、 $1.5m \times 1.2m$ のやや長円形のプランを持ち、上部がやや開き気味で掘り方は円筒状をしている。床面は平坦で地盤系土器の破片が付着していた。C区で検出された住居と同じ時期のものと思われる。F区ピット10、11は長方形で $2.2 \sim 2.5m \times 1 \sim 1.05m$ 深さ約50cmの規模を持ち、長軸をほぼ南北にして平行して掘られていた。出土遺物はなかったが形態的には墓壙か。D区溝状造構N.5南側とG区南半部に柱穴と思われるピット群を検出したが、G区南端部に掘立柱建物跡1軒を確認したのみに留まりまとまった遺構とはならなかった。

(3) 溝状造構

C区に1条、D区に17条、F区に1条、G区に2条、計21条の溝状造構を検出した。N.1はC区の住居(4号、13号)が完全に埋まりきってから掘られたもので乾谷沼へ向かって一直線に南流している。N.2はD区の北丘陵から南丘陵を縦断している長大なもので、場所によって異なるが大体において幅約2m、深さ約70~90cmで掘り方もしっかりしており断面は逆台形を呈する。この溝状造構を境に東側に5本(N.4、5、12、13、18)がほぼ平行に斜面を走っている。南丘陵頂上部付近に特に水源が認められないこと、重複した住居はすべて切っていること、ほとんど水の流れた形跡がないことなどから区画のための堀ではないかとも思われる。特にN.15は南北約85mで直角に曲がり、その内側に墓壙が集中して検出されていることからもその可能性が強い。(ただし墓壙の排水で一部堀を埋めている) G区N.9も前出ピット群を包み込んだ形で南流している。

(4) 掘立柱建物跡

本掘立柱建物跡はG区最南端に位置するが、造構の東側が調査区域外にあたるため、その全容は

確認することができなかった。しかし、少なくとも東西2間(3.2m)南北2間(3.2m)以上の建物跡であろうと推定できる。柱穴は8個でローム層を掘り込んで作られ、径は0.5~0.6m、深さは確認面から0.5~0.7m、各柱穴の間隔は東西南北ほぼ1.6mを計測した。また南北の柱穴を結ぶと一直線になり、しかも互いに平行であり、その方向は磁北から西へ4°傾いている。尚、この掘立柱建物跡の時期については、他の住居跡や遺構との切り合い関係がないこと、柱穴からの出土遺物がないこと、柱穴を埋めている土に時代を判定する示標層がないこと等から、明らかではない。

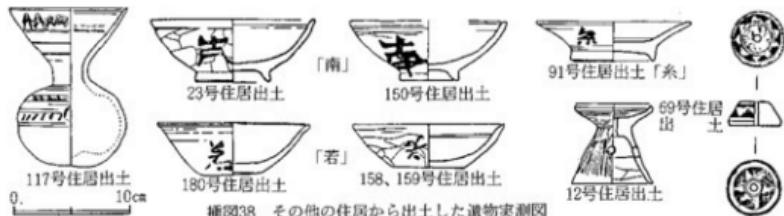
(5) 小殿治遺構(T-1, T-2, T-3)

T-1は、D区北丘陵東南斜面中腹に位置する38号住居(古墳後期)に、ほぼ4m×2.4mの範囲で乗っている状態で検出された。ピット状に住居床面より深い部分もあり、指鉢状に鉄鋸、フイゴ羽口断片、石、土器器坏、須恵器杯の流れ込みが検出でき、9世紀後半から10世紀と考えられる。

T-2は、D区北丘陵頂上付近西南斜面に位置する49号住居(古墳後期)の南壁上部から、住居内にかけて径7m程の範囲で乗った状態で、住居の中心部より北西に及ぶあたりは、床面より深い窪みになり、北西部が急斜面となる指鉢状に検出された。窪み内は更に、3個のピットがあり、その1は住居中央部にあり、底部が40cm×80cmの東西に長い隅丸長方形で、床面から70cmの深さを持ち、上部では大ぶり、底近くでは小ぶりの安山岩が、周囲に刺さるように流れ込み、中から粘性のある黒色土中に、鉄鋸、炭化物、フイゴ羽口断片が検出された。その2は、窪みの北西寄りにあり、径30cmの指鉢状で、上層が青灰色、深部が朱色に焼けた20cm程の厚さの粘土層を持つ。住居南壁からの斜面から、窪みを埋めている粘性のある黒色土中にかけ、多量の鉄鋸、フイゴ羽口断片、土器片が出土している。T-3は、F区南斜面頂上付近に位置する91号住居(10世紀後半から11世紀)に、径2mの範囲で乗り、住居西南壁寄りでピット状に床面より深い部分もあり、多量の鉄鋸、フイゴ羽口断片、土器片が出土している。

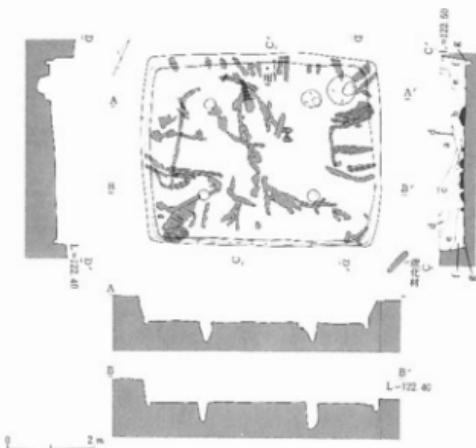
(6) 井戸跡

D区南丘陵南斜面裾野部分、181号住居礎を一部切って掘られている。平面形はほぼ円形で1.9m×1.5m。掘り方は上部がラッパ状に広がって、下に行く程ややすぼまる円筒状を呈している。深さは遺構確認面から2.2mの所で調査を断念しているために不明であるが、更に深く掘れる。ローム層を掘り抜いた壁面はしっかりとしていた。出土遺物はなかった。



8. 梅の木地区

梅の木地区 8号住居跡遺構図

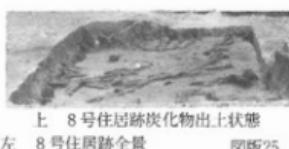


(8号住居跡上層)

- a 暗褐色土層、砂質で軟かく径5mmの大のFPを含む。
- b 黒色土層、砂質であるがa層より締りがあり、FPと小礫を含む。
- c 暗褐色土層、砂質で、a・b層に較べて軽石はわずかであり軟かい。
- d 淡灰褐色土層、砂質で極細粒子、径2~3mmの大の礫を含む。
- e 暗褐色土層、砂質で軟かく、径2cmの大の礫と淡灰質砂岩(橙色)のブロックを含む。
- f 黑褐色土層、砂質であるがe層よりしまりがあり、淡灰質砂岩のブロックを含む。

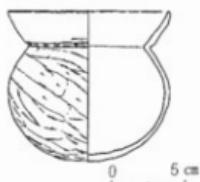


図版25



左 8号住居跡全景 上 8号住居跡炭化物出土状態

插図39



插図40 遺物実測図

B区北端の沖積層に深く掘りこまれている住居群中に属する本住居は、火災住居としての特色をもつ。規模は5.2×4.1mと東西に長く、西壁の走方向はN-25°-Wを示す。床面までの深さは58cmと深く、壁面の切り込みは直に落ちている。壁下にはしっかりとした周溝が巡っている。施設は、東隅に径70cm・深さ47cm内外の貯蔵穴がある。柱穴は4本とも対角線上にのり、深さ80~100cm・径20~30cmをはかる。かまどは見当らず、炉跡と思われる焼土が住居中央から北東柱穴寄りに、長さ30cm・幅10cmの川原石を伴って検出された。遺物は貯蔵穴内から甕、北壁下中央より壇、その他、高杯の脚部・台付甕の脚部の破片(形が確認可能な)が出上した。本住居は、火災住居にしては非常に土器出土量が少なく、完形に近いものは壇のみである。

梅の木地区16号住居跡遺構図

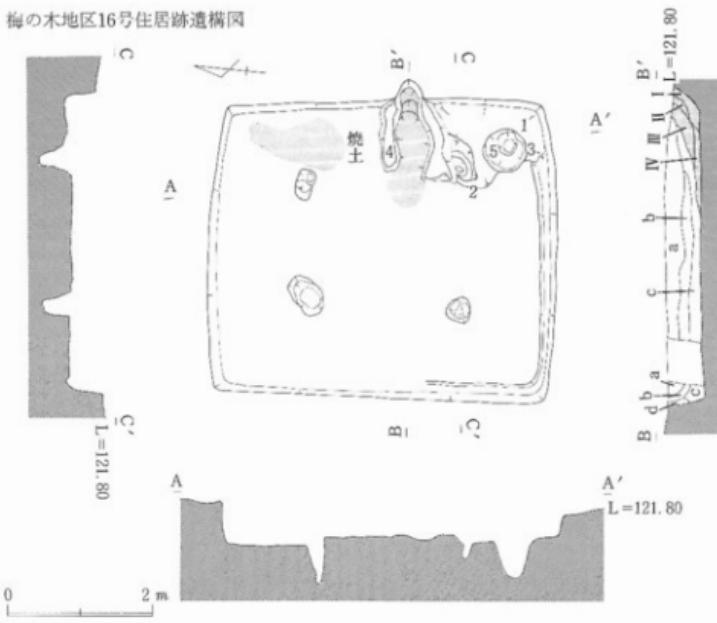
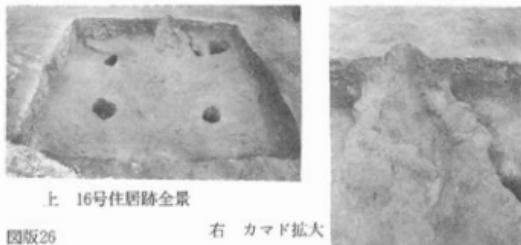


図41



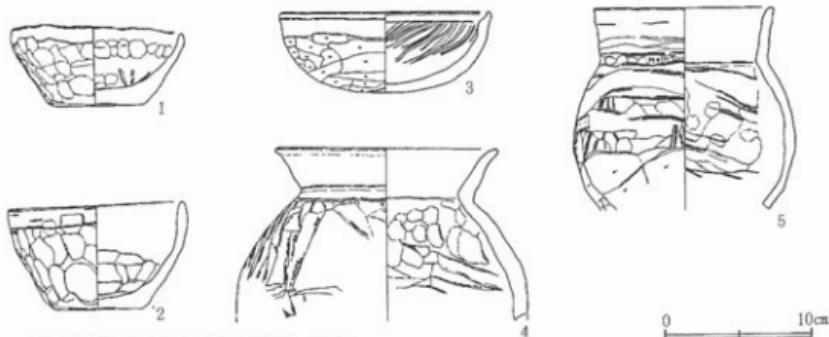
上 16号住居跡全景

右 カマド拡大

図版26

B区中の南端部群に属する本住居は、桂川の氾濫による水性堆積砂礫層中に形成されている。規模は $4.5 \times 4.0\text{m}$ と南北に長く、西壁の走方向はN- 5° -Wとほぼ磁北に近い。住居の掘りこみは51cmと割合深いが、床は南から北へ約15cmの差で傾斜している。床面は南壁付近では粘土質で締っているが、北壁に向うにしたがい砂礫質となり軟かい。壁は砂礫層で脆いが、壁下には南壁から西壁の $\frac{1}{2}$ にかけて周溝が認められる。施設は、東壁中央わずか南寄りに住居内へ大きく張り出したかまどを設置している。焚口幅40cm・奥行130cmを超す長大なもので、わずかに壁を掘って煙出しとして低くだらっとした粘土袖をもつ。煙道部はかなり焼けており、使用頻度の高さを示している。かまど右側には、径50cm・深さ50cmの貯蔵穴があけられている。4本主柱穴は対角線上にあり、対角線の交点を中心として描いた円周上にものっている。柱穴の深さ40~50cm・径20~30cmである。東南の主柱穴はかまどの右袖の粘土に上をふさがれたような状態で検出された。遺物はかまど及び貯蔵穴周辺に甕・壺が出土し、北東隅部には焼土が確認された。特に本住居は、甕の破片（口縁部及び胴部片）の出土量が本遺跡地の中でも最高である。

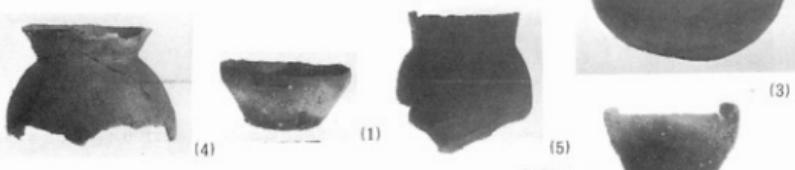
梅の木地区16号住居跡出土遺物実測図



梅の木地区16号住居跡出土遺物一覧表

遺物番号 (写真番号)	器種	法量(cm)	成・整形の特徴	胎土	備考
1 (1)	坏	口径 11.3 底径 6.6 器高 5.4	・平底が形成された。小型の手捏状土器。 ・口縁部横ナデ、体部外面指ナデ。体部内面ナデ、指頭圧痕。ヘラ痕が認められる。底部摩耗。	細繹・粗粒砂を多量に含有。	底部および内面は暗褐色。体部外面に淡い黄褐色。焼きの薄い土器。
2 (2)	坏	口径 11.1 底径 6.0 器高 7.1	・1に比較してやや深い手捏状土器。 ・口縁部横ナデ、体部外面指ナデ。体部内面ナデ、指頭圧痕。ヘラ痕が認められる。	細繹・極粗粒砂を多量に含有。	淡い暗褐色、茶褐色の焼きの薄い土器。
3 (3)	坏	口径(推定) 14.0 底径 5.5	・口縁部はやや内轉し、玉縁状を形成する。 ・口縁部横ナデ、土器を手で持ち徐々に左方向に向しながら、底部右方向へラ晒り。内面はナデの後、右斜め上にヘラ磨き。	粗粒砂・中粒砂を多量に含有。	暗茶褐色をおび、底部中央付近に黒斑が認められる。焼きは良好。
4 (4)	甕	口径 14.8 現高 11.8	・やや受け口状に広がり、口唇部付近でゆるやかに外反する口縁。 ・口縁部横ナデ、側部外面指ヘケ。部分的に横ヘラ晒き。胴部内面指頭圧痕、指ナデ顯著。	少量の中纖・細纖多量の極粗粒砂・粗粒砂を含有。	明褐色を土とし、部分的に灰黒色を帯びる。二次焼成痕を認める。
5 (5)	小型甕	口径(推定) 12.0 現高 13.9	・直立口縁、球形胴に近い形態の土器。 ・口縁部横ナデ、胴上半部外側ハケナデ後横おおよび斜ハケ目。胴下半部外側左側下方へのヘラ削り。胴部内面指頭圧痕および指ナデ顯著。	粗粒砂・中粒砂を多量に含有。	暗褐色をおび、胴部には黒斑が認められる。

梅の木地区16号住居跡出土遺物

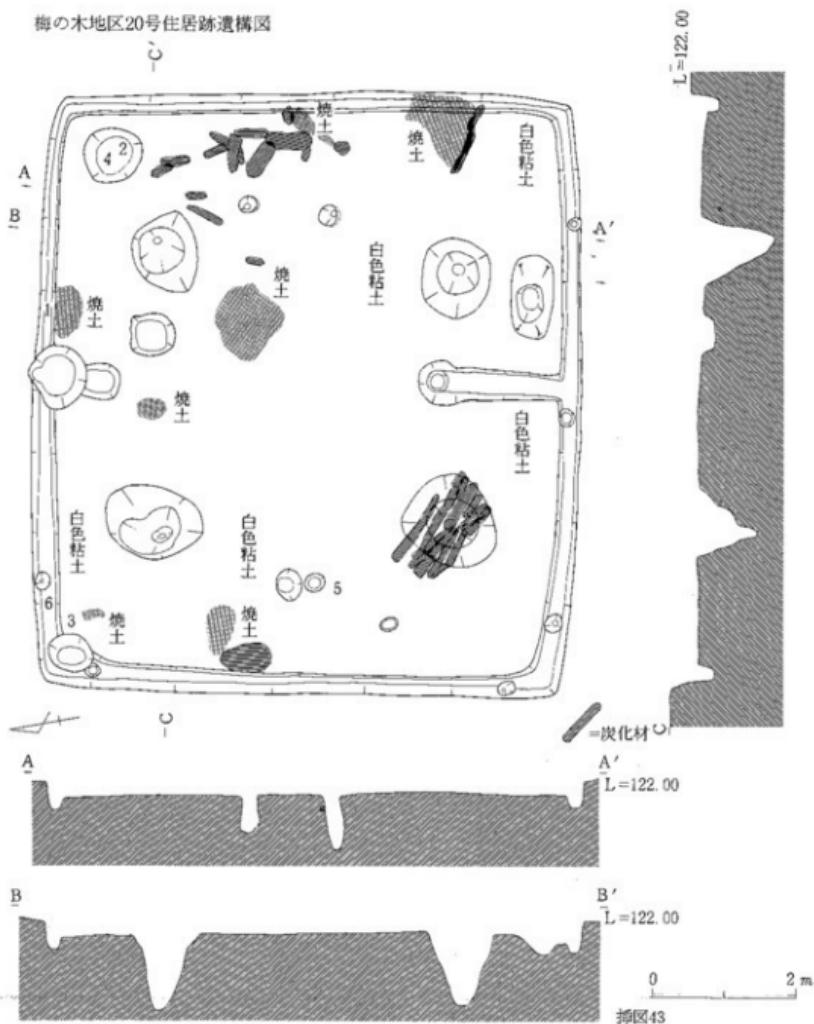


(16号住居跡土層)

- a 暗褐色土層、砂質でしまりがなく、浅間C軽石、FPと燒土粒子を含む。
- b 黒褐色土層、砂質だがわずかに粘性を感じられ、浅間C軽石、FPを含みまた小礫も含む。
- c 黑褐色土層、砂質で灰色の砂質土がブロック状に混入し、浅間C軽石、FPと燒土粒子を含む。
- d 暗灰色土層、砂質であるがわずかに粘性を感じられる。

図版27

梅の木地区20号住居跡遺構図

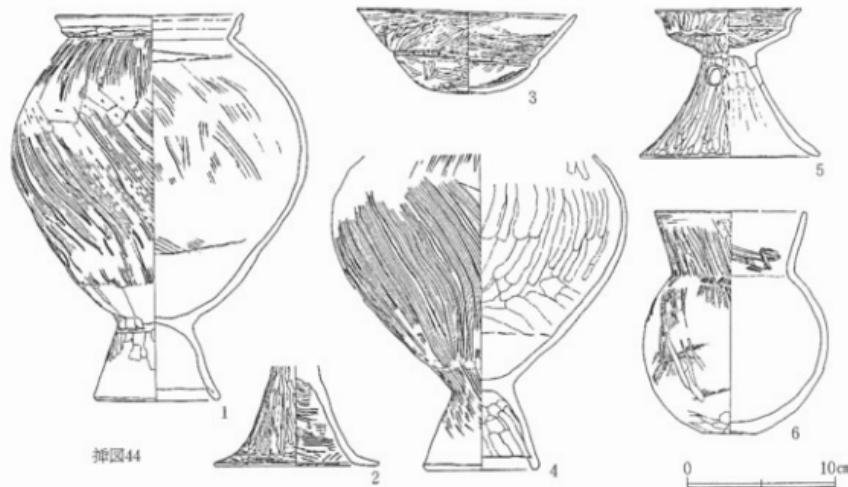


C区の北端に位置し、本遺跡地最大の住居であり火災住居でもある。規模は8.0×7.3mと東西に長く、壁高は39cm内外で西壁の走方向はN-12°-Eを示す。床面は住居中央部が堅く締って粘土を貼った形跡がある。施設は貯蔵穴が北東隅と北西隅にあり、北東貯蔵穴は径80cm深さ75cm、北西貯蔵穴は径50cm深さ45cmで周溝を切っている。住居の周囲には、幅30cm深さ26cm内外の幅広の整った周溝が巡っている。南側周溝内には3個の小ピットがほとんど等間隔に存在し、西側周溝内北西・南西隅に2個の小ピット、北側周溝内北西隅近くに1個の小ピットが検出された。主柱穴は4本



図版28 20号住居跡全景

梅の木地区20号住居跡出土遺物実測図



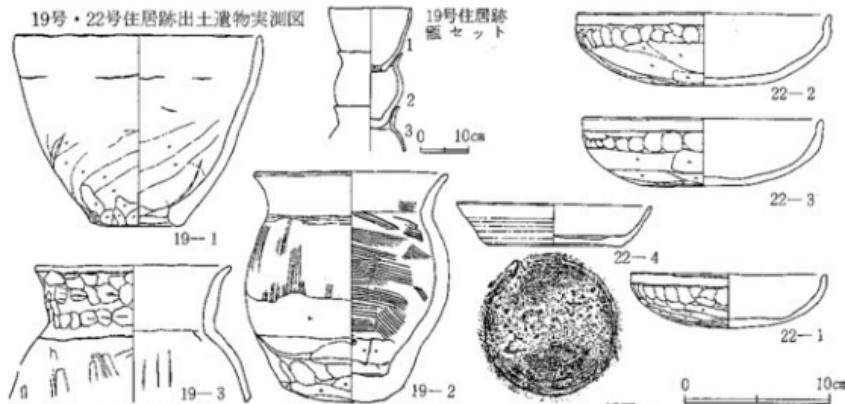
梅の木地区20号住居跡出土上遺物一覧表

遺物番号 (写真番号)	器種	法量(cm)	成・整形の特徴	胎土	備考
1 (20-1)	台付 甕	口径 器高 底径 8.3	ゆるやかなS字状口縁。肩の張り、脚部ハケ日の消滅。胴上半部ハケ目の間に認められるヘラ削りと新しい要素を示す台付甕。	粗粒砂含有。 脚接合部に多量の粗粒砂。	胴上部は淡褐色。胴下部・内面茶褐色。脚部・胴中央部に黒斑。
2 (20-2)	高杯	底径 現高 6.8	やや中膨みの脚部。脚部外面はハケによる整形後ヘラ磨き。脚輪は粗いハケ目。	粗粒砂含有。 精選。	淡褐色。脚部に黒斑。焼きは良好。
3 (20-3)	壺	口径 器高 5.6	浅い底窪。中央に円形の凹み。直線的に広がる口縁部。器面はハケ目後ヘラ磨き。	細胞・極粗粒砂を含有。	淡茶褐色。口縁部には対称的に黒斑。
4 (20-4)	台付 甕	現高 底径 7.5	口縁部および胴上半部欠失。1に比較してハケ目が密に施され、脚部にもハケ目が認められる。胴・脚部内面指による整形顯著。	少量の細胞と多量の粗粒砂を含有。	胴部内面淡褐色。脚部外面および脚部には一次焼成痕顯著。
5 (20-5)	器台	口径 器高 底径 9.6 10.1 12.0	ゆるやかに外反する器受部。器受部・脚部との間に小孔は穿たれず、脚部のみ3孔。器面はハケ調整後ヘラ磨き。脚部内面指ナダ。	酸化鉄粒、極粗粒砂含有。	全体的に茶褐色。焼きは良好。
6 (20-6)	小型甕	口径 器高 底径 10.0 15.1 3.6	直線的に広がる口縁部。球形の脚部。小さな底部。口縁部は頗るかなハケ目。脚部はハケ目の後粗いヘラ磨き。底部ヘラ磨き。	酸化鉄粒を少量含有。軟質。	全体的に淡い黄褐色。器面の側面著しく、底部付近には黒斑。

梅の木地区19・22号住居跡

19号住居跡出土の甌+甌+甌の状態で出土した甌セットは、かまどの左袖に日常そこに置かれたかのようだ。甌と甌の接する部分が著しく摩耗し使用頻度の高さを示す。22号住居跡出土の大中小三枚組土器杯は、同成形で三枚が重なった状態で出土した。他に、全面ヘラ調整須恵器杯が出土した。

19号・22号住居跡出土遺物実測図



梅の木地区19号住居跡出土遺物一覧表

遺物番号	器種	法量(cm)	成・整形の特徴	胎土	備考
19-1	甌	口径 器高 孔径 16.6 13.1 4.0	口縁部の成形痕をとどめる鉢形甌、焼成後に穿孔。口縁部横ナデ。体部外側熱め上方へラ削り。底部付近細かなヘラ調整。内面体部下半へラ削り一周。	少量の細繊維と、多量の粗粒砂や中粒砂を含有。	淡い暗褐色。対称的位置に黒斑を認める。器面は著しく剥離。焼きは薄い。
19-2	甌	口径 器高 底径 13.1 15.9 8.2	口縁部はゆるやかに外反。肩下半部には屈曲が見られ、不定形な底部に接合する。口縁部横ナデ。肩上半部には擬ハケナデ。下半部および底部は横ヘラ削り。肩部内面粗いハケ目顯著。	中繊維と細繊維は少く含有し、粗粒砂は多量に含有。	全体的に赤味を帯びた淡褐色。口縁部は著しく摩耗し、削離。胎土表面は薄く剝離している。
19-3	甌	口径 現高 13.1 9.4	直線的に立ち上り、口唇部でゆるやかに外反する口縁。横ナデを施すが成形時の痕跡明瞭。肩部外面ハケナデの上に粗いヘラ磨き。内面横ハケナデ。	中繊維、細繊維、粗粒砂等を多量に含有。	淡い茶褐色。口縁部周辺に二次焼成痕を認める。

梅の木地区22号住居跡出土遺物一覧表

遺物番号 (写真番号)	器種	法量(cm)	成・整形の特徴	胎土	備考
22-1 (22-1)	杯	口径 器高 3.7	底部中央は厚く、指埴圧痕が残る浅い杯。口縁部は横ナデ、底部は左方向へラ削り。	粗粒砂・中粒砂を含有。	全般的に淡褐色で、内面は摩耗している。
22-2 (22-2)	杯	口径 器高 17.2 4.9	内湾し、口縁部でやや外反する口縁。口縁部横ナデ、底部へラ削りを施した大型の杯。	細粒砂を多量に含有。	淡褐色で、口縁部内面に著しい摩耗。
22-3 (22-3)	杯	口径 器高 16.3 4.6	口縁部がやや直線的に広がる大型杯。口縁部横ナデ、底部左方向へラ削り。指頭圧痕。	細粒砂を多量に含有。	全般的に淡褐色。焼きは良好。
22-4 (22-4)	須 恵 杯	口径 器高 13.1 2.9 底径 8.8	ロクロ右回転に用い成形。底部切り離し後底部全面へラ調整。体部の半周に自然釉がかかる。	含有藍色の溶出、黒色斑点状に存在。	淡い暗灰色で、焼きは堅敏である。

堅穴住居跡遺構一覧表(梅の木地区)

生居番号	形 型	状 向	規 模(= 長 腹 × 頭 隅) 壁 高 (cm)	床面積 (m ²)	か ま ど 位 置	か ま ど 幅 (cm)	周 边	柱 穴	貯 貯 容	備	考	重複関係
1	方 N-35°-W(東)	形	4.00×3.80 25	15.2			○	○	(2)円	火炎住居。燒土が厚く堆積し、その下から大量の 土器片、燒土片が出土する。	①→2	
2	方 N-22°-W(西)	形	3.60×3.52 28	12.67	東壁中央	粘土・支脚 に盛合 35	○	○	(1)円	黒色土上に粘土でカマドを作り、床ともしたローレム屋。	1→2	
3	カマドの中央 主軸 N-25°-W(西)	形	?	?	北	壁	粘土・植 支柱 50	?	○	H-1に切り込んでいる部分は粘土。 黒土直に張り込まれている。	1→3	
4	方形or長方形 N-29°-W(西)	形	3.50×?	?	?	?	○	○	(3+α)円	前壁住居に側に着て白色粘土。 カマドは未発掘。	②→6	
5	N-1°-W(西)	形	4.10×3.00 28	12.30			○	×	(1)円	側仕切りあり。床面がテコボコ。 前壁はほとんどない。	③→6	
6	長 方 N-26°-W(西)	形	4.00×2.60 41	10.40	北壁中央	粘土40 カマド内土 輪环	○	×	(1)円	夷歎一部土器、床面は堅くしまっている様子。 カマドは北壁からだと焼土の塊めが流れた様子。	5→6	
7	隅丸方 N-37°-W(西)	形	5.00×4.80 39	24.0			○	○	(4)円	砂場に張り込んでいたためかわたりに「くい」。 中央に腰壁あり。燒土は堅くしまっている。		
8	長 方 N-25°-W(西)	形	5.20×4.10 38	21.32			○	○	(1)円	腰壁も砂場。腰壁は堅くしまっている。 焼物出しが非常に少く、焼物は中空にていて、いるが少品質。		
9	長 方 N-25.5°-W(西)	形	4.40×3.80 28	16.72			○	○	(1)円	黑色土層(後段層)に織りこまれて焼成した黒色土。		
10	方 N-37.5°-W(西)	形	3.50×3.30 23	11.55	東壁中央	粘土50 カマド内土 輪环	×	○	(1)円	腰壁は中空で、かたなくしまっている。 カマドは腰壁から張らざるに粘土を纏つけて作る。		
11	方 N-0°-W(西)	形	4.60×4.30 44	19.78	東壁わづか 石製支脚 (川原石)	?	○	○	(1)円	腰壁(黒色土)である。腰壁穴中に織 物の作りはH-10と同様。腰壁は砂質でもろ い。		
12	隅丸方形or長火葬 N-11.5°-W(西)	形	4.30×?	?			×	×	×	H-13に半分以上を切られているためプランは 定かでない。	12→13	
13	方 N-23°-W(西)	形	4.10×4.00 58	16.4	東壁わづか 寄	粘土50	○	○	(1)円	腰壁仕切りと考えられるものもあり。カマドはH-1 に、11と同様の作り。	12→13	
14	方 N-21.5°-W(西)	形	6.10×5.80 60	35.38	北壁中央	粘土60	(一部)	○	×	腰壁(黒色土)が少ない。カマドの粘土袖 がダラツ。	19→14	
15	方 N-13.5°-W(西)	形	3.90×?	?	?	?	○	○	?	腰壁は調査区外のため灼痕部分を残す。		
16	長 方 N-5°-W(西)	形	4.50×4.00 51	18	東壁わづか 寄	粘土40	(一部)	○	(1)円	腰壁(黒色土)が残す。		

住居番号	形態	柱高	見模(長さ×高さ) 壁面(cm)	外面積 (m ²)	か、ま、ど 位 置	か、ま、ど つ、く り 編 (cm)	周 溝	柱 穴	貯 藏 穴	備 考		重複関係
										(数字の単位はcm)		
17	方 N-17°-E(西)	形	5.60×5.30	29.68	東壁南寄	粘土50 支脚・柱・窓	○	(4)	○ (円)	火災住居。カマドは粘土を多量に使って堅固に作られている。壁は砂質層。	カマドは粘土を多量に使って堅固に作られている。壁は砂質層。	17→18
18	?	?	?	?	?	(黒色土の上)	?	○ (3+α)	×	H-17°-E(西)には黒色土上に作られるため火災が確認できる。カマドが隣接できなかったためブランクが隣接できなかった。	隣接区域外のためブランクが隣接できなかった。	17→14
19	?	?	?	?	?	粘土50	?	?	?	調査区域外のため火災が隣接できなかった。	カマド周辺の土器出土量が多い。	14
20	長 方 N-12.5°-E(西)	形	8.00×7.30	58.4			○	(大4) (小8)	○ (2,円)	敷居柱間約25cm～30cmの厚漬が金網としている。北東端で柱の脇に短跡があり。	敷居柱間約25cm～30cmの厚漬が金網としている。北東端で柱の脇に短跡があり。	
21	N-5°-E (カマドの中心線)	?	?	?	北	粘 粘土	?	?	?	壁の立ち上がりが不明確。カマドのみ把器可能。	壁の立ち上がりが不明確。カマドのみ把器可能。	
22	方 N-20.5°-E(西)	形	3.10×3.00	9.3	東壁角寄	粘土40 砂質層 灰岩	×	×	○ (円)	薄灰色の粘土質土に覆りこれまでに火災が非常に多い。焼成土房。全間に粘土散布。	薄灰色の粘土質土に覆りこれまでに火災が非常に多い。焼成土房。全間に粘土散布。	23→ビット
23	長 N-10°-E(東)	形	4.80×3.90	18.72	東壁南寄	粘土80 カマド内に 内	×	○ (2+α)	○ (円)	住居部の西側部分が焼成井戸状ピットに切られて立つが砂質層。柱はしまりがない。	住居部の西側部分が焼成井戸状ピットに切られて立つが砂質層。柱はしまりがない。	23→ビット
24	方 N-5°-E(西)	形	5.90×5.90	34.81	東壁南寄	粘土60 石製支脚	○	○ (4)	○ (長方形)	柱は直立・カマドは横が長くよく燃えている。遺物は南壁に多い。	柱は直立・カマドは横が長くよく燃えている。遺物は南壁に多い。	
25	長 方 N-6.5°-W(東)	形	4.40×3.80	16.72	東壁南寄	粘土48 カマド内土 灰岩	×	○ (4)	○ (横円)	壁で燃えている。カマドの柱長く、カマド先端に砂質層に埋り込まれる。南壁に張り出し。貼床	壁で燃えている。カマドの柱長く、カマド先端に砂質層に埋り込まれる。南壁に張り出し。貼床	
26	方 N-6.5°-W(西)	形	3.90×3.80	14.82	東壁南寄	粘土30 カマド内 内	×	○ (4)	○ (円)	東壁部のみ調査可。カマド周辺に焼土多	東壁部のみ調査可。カマド周辺に焼土多	
27	N-19°-W(東)	?	?	?	東	粘土30 支脚・窓	?	?	○ (円)	レシチにかかったのは全体の1%。漫罰Bの堅石と底とも砂質土。	レシチにかかったのは全体の1%。漫罰Bの堅石と底とも砂質土。	29
28	長 方 N-4.5°-B(東)	形	2.30×?	?	東壁南寄	壁を切り込 む	×	×	○ (円)	トと底とも砂質土。	トと底とも砂質土。	29
29	長 方 E(東)	形	3.90×?	?	東壁南寄	粘土30 柱・円筒埴 輪	×	×	○ (円)	カマド断面のみ確認。	カマド断面のみ確認。	28→29
30	?	?	?	?	?	?	?	?	?			

遺物一覧表(鶴の木地区)

住居跡番号	土				陶				丸底タイル				瓦				漆器				
	a1	a2	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	須恵器タイル	瓦類合計	楕円	脚付	漆器	壺	高台	器台	その他の
1	1	1	1	1	1	2	4						7	大1 7個	3	1(5)	2		土器量多		
2										2			2	4	1	1	1		磁石1		
3			1		1		1		1	1			4	4(2)		1	1		磁石1 増加カマド内		
4	2									(1)	2(1)		1						土製品1 北壁西側に沿り		
5					1	1	2			3	7		5(3) 1(1)	1				1		漆器箱のハケ 目がついて粗糲	
6	1				2				1	1	1	2	8	3(1)	2	短1 (1)	1				
7													3					3	3	1	
8													3					3	1		
9													4					(1)			
10		1			1	1	1	1		5			大1 2(8)	1(?)				(1)		环に墨高1 の棒消(カマド内)	
11		1	1	1	1	1	(1)	(1)		(1)		2	6(9)	4	筒1 2(8)	2					
12													2	1							
13	1	1	1			1	1			大1	7		特大2 小4	3			2				
14									1	1	3		3(3)	大2 小1	小(1)				磁石1 石製品1		
15									1	1	2		4	2(1)			1				
16	2	1			3	1				1	2	9	9(2)		短1	(1)					
17						1	3	3	3	2		12	4(9)	大1 中1	1	(2)					

住 居 跡 番 号	土		面		底		タ イ プ		須 患 器		類		漂 浮 用 土 器		高 壙		器		そ の 他
	平底タイプ	a2	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	塊 類 合 計	脚 付 鍋	壺	蓋	环	壙	台
18																			
19	1	1	1							2	1		大1	9	6(3)	1	小1	1	
20													小2						
21													9				小1	5	4
22																			1
23																	大1		
24	2				1	1	1	2		3	3	1	3	16	9(1)	3	15		
25										1	1	1	大1	8	大2 中10(7)		(1)		
26	1	1												2	7(3)	2			
27		1											1	4	2	1(2)	3		
28																			羽签 1
29																			光明面 2 鏡合輪、円脚輪
30																			カマド断面のみ

遺物の数は、生括跡につくものの個数。()は小片。

a1 = 平底、内斜口縁 a2 = a1の丸底タイプ b = 平底、外反口縁(瓶型)

c = 平底、内わん口縁

d = 丸底、外反(長)口縁
e = 丸底、内側に棱有口縁 f = 丸底、内斜口縁 g = 丸底外反(短)口縁 h = 丸底、内わん口縁

i = 素燒器タイプ、直立口縁

j = 素燒器タイプ、外斜口縁 k = 素燒器タイプ、内斜口縁

9. まとめ

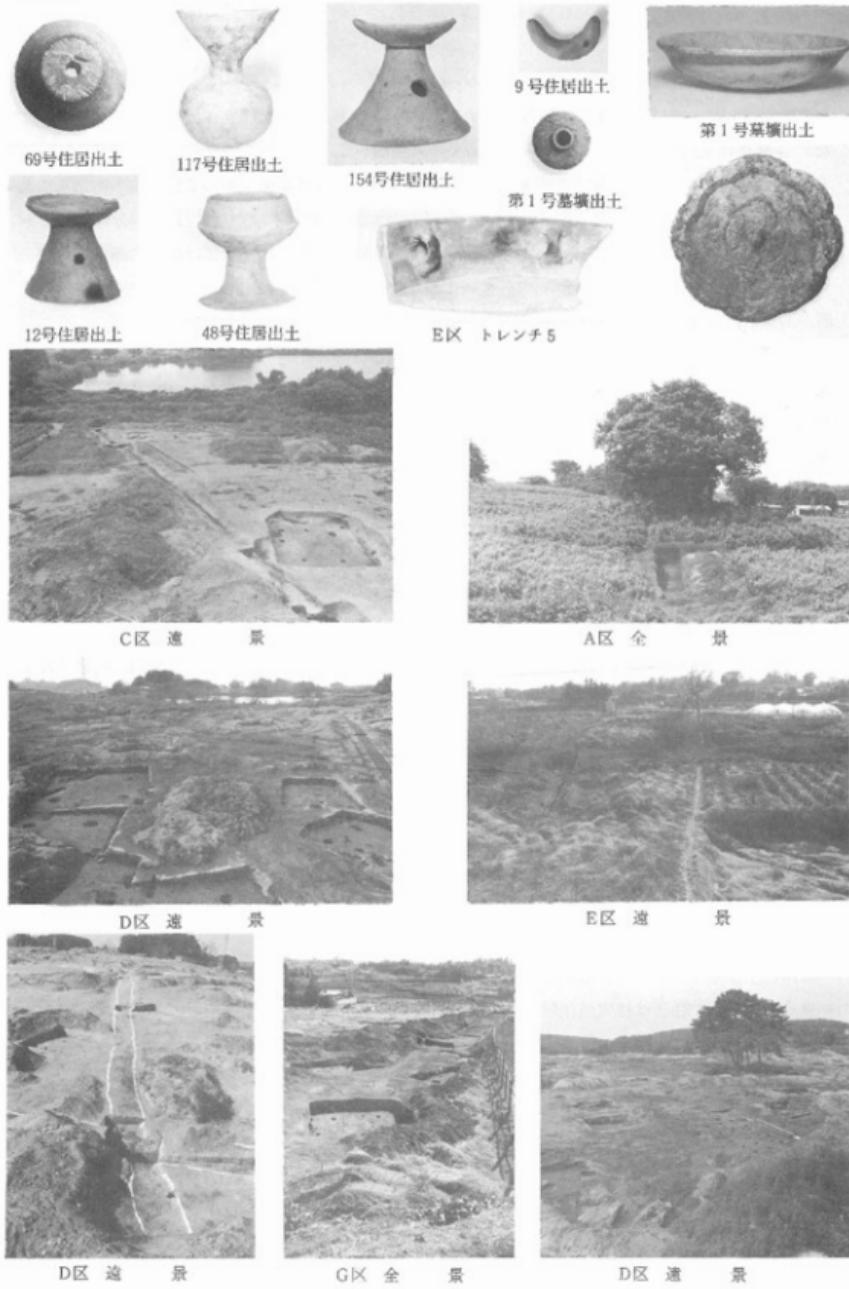
昭和56年度の調査では以下のことが確かめられた。

- 荒砥村第62号、64号墳を確認、調査した。第62号墳は残っていた墳丘4分の1と周堀を調査した。主体部は完全に消失していたが、墳丘盛土の基盤層が二ツ岳系軽石を含む黒色土層であったこと、墳丘に葺石がなく、埴輪片を少量出土したことなどから6世紀後半から7世紀前半あたりに築造時期を比定しえようか。墳丘規模は推定で直径約24m。第64号墳は取り付け道路部分にかかる34mのトレンチ調査をしたのみであったが上幅約11mの周堀を確認。墳丘規模は直径約36m。
- C区は埋土中に浅間C軽石を含み、弥生式土器を伴う住居13軒を検出した。赤井戸系、樽系の土器が共存し、また、石田川系の影響もみられ、各々の住居間には多少の時期差があるものの全体としてはC軽石降下以降、4世紀後半あたりの古墳時代移行期に比定しえようか。D区は15軒の弥生式土器を伴う住居を検出した。C軽石純層が埋土中に検出された住居（172号、179号住居）を除いては樽系の構造文土器がC区に比べて多く、石田川系の土器も混在していて全体としてはC区とはほぼ同じ時期と推定される。
- 集落の主体をなすものは古墳時代後期鬼高Ⅱ～Ⅲの時期の住居で108軒を検出した。6世紀後半以降7世紀代が中心になると思われる。
- 奈良時代後半から平安時代にかけての住居は40軒検出した。下限は生活用品が土器だけに限定され、土釜が出現する11世紀代以降と思われる。
- 周溝墓はD区南丘陵に渡りのあるもの4基、F区に渡りのないもの4基を検出した。いずれも埋土中にC軽石を含み、出土した土器からはほとんど時期差が認められず4世紀後半に比定されよう。
- 昭和55年度調査に引き続きD区丘陵東側縁部分に中世の墓壙4基を検出した。板碑（明徳4年？～1393年）、銭（元豊通宝～1251年以降、洪武通宝～1368年以降）を出土した。
- 大室元城跡は、径90mのはば円形に設定され、プランにそって内側に部分的に断続しながら堀が造られ、遺物はその中から集中して出土した。

梅の木地区

- 竪穴住居跡は古墳時代前半から在り、鬼高Ⅱの時期から真間期にかけての遺構が検出されなかつたが国分期になると再び検出されるようになる。全部で30軒を調査。
- 集落の主体をなすものは古墳時代後期鬼高Ⅰの時期の住居で16軒を検出した。
- 鬼高Ⅰの時期の住居は柱穴が住居の対角線上に乗り、かつ対角線の交点を中心とした円周上にも乗る例が多く、貯蔵穴の位置とともに極めて企画性が強い。また、梅の木地区ではこの時期から煙道部が壁外にほとんど出ず長い粘土袖を住居内に張り出した竈が多く付設されている。
- 古墳時代前期から中期（石田川期～和泉期）にかけての住居は6軒中3軒が火災住居であった。

図版29



图版30



6号住居跡遺物出土状態



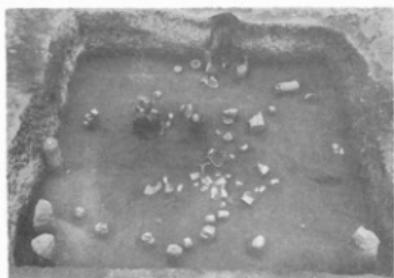
12号住居跡及び自然石堆積状態



52号住居跡遺物出土状態



52号住居跡カマド遺物出土状態



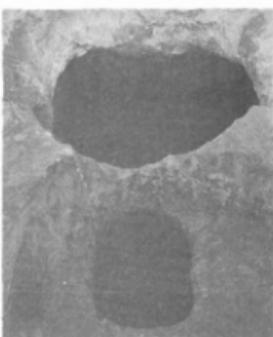
44号住居跡遺物出土状態



44号住居跡カマド遺物出土状態



126号住居跡遺物出土状態



2号基壇

図版31



梅の木地区遠景（東より西を望む）



22-4



22-1



22-2



22-3



19号住居跡瓶セット



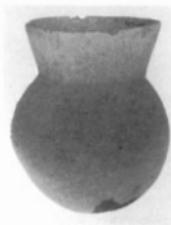
横セット出土状態



8号住居跡出土上遺物



20-2



20-6



20-3



20-1



20-5



20-4

整理作業員	金井 君江	亀井 弘美	柴崎まさ子	鷹巣 大城	中東 彩子
洞口恵美子					
発掘作業員	久保千代子	根岸 いく	小保方静子	入沢 やい	天沼キヨノ
橋本 タキ	内藤美代子	牧野せつよ	吉田 寿代	小林 初子	星野 晨男
天沼福太郎	小屋 政雄	高橋 省三	石井長太郎	大沢くに子	吉田かほる
吉田美智子	棚橋きぬ子	高橋やすの	星野ちか江	山田 記子	松本 保
萩原 信幸	吉田婦志子	根岸うめの	滝沢 靖	萩原 英子	梅沢 晋
吉田 節也	上原今朝雄	吉田 節子	下山 良雄	阿久沢岩吉	羽鳥 韶
細谷 文雄	登山 健一	木村はる子	岡 好江	内田 こう	阿部 ふく
内田 マツ	内田みつ代	茂木 光子	岡 たけ	伏島 栄子	関根 勝美
吉田アツ子	関根 汀	吉田 静江	須藤東亜子	石井 春枝	久保 ヒデ
久保もり子	棚橋うし子	萩原 操	森田はるゑ	萩原チエ子	内藤 たか
萩原 和子	山田 きみ	木村かく乃	内藤きん子	藤原サト子	浜岡 きく
浜岡 秋仲	星野 さと	古松英太郎	横沢 信子	荒木 安治	細谷 重子

（順不同）他、多數の方々に御協力いただきました。

富田遺跡群

西大室遺跡群

昭和57年3月31日 印刷

昭和57年3月31日 発行

発行 前橋市教育委員会
前橋市大手町二丁目12番1号
印刷 有株会社原田印刷所